
ネギま！の世界で魂生成～キティとのラブイチャ日記～

百合姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！の世界で魂生成～キティとのラブイチャ日記～

【Zコード】

Z8536R

【作者名】

百合姫

【あらすじ】

急性アルコール中毒で死亡した主人公がネギま！の世界で適当に生きる話。

転生物が書きたくてやつた。

後悔はしない・・・こともない。

微妙に原作介入しつつもしかし、第一目標はただ生きる」と。
方針は基本的にギャグティスト。

適当に頑張つてみる。

タイトル変更。

変更とこよりは付けたしですが。

一〇三 やまと長めのプロローグ（前書き）

勢いとノリだけで一気に書き上げてみたプロローグ。
裏で暗躍する主人公を書いてみたくなつたから仕方が無い！
評価、批判などはお手柔らかにお願いします。
アンチにはならないと思つ。

一〇三 ひょっと長めのプロローグ

僕は死んだ。

享年21歳。

まあしようもない理由だ。

急性アルコール中毒。

自棄になつて一気飲みをした結果こうなつた。

いやね、今の世の中内定が決まらないのなんのって。自棄の一つや二つ、起こしてもしようがないってね。んで、ぼんやりと両親に申し訳ないなあと思いながら死んでったワケですが、今よくわからない空間にいます。

真っ白のような真っ黒のような。

矛盾してることを言つてるのは分かつてるんですよ。でも、そう表現するしかないような——ありていに言えば、不思議空間にいるわけです。

特別信仰心も無かつたので、死んだら何も無いと思ってたから、死後の世界。

すなわち死んだ先があるといつのは純粹に嬉しかつたりする。んでもつて、さらに不思議なことに田の前には金髪幼女がいた。

「どなた?」

ついほやいたのも仕方ないとと思つ。

これまたありていに——状況的に考へるならば神様とか、閻魔大王だとか、そんな感じの存在なんだろう。

「うんうん、良い具合に落ち着いてるね。

最近の現代人は想像力豊かなせいか、説明の手間が省けて良いよ。」

可愛くもなまめかしい声で、はつらつと語る少女。
話の内容が全く読めない。

「私の名前は無い。

君達で言つ神様。その概念に近いものと思つてもらえればいいよ？」

神様か・・・夢と言うわけでもなさそだからとりあえず信じよう。
というか現在の不思議空間と、はっきりと死んだ記憶があるのでこ
の辺は信じるしかない。

それよりも気になつてゐることがある。

「神様つて金髪幼女なんだ・・・」

昨今の萌文化を具現化したような存在だ。
神様も意外と流行に敏感なのかもしれない。
俗世間にまみれた神様に絶望したつ！！

「あはは。違うよ。私にコレといった個は無く、これと言つた姿も
無いよ。」

何を言つてらつしやるの？

「私には“意思”しかないってことだよ。

私の今の人格、姿などは君が無意識的に神様に抱くイメージつて所
かな？

現在喋つてるこの言葉も君にとつては言葉として認識されてるかも
しれないけど、私からしたら単に“意思”をぶつけてるに過ぎない。
言葉と言つ文化になれた君の頭が無意識的に意思を言葉と言つ形に
変換してるだけなの。」

えへっと？

つまつぱりこひ」と？

「そうだね。

例えるなら、君がアリだったら、私もアリの姿で、言葉ではなく触覚で意思疎通をしていたってことだよ。」

えへっと？

とりあえず相手によつて姿を変えるひとことだよな？

「そうこひ」と。

それで、話を進めるけど結論から言へば転生だね。転生をしてもういます。」

「転生つて・・・輪廻転生の転生？」

「やうなるね。」

ソレすなわち、またの人生を楽しめるところのことだ。

ありがたいけど、転生なんてそつぱいぱい誰でも出来るのかな？

「もちろん。

といふか死んだ生物にはバクテリアなどの細菌から人間に至るまで転生してるんだよ。

世界には魂の数が決まつていて、ソレが循環してるわけ。」

ほうほう。そんな裏事情が。

とこうかこんな説明をいちいちしてゐるのだから？

「ひたるね。

とこうか私としては意思をぶつけただけ。

それを君たち生物が勝手に理解するから手間なんて無いに等しいよ。
時の概念も無い。」

カラカラと笑いながらそう答えた金髪幼女。
やけにフランクな神様だ。

いや、先ほどの説明的に僕にとっての神様像がそういう認識になつ
ているのだろう。

まあそこは置いておく。

「記憶とかは・・・」

「もちろん消えるよ。前世の記憶を持つ生き物なんて見たことない
でしょ？・・・と言いつてこりなんだけどね。
君にはやって欲しいことがあるの。」

「やつてほしいこと？」

「これまた結論から言えれば世界の創造を手伝つてもいいたい。
「世界の創造？」

なんか話が大掛かりになつてきた。

「適当に君を選んだから嫌なら嫌で良いけどね。
どうする？」

もし手伝ってくれるなら、報酬として今の君の人格をそのままに想
像した世界で好きなだけ生きれる能力を与えるけれど。」

うつむ。

力うんぬんはともかくこのままでは記憶が、人格が消えるのだから
断れるはずも無い。

「・・・えと、じゃあお願いします。」

「手伝うつてことでいいのかな？」

「そこや！」とじんじこにけど？」「

「まあ・・・このまま消えるよりはマシかなと・・・」

「おひけ～。んじゃまあそぐ。

創る世界は「ネギまー」。死ななことは思ひたがぢ、死なないよひでんばつてね？

少なくとも1000年くらいは生きてもらわないと困るから。」

「は、はこつ！？」

「ネギまーってあれか！？漫画のつ！？
とこつか、なぜにそのチョイスつ！？

「私の趣味かな。」

「マジかよつー？」

「いこや、ウソだよ。」

「ウソかよつー？」

「魔法のある世界を創つてみたいと思つて、適当に選んでみただけ。
それじゃ行ってらつしゃー。」

「い、いやつ！？」

「ちよ、ちよつとまつ！？」

「まだ、詳しいことを――ひこあり！？」

突如足元に穴が開き、重力が無いように思えるこの空間なのにも関わらず重力にしたがつて落ちていく僕。
重力と言つるのは引力と言つたほうが正しいか？

「ちなみにネギ君との二卵性双生児として生まれるって設定だから。私個人の趣味で君の外見は男の娘。

がんばってねえ～っ！」

とかいう金髪幼女の声が聞こえた気がするが、一すじとら銳意落下中でそれに耳を傾けてる余裕は無かつた。

こうして僕は世界の気まぐれによる世界の創造を手伝つため。ネギまの世界に産み落とされることとなつた。

はい。

というわけで始まりましたネギま世界における僕の人生。

現在3歳。

1~2歳の頃にも前世の記憶があつたにも関わらず、その記憶を受け入れる脳自体があまりにも未熟なせいかぼんやりとしか覚えていなかつたりする。

記憶があれば、なんで僕とネギを産んでそのまま故郷の人達に任せたのか分かりそうなものだけれど、残念ながら覚えていない。

3歳になつて、ようやく体に精神が定着したーーーそんな感じである。

ちなみに見た目は母親であるアリカ王女の幼少の姿つて感じ。

男性ホルモンに真正面から喧嘩を売つているような外見だつたりする。

単純に見てる第三者側としてならともかく、自分が男の娘となると複雑な思いがある。

漫画やアニメである女装して実は男だと驚かせる展開は、好きなのだがそれはあくまでも自分がやらないからであり早い話、自分がやるとは思つても見なかつた。

初対面の人には必ず驚かれたり、未だに女の子だと勘違いしてる人も多々いるが、面白そなのでそのままにしてたりする。

そんなわけでネカネ姉さんのお世話になつてゐる僕です。

精神年齢がいかに肉体に引っ張られようとも、現在24になる精神年齢の僕からしてみるとネカネ姉さんの過保護振りがうつとしいと思つてしまふのは仕方が無いことだと思つ。

とはいへ相手は善意からくるものだから下手に無下にも出来ず。なおかつ3歳児の演技をしなくちゃならないのは面倒なことこの上ない。

名探偵コーンの主人公であるコーンに尊敬の念を感じずにはいられないここ最近。

周りが英雄の息子だからと簡易式の杖を貰つたのはありがたかったりする。

さつそく魔法の矢であるサギタ・マギカを覚え、前々からやつてみたかつた特訓をしてみた。

ちなみに属性は闇。

黒い矢とか力ツコいいじゃないということで覚えてみた。

闇属性に対する相性があまり良くないみたいで、溢れんばかりの才能をもつてもちょっと苦労したのは良い思い出である。

「リストル・マステル・アリストル。

魔法の射手　闇の3矢！！」

ちなみに場所は村から離れたちょっとした森。魔法の始動キーである「リストル」アリステル」部分は適当。

放った矢をコントロールして自分に向ける。

そう、コレが僕のしたかった修行。

もといドラゴンールで主人公の孫 空がナ ック星に向かう際、宇宙船内の修行で自分の必殺技を自分に射ち放ちソレを撃破するという修行があった。

それを参考に、今やつてみたのである。

ぶっちやけ、かめ め波でないのが残念極まりない。

「さあ来いつ！…全て打ち落とし——ぐぼほつ！？」

予想以上に速い、重い、魔法の矢が鳩尾にクリーンヒット。

「ぐ・・・ぐぐ・・・」

あまりの一撃にたまらずづくまる僕。

やばい。

吐きそう。

結局吐いたんだけどね。

吐きながら一度とこんなバカなことはしないと誓つた僕である。所詮、ただの地球人にサイヤ人の真似事は危険すぎたということだろう。

うん。

そんな感じで適当に修行をしつつ、ネカネ姉さんは学校の教師をし

てるため、たまにつれでもらっては、魔法書を読み込み。

ただひたすら適当にこつそり修行をするといつ毎日。

師匠が欲しいなと思う今日この頃です。

そして4歳になるころにそこそこ使い勝手の良い魔法を多々覚えてしまった僕であった。

サウザンドマスターと王女の血はすごいなあと関心を通り越して、呆れるばかりである。

もちろん、努力の甲斐もあるけれどね。

校長にはばれてた節があるけれど、接触してこなかつたので無視した。

多分英雄の息子なら間違ったことには使つまい・・・みたいな色眼鏡で見ていたのだろう。

子供の僕が学んでしまえば危ない魔法とかでも渋々見なかつたことにしているみたいだつた。

英雄の息子だらうとなかろうと子供に対して見せべき物と見せないべき物を分けるくじこのこととするべきだと思つたけど、都合が良いくから良しとした。

といつよりはまだ小学生にもならない子供に理解できる物では無いと思つていたのだろう。

僕だつて逆の立場ならそつ考える。

ちなみにネギとアーニャとの仲は良好。

他にも数人の幼馴染が居る。

ただネギとは普段は普通に仲の良い兄弟だけれど、父親の話になるとそつはならなかつた。

子供があこがれるのは至極当然。

でも、僕としては一度もあつたことのない父があこがれるなんてことは無く。

その温度差ゆえに上手くこかないなんてことがあつたりする。

ファザコン気持ち悪い。・・・とか思つたりしてないよ。
もちろん！

5歳間近になるこの。

そろそろかなと思つてみるとそろそろだつた。

ネギのトラウマとも呼べる村人石化事件である。

原作に介入して良いのか迷つたが、僕達双子の母親代わりとばかりに世話になつていた、アーニャのお母さんぐらい助けてやりたいと思つていたのでこの日のために準備は万端である。

村のはずれから多数の魔力の蠢きを感じした。

「ネギ、僕から大事なお話がある。」

「な、何？」

アリス？』

今更だけど、僕の名前はアリス・スプリングフィールドである。
もういない我が両親は名前まで女の子っぽくするとは何を考えているのやら。

ちなみに、現在は村からちょっと離れた川で釣りの最中。

突然の僕の真剣な聲音に、少しおびえた顔をするネギ。

悪いことをしたとき、ネカネ姉さんがいなときは僕が叱つてる為、
何か悪いことをしてしまつたのだろうか？と不安になつているのだ
ら、ひ。

「今すぐ村に帰るんだ、良いね。」

「う、うん。」

良い聞かせるような僕の言葉に渋々従うネギ。

ネギには悪いがトラウマを作つてもう一つ。

これから先、原作の展開において重要な転機点だからだ。おかげで困になつてもう一つ。

ネギどころか、ネカネ姉さんにもスタンおじちゃんにも申し訳ないけれど父親が助けに来てくれるのだから問題ない。

ここにいるほうが危険なのだから。

「ネギ、釣竿は僕が持つていいくから早く。」

「わ、わかつたよ。」

鬼気迫る僕に従うネギ。

例え前世の記憶があるうと、小さな頃から一緒にいた兄弟だ。心配でないと言つたらウソになるが、確実に助かる道があるのでからそれを頼らせてもらひ。

「さて……。」

ネギが見えなくなつてから、僕は魔法を使う。

身体強化の魔法。

“戦いの歌”である。

そして、魔法を唱える。

遠見の魔法とさらにもう一つの魔法。

雷の暴風を唱える。

できれば闇の吹雪が良かつたのだが、命のかかつてゐる状況で自分と

相性の悪い魔法を使うわけにも行かない。

出来るだけ収縮して細く細く、圧縮。

狙いをつけてここから村へ向かう下位悪魔達に照準をつける。

この日のためにネカネ姉さんから普通の杖も貰っている。

ここまでやればわかるだろうけれど、5歳にも満たない子供が勝つためにどうしたらと考えた結果。

僕は超遠距離からの連續射撃で出来るだけ蹴散らす。

そういう作戦をとることにした。

一発撃つことに移動して、また撃つ。それを繰り返す作戦である。

これでちゃんと助けられるかは微妙だが仕方が無い。

アーニャのお母さんの家に近寄る悪魔を優先して狙い撃つ。

まずは一発目。

「雷の暴風つ……」

僕といづイレギュラーによつて一人でも多く助かるこつとを祈つて。

ところがどっこい。

さすがにそこまで甘くないつてのが世の中である。

最初は上手くいっていたのだが、やはり敵もされることながらやり手で、いつの間にか村の中まで追い込まれていた。

後ろからこきなり悪魔が出てきたのはビビッたわ、本当に。

ついつい“なんでやねんっ！！”とつっこんだのは仕方ないと思つ。悪魔が召喚されたってことは召喚主が近くにいるわけで。

おやりくだけど適当に僕のいる場所に召喚したのだと思ひつ。

逃げてくる内にいつのまにか村まで追い込まれていたつてわけさ、こんちくしょうっ！！

「やばつ！？」

焼けまくりで崩れまくりの家を曲がった先にちょうど悪魔に出くわした。

戦いの歌で身体能力が増しているとはいえ、元が元なだけに近接戦は非常にまずい。

いくら鍛えようと所詮は子供の体。

攻撃力に限界があると思つて、特別鍛えてなかつたのがここに来て裏目に出た。

だつて、攻撃魔術だけで精一杯だつたんだものっ！！

どちらも中途半端になるぐらいならと、攻撃魔法のみに特化した僕。防御魔術も常時展開用の障壁ぐらいしかない。

そもそも、たつた二年くらいでここまでやつただけでも褒めて貰いたい位である。

本を見る機会も少なかつたから、ほほ我流だし！！

ぶっちゃけ助けとか期待できません。

ネギの魔力は反対側。

父親と思わしき魔力も向かつてはいるけれどネギに間に合つても僕には間に合わん。

というか育児放棄の父親に庇われたくなんかないわっ！！

というのは建前で、父様、神様、仏様。

何でも良いので僕を助けてくださいっ！？

「プライドなんかより命のほうが100倍大切ですっ！」

急性アルコール中毒で前世の生涯を閉じた人間とは思えない言葉を吐き、僕は必死に悪魔の攻撃をかわす。

悪魔パンチとか叫んでるけど、それどういじやねえつー？
そのまま必死こいて近くの家に逃げ込んだ。

「つひうつー？」

目の前には石像。いきなりのことでの悲鳴を上げかけたが、そこで声を押しとどめる。
なぜなら・・・

石像はアーニャのお母さんだったからである。

「・・・おばあちゃんつーーー！」

もちろん、何の返事も無い。

当然だ。

すでに石化しているのだから。

それでも呼ばずには居られない。

前世の記憶があるとはいっても、自分はすでにこの世界の住人である。

そしてこの世界で本物の母親よりも母親として感じている彼女の悲惨な姿に、茫然自失とする。

そして守るように立っていたアーニャのお母さんの背後には幼馴染のステラが居た。

ネギにとつての幼馴染がアーニャならば、自分にとつての幼馴染がステラである。

肩くらいまで伸ばした茶髪と、くいつとした目が可愛らしこ元気な

女の子。

その日が恐怖に彩られて、そのままの状態でたたずんでいる。

その状態で石化しているのが、いつまでもいつまでも恐怖に縛られ続いているように思えて見ていられなかつた。

というよりも、ワレながらあほらしいほどにショックを受けていた。すでに精神年齢は下手な大人より高いはずなのに。

4歳相応の反応。

すなわちただただ、泣き続けるしかなかつた。

何もできず、何もしようとせず。

ただただ嗚咽を上げて。

慟哭するしかなかつた。

理性では、このままではいけない。動け、逃げる。

そう感じているのに感情がそれを許さない。

理性を簾巻きにして鎖でがんじがらめにして、ひたすら理性の足を

引っ張る感情。

体が金縛りにあつたように動かず、指一本動かないくせにバカみた

いに涙腺は反応する。

本当にバカみたいだ。

「つひく・・・つひくつ・・・」

泣きすぎて、痙攣して、喉から勝手に声が出る。
嗚呼、どうにもならない。

また死ぬんだろうな。

そう思つた瞬間。

僕の意識はそこで途切れた。

「困つちやうよ。みづちひきや。

死ななこよつて言つたの、死ぬ一歩手前になつてもひりひりや。

」

僕の眼前には久しぶりに会つ金髪幼女。
ここは・・・あのときの?

「わう、あのときのあの場所だよ。

死にそなになつてたので、強制的にこじらひ出しだの。
やつぱり修行期間を設ければよかつたかなあ?」

「・・・そ、それどころぢやないだろつ!?

ついつい声を荒げちゃう僕。
仕方ないと思つ。

ただそんな僕を冷たく見据えて、金髪幼女は一言。

「別に君がじうじょうと君の勝手。そういう話だつたし。
でも、死なれるのだけは困るんだよ。」

お手伝いをしてもらうためにはね。」

「アーニャのお母さんとステラは・・・」

「助けることはまあ不可能ではない。」

でも、それは私で無くて君にしか出来ないこと。」

「ど、どうこうこと・・・?」

「まあ、面倒な説明は省くけど、世界に干渉するには世界に生きる
物で無ければいけない。

だから」や、君をあの世界の住人として転生させたの。」

「つまり？」

「つまり助けたけりや自力でしろってことね。

でも、それも今となつては無理。

世界が認めてしまつたから。あの歴史を。」

「は、はあ。」

よく分からぬいけど、彼女達を救うのは無理とこいつことだらつか？
「世界の歴史を変えるには外部から潜り込んだその世界の住人が必要つてことよ。

でも君はすでに世界に認識されてしまった。

たとえばAという世界の歴史を変えよつとして、外部の世界からBという人が介入しようとする。

Aの世界に本来存在しなかつたBはAの世界の動きにありとあらゆる面で影響を与えることが可能なんだけれど、Aの世界に影響を与えた瞬間からBの人は外部から来たAの世界の住人としてでは無く、元々いたAの世界の住人として認識されることになる。

まあこの説明は理解できなくても良いけど、結論を端的に言えば私が君を過去に送つてあの口を繰り返したとしても、世界による強制力が働いてどんなにがんばつてもあの口あの時の出来事を変えることは出来ないつてことよ。」

「・・・難しきことばっかりで分からぬいけれど、とりあえずタイムマシンに乗つて過去を変えるなんて虫のいいことは出来ないようになつてゐること？」

「うん、そういうこと。」

でも、神様である田の前の金髪幼女ならば出来るのではないだろか？

「出来ないよ？」

何でも出来てたら、君の力 자체借りないよ。
あの世界に干渉して欲しいために干渉できる体。
すなわちあの世界の住人として転生してもうつたわけ。」

うぐ・・・それもそうである。

「それよりも落ち着いてきたみたいだね。
この空間は安らげる場所でもあるから、精神的に追い詰められたら
いつでも気軽に来るといこよ。」

「そんな簡単に出入りできる場所なの？」

「うつん、出来ないよ？」

「出来ないのかよつ！？」

「3日3晩断食するくらいこの根性と気合で持つて始めて来れる場所
だよ。」

「気軽とこう言葉はどう？」くつーー。」

「ちなみに水無し断食。」

「死ぬわつ！ー！」

水も無いとか！？

死んであの世へ、この世界に来いつてことかになつーー。

「元気が出たようすで何よつ。

んじやま、ほいっーー！」

「ひーあつーー！」

いきなり田瀆し攻撃をしてくる金髪幼女。

目があああああああつ！？

ひぐうああああああつ！？

焼けるように目が痛いつ！？

何をしたのっ！？」の金髪幼女はつ！？

「生きるための力をあげるつていつたでしょ？

といあえず不老と適当に魔眼の力をあげたから。」

「ま、まがん？」

目を赤くして涙しながら聞き返す僕。

「頭を潰されても生き返れるように不死もつけたかったけど、それは世界の理からして不可能。せいぜい吸血鬼並みの再生力で精一杯。腕や内臓の一つや二つは大丈夫だけど、頭をぐちゃぐちゃ死んじやうからその辺を気をつけてね。

ちなみにコレは真祖の吸血鬼でも一緒。

エヴァンジョンを殺したかつたら頭を狙うよにしてみてね。」

いや、殺さないよつ！？

満面の笑みで何を言つてるの！？この人つ！？

「魔眼の効果はあらゆる物に対する“視認能力”。地味だけどかなり使えるよ？

音の波はもちろん、本来人間には見えない赤外線や紫外線。

赤外線が見えるために熱源探知も可能。

温度ももちろん視認出来るし、魔法も西洋、東洋問わず術式を視認可能。

精霊、妖精、幽霊といった存在も確認できるし、魔力の残り番まで使いよつてはかなり強力な力になるから十二分にいけると思う。

ついでに言つと使つてる最中は眼球が白くなるから気をつけてね。他の人に見られたら“何、こいつ！？白い目とか気持ち悪いんですけどゲラゲラ”となるから。」「

「ならなによっ！？」

「なるよ。そういう呪いも一緒にかかるから。」

「なんでやねんっ！？」

「ウソだけだ。」

「ウソっ！？」

金髪幼女はウソが好きな様である。

いつか殴ってやる。

性別も無いだらうし、女の子の格好をしてるだけの物体ならば問題ない！

「殴ったところで痛くも痒くもないんだけどね。
まあ、話は流れくらいにして。

いつでも監視できるわけでもないし、今度こそ死にそうになつても
らつりやつと困るから、修行してもらつたために過去に飛んでもらつ
よ。」

「うえつ！？」

いや、いきなり過去とか！？

どうしてまたつ！？

「修行期間だよ。

ちなみに15歳ぐらいまでは成長するけど、そつから止まるから。

成長。」

「は？ つて――ひいあつ！？」

また落とし穴があああああああああああああああああああああああ
あああつ！？」

いろいろ詳しことは聞けたのだが、結局生きて何をするかがまた

聞けず。

まだ聞きたい」とがあるつてのつ！？

「君が行くのはさうと700年前。

せつかくだからエヴァンジエリンあたりの過去を変えてみると良い。一度存在して、したことは覆らないが、まだ存在していない時間軸の歴史はいじれるよ。

達者でねえ～っ！！」

またしても落ち際に金髪幼女の言葉を聞いたが、それだけではなく。

僕は気絶した。

さて、目を覚ますと僕の目の前には無骨な力カシが立っていた。
力カシが立っていた。

大事なことだと思つので一回囁いてみた。

なんやねん！

なんやねん！？

ツツ「ミも大事だと思つので一回囁いてみた。

どつかの家の一室。

といあえず、じっくりと力カシを見て、躊躇みして。
もう一度声に出して囁いてみた。

「なんやねん！？」

いや、まあ良い。

カカシがあるのは良しとしよう。

本来、鳥避けなり狸避けに使うはずの・・・煙にあるはずのカカシが家の中の寝室と思わしき場所に突つ立つてるのは、100歩譲つてよしとしよう。

目の前でギギギと動き出した、ところとも良しとしよう。中には電氣で動くカカシがあつてもおかしくない。

「おっすオラ、カカシ。

おめえの名前はなんだ？」

とか喋つてゐるのも無視しよう。

カカシが喋るはずも無いので、気のせいか幻聴。

1000歩譲つてテープレコーダーが内蔵されてるか、簡単な反応なら出来るようだに組み込まれてゐるのだらう。そこもよしとする。

首にかかつてゐるネームプレートに名前と思わしき「スーパーカカシゼット」というのもネーミングセンスにそこはかとなく憐憫の情を感じるがそこはまあ良い。

カカシに対して、丹精込めて作ったカカシにスーパーカカシゼットという名前をつけてしまう人も居るはずだ。

問題はアレである。

「コレである。

「なぜまた使用済みを寝室につつこむわけっー?」

カカシはもともと畠に使われていた現役バリバリのカカシらしく、思いつき泥まみれ、砂まみれ、穂まみれである。

米農家で使っていたものだつたらしく、動くだびに穂がバラバラ

と落ち、泥も砂ももちろん落ちる。

寝室の床が力オスなこととなつていた。

虫も付いているようでヨコバイと呼ばれる農家における害虫。（セミの仲間）それまでもが室内であれよあれよと飛び散る。意外と数があつて、うつとうじい。

そして枕元には手紙が一通。

田の前をピヨンピヨン飛び跳ねるうつとおじいヨコバイを払いのけつつ。

手紙を見ると差出人は神様からであった。

内容は以下のとおりである。

くおつす！
オラ神様。

そこは700年前のマホラ。

世界樹の加護で外からは滅多に人が来ない迷いの森と化してゐるから修行の場所としては最適。

適当にがんばつてね。

ある程度力が付いたらエヴァンジエリンの出身地に向かうと良いよ。暇つぶしになるだろうから。

中世歐州のどこだったかな？

まあ適当に魔力探知で探してね。

魔眼を使ってもおつけ。

PS

そのカカシは君が寂しくないように現代日本の農家で現役バリバリのカカシを一つチョイスして失敬してきたもの。

感謝してね。

寂しさが紛れるどころか、日本の空気を感じて一石一鳥…！

泥とか面倒だから自分で掃除して。

どうせなら掃除した物をよこせって？

甘ったれんなYO！

神様は忙しいのです…！

詳しいことはそこのかカシ。

スーパー・カカシゼット君にでも聞いてね。

ではまた。

次に会うのはいつになるか分からぬけどくれぐれも死なないよう
に。

親愛なるあなたの神様より。 ララバイとかwww

いろす！！

「ハヤシ、アリの上な二手綱だつた。

最初のおつす！から始まって途中の「ラップ調」。
最後の“ヨコバイとか”をわざわざ紙に書くといつ部分。

確実にわざとである

今この瞬間も僕の周りをドリル飛ひ跳ねる田中バイ達。これもまた怒りを加速させる。

「ああ・・・わかっているとも。

三一八不君達

春水集

こんなバカにもてあそばれるということに・・・」

「お前がお前で、おまかせでござる」

良かったのだが

ミサニノハナシ

問題はハラリと落ちた一枚目の手紙だ。

そこには「」と書かれていた。

八、モルモット。

君は遊びでも女装とかしそうに無いから、軽く呪いを掛けちゃいました。

マジ呪いです。

その家のにある脛
なししに女性物の脛で無しと脛が千切れ飛ぶ
いう呪いだよ。

男の娘推進会会長 神様より>

「修行したら真っ先にあの野郎をブチ殺しに行ってやる！」

あいつは3日間の断食くらいの頑張りがあればあそこに行けると言つていた。

十分に力をためたら、ます真っ先にあしのとこへ行つて、アヂ殺しに行くとしよう。

۱۵

五
卷之三

11

どおりで今現在。

僕が全裸なワケか！！

とりあえず服を着て、気分転換がてら床を掃除しようと思つて立ち

上がると、せりに一枚。

手紙があつた。

そのままゴミ箱にツツコみたいが、また下手な呪いだと困るので見ておかねばなるまい。

く女装中は女の子言葉。

それも呪いに引っかかるのでよろしくね。

イタズラ大好きっ子代表取締役 神様より>

「…………」

声にならない叫びを上げて僕は発狂した。

コレ以来、闇属性の魔法と相性が良くなつたのは唯一の救いだつた。

第一目標は修行

第一は一度起こつた歴史を変えられないなら、後から変えれば良い。

アーニャのお母さんとステラの石化解除薬の開発。

第三にあの金髪幼女を血祭りに上げること。

それを念頭に僕は修行することにした。

英雄どころか人外を殺すための力を手に入れるため。

僕は頑張る事となつた。

一方、不思議空間では。

「ふう。これだけやれば氣が紛れたかな。

全く・・・人というのは得てして脆い物だよねえ。

少しの情を受けた人間を助けるためだけに命を捨てようとするとは。こうしたことが起こらない様に薄情な人間を選んだつもりだったのに、大失敗。」

とぼやく金髪の少女。

残念そうな聲音でありながら、少しの喜色が見て取れる。

「まあそれが美德というものだし、仕方ないといえば仕方ないか。せいぜい適当にがんばってね。

私は世界の調整をしておかないと。」

アリスは知らないことであつたが、闇属性との相性が良くなつたのはネギと同じく心に闇を抱えたから。

自身の母代わりと幼馴染をあんな目にした奴らに対する嫌悪、憎悪、恐怖といった負の感情が源泉と化したから。

いつかその闇が払われることを祈つて、金髪幼女は今日も世界の管理を始める。

「次の世界は何を模して造るつかなあ。」

そんなことをぼやきながら。

2つ目 のんびり自給自足生活

さて。

ふざけた呪いに呪われながらも、私は今現在。5歳の誕生日を向かえ、日々家事に従事する毎日と化して早一ヶ月。ネギは大丈夫かなーとかネカネ姉さんはちゃんと治療してもらえただろうか?などと家族の心配をしつつも、家事修行の毎日である。自身の戦闘面での修行は体が出来てから。すなわち15歳になつてからするとして、今は魔法部分の修行と石化解除薬の研究である。

驚くべきことに、スーパー・カカシゼット君にはあらゆる方面での知識、技術が内包されているようで、色々なことを教えてもらつている。

現在は中世なので、その時代における言葉。すなわち古語や、いすれエヴァンジェリンに会いに行く際に必要なヨーロッパの言葉。それらも学んでいる。

古典は不得意だったので、非常に面倒なことの上ない。

「スパ君、今日のご飯は何が良い?」「オラ、スパゲッティがいいだ。」

驚いたことに、スーパー・カカシゼットーーーすなわち、スパ君も飲み食いをする。

おそらくくらいに多機能な力カシだ。しかも無駄にグルメ。

この辺の嗜好までつける必要があつたのかと思つ。ちなみに食事は練習がてら私がやつていて。

「おっけ～。さつそく僕が腕によりをかけて作ってやるぜい・・・・・
しまった。」

パンと音を発して弾け飛ぶ服。

ゴスロリ調の服が見るも無残な姿となる。

「・・・はあ。

厄介な呪いだな。」

女装中は女言葉で無いといけないという呪いに反したため、弾けと
んだ服。

これで10着目である。

どうせスパ君以外いないわけだし、すっぽんぽんで居ようかとも思
うがいはずれエヴァに会いに行くときに女言葉を癖付けておかないと
困つたことになるので、代えの服を着用する。
うつかり男言葉を使って、目の前でパン。

・・・想像するだけで、頭が痛い。

下着は男物でもOKだったというのが本当に良かつた。

「大丈夫だか？アリス。」

「大丈夫だよ。」

そして、ここ一ヶ月で分かったことと言えばスパ君がとても良い人
――じゃなくて良いカカシだと言う事である。

私が気落ちすると必ずといって良いほど心配してくれる。
あの金髪幼女に比べてなんと良い子か！！

「不幸中の幸いだったのは呪いの範囲が狭いことだ・・・・かしらね。

僕つ娘という言葉があるように、”僕”という一人称は許されるみたいではあつたが、一人称が”私”ならばある程度乱暴でも、はつきりとした男言葉でなければ概ね大丈夫なようである。そのためにはまずは一人称から直した。

正確には私が”女としての言葉を使つて”いる”と意識するかどうかで呪いのあるなしが決まつて”語尾に”～ぜ”とかからさまな言葉を使つてもそれが私の中で”女性の言葉使いだ”と認識していれば服ははじけ飛ばない。

それを意識しながら今までどおりの言葉使いにすれば良いのだが、これがまた難しく。

そもそも元の言葉使いでいたいと感じることすでに男言葉を意識していることに他なりません。

緩い様で結構キツイ忌々しい呪いである。

実にむかつく呪いだ。

さすがに一生ということは無く、とある条件で解除されるらしい。それは原作キャラとの干渉、もとい会話。

誰でもいいから原作キャラと会話することで呪いが解けるらしい。というわけでその面からもエヴァンジーロンに会いに行きたいわけだ。

「地道にがんばるしかないよね……うん。」

「オラも手伝うからそんな悲しそうな顔しないでくれだ。」

「うん、ありがとう、スパ君。」

本当に良いカカシだよ君は。
本当に泣いてないんだからね！－！

そんなこんなで私は今現在。

ヨーロッパへと向かっています。

魔女狩りとか100年戦争とかの真っ最中であるけど、今の私なら大丈夫だろうということだ。

居をヨーロッパで作るべく、がんばってみたのです。

「スパ君・・・本当にこのあたりなの?」

「そうだ、おそれらしくこの辺にエヴァンジエリンが生まれる家があるだ。」

あれから80年程が経ち、純粹な戦闘力も現在は原作で書かれてる程度となつたので、さっそく国を移動してみた次第です。

石化解除薬はなかなかに難しく、あと100年はかかりそうである。

「中世ヨーロッパの町並み・・・といつても汚いなあ・・・
「仕方ないだ、アリスが生まれた時代と比べたらダメだべ。」

その辺に排泄物が撒き散らされてるついてじつことよ?
臭いがキツイです。

「下水なんて配備されて無いだからな。

基本的に外に捨てて一箇所に集めるだけだべ。」

「うう・・・納得いかないなあ・・・
せつかく楽しみだったのに・・・」

ちなみに外見は実の母親であるアリカ王女そっくりなので、この顔

で好き勝手やると母親が困るだらうとこいついで髪染めの魔法を使つてゐる。

もちろん元日本人たる私は黒をチョイス。
髪の毛を黒に変えるだけで別人のような雰囲気になるから十分だろ
う。

身長は160センチ。

12歳くらいになつてからぐんぐんと伸びていた身長が15歳にな
つたとたんに止まつてしまい、もう160センチは欲しかつたもので
ある。

「まだ10年ちょっとかかるだらうの間に過ごすための居を構え
るだ。」

「うん、分かつてるよ。

何よりもこの忌々しい呪いを解くことが出来るからね。

私もやる気が沸くつて物よ。」

とりあえず、未開の森に居を構えることにして、畠でも耕しながら
のんびりと10年を過ごそう。

原作では600年前あたりに吸血鬼になつたとしか聞いてないから
詳しい部分は分からぬんだよね。

といふか、80年も経てばあらかた忘れてしまつた。

「まずは家を作らないとね。

スパ君は家の設計図と指示をお願い。

私が組み立てるから。」

「分かつただ。」

家は数日で建て終わり、畠を作つて米やら野菜、一部の果物などを
植えてのんべんだらりと10年ほど過ごしてゐたある日。

人が迷い込んできた。

「どなたかいらつしゃいませんか！？」

家の外から声がかかる。

「誰だろ？、

こんな辺鄙なところに人がやつてくるなんて珍しいわね。
なんとなく予想はできるけどさ。」

「オラが出るだか？」

「いやいや、カカシが動いてたらダメでしょ？
魔法世界ならともかく、ここは旧世界だよ？
下手したら魔女狩りの手がここまで来ることになるよ。」

「そ、そうだか。スマンだ。」

「別に謝ることじやないけどね。」

「すいませーーん！」

「はいはい、今出ますよ～。」

とたとたと玄関に向かつて、扉を開くとそこには満身創痍で放つて
おけば死ぬような男が一人。
血まみれの女の子を背負つて突つ立っていた。

「何か御用でしょ？」

想像はつくけどさ。

「あ、あのーー！

「む、娘を・・・娘を助けてくださいーー！」

と言つて、土下座をする男。

「不羨な願いなのは分かつています！－

何でもしますから・・・どうか、どうか娘を助けてください！
天使様に助けていただくしかないのです！－」

いや、もうね。

気まぐれで街に出た時に魔女狩りの被害にあつてた人を見逃せないからつて、その魔女狩りの組織を暇つぶしがてらに潰してみたんですよ。

あの時は私も若かった。

と言つても5年くらい前のことなんだけどね。

元日本人としては見逃せないくらいの惨い参上だつたから、ついつゝ助けたら魔女狩りの被害に遭つた人達にあがめられちゃつてまあ大変。
とりあえず助けたからといつてそのまま、ほっぽり出すわけにもいかず。

適当な隠れ里的な村を作つてそこに被害者をぶち込んで、村おこしの手伝いや病気の治療、生活環境の改善をした結果。
そこから徐々に私のこの住処の噂が広まつて、ここにくれば奇跡の御業で何でもしてくれるみたいな噂まで広まり。
それからと言うもの、ぼちぼちと人が来るようになつたわけ。

最初の頃はスパ君以外の話し相手が居なかつたからさ。
嬉しかつたんだけど、こうも人が来られちゃつとね。
面倒さが先立つてくる。

私の噂を聞きつけた人間が何も善人ばかりとは限らないわけで、たまに武器を持つた兵士がやつてきたりするわけである。
そして「死ね！忌々しい魔女め！－」みたいな？

普通の人には理解できない奇跡の業。すなわち魔法を使つてゐるからつて天使様みたいな恥ずかしい二つ名まで出来ちゃつて、凄い恥ずかしかつたりする。

神様の使いだ、なんだとあながち間違つてないので否認するのもね。そう考へると天使様つてのは意外にも的を射ていると言つて良いのだろう。

ちなみにこの大陸では滅多にいない黒髪から魔女狩りを行つ連中からは”悪魔”だなんだと呼ばれるときもある。

失敬な輩もいるものだ。

自分で言つのも難だけど、こんなにも愛らしく姿だと言つた。

「・・・はい、終わりました。」

とかなんとかやつてる間に魔法で治療を終える。

純粹な戦闘力で言えばフェイトレベルと言つたが、魔法の腕で言つならばおそらく世界一だろう。

無駄に研鑽を積み重ねてきた結果、大体の魔法で無詠唱、遅延詠唱、複数詠唱が可能となつていて。

私が神様から貰つた能力は不老と魔眼のみなので、この力は単なる才能である。決してチートなんかでは無い。

サウザンドマスターの血つて凄いなと再認識するのみだ。

ついでに言つと魔力を増やす訓練も行つてゐるので、今は元の2倍くらいある。元が元なのでかなり膨大な量だ。

とは言つてもやはり増やしづらいことには変わりなく、80年欠かさず訓練してこれなので、魔力に關しては才能と言つよりは努力と積み重ねが物を言うのだろう。

あと600年ほどあるが、その時までどれくらい増やせるかがちょっと楽しみ。

お金をコシコシと貯める感覚に近いかもしない。

「あ、ありがとうございます！」

天使様！！

私の怪我まで治してくださつて・・・」、『の』恩は決して忘れません！』

「いえ、お気になさらずに。」

困つたときはお互い様ですわ。』

「・・・あ、ありがとうございます・・・」

・

なんか感極まつて泣き出してしまつた男である。

まあ、見た感じ魔女狩りの被害の遭つた人だから、人に優しくしてもらつこと自体滅多に無かつたのだろう。泣くのも無理は無い。

『の』家の裏手に簡単に舗装した道があります。
道なりに進むと、とある隠れ里に着きますからそこで新しい生活を嘗むと良いでしょう。』

「そ、それは・・・あの、争いも差別もないという桃源郷のことでしょうか？」

「桃源郷なのかどうかはわかりませんけれど、差別と争いが無いことは確かですよ。」

桃源郷なんて名前が付いてるのかな？

あの村も有名になつた物だ。

村人には出来るだけ秘密にするように言つてるんだけどね。
人の口に戸は立てられないってことか。

「あ、ありがとうございます。」

「あ、それと少し頼みたいことがあるのですが、構いませんか？」

「は、はいーなんなりと申し付けてください。」

そこまでかしいまらないでくとも。

とうあえず玄関においておいた車輪の付いた木箱を渡す。

「村に行くがてらこれを届けてもらいませんか？
野菜が入っていますから。」

「わかりました！

喜んで受け取らせもらいます。えへっと、この紐は…?
「車輪が付いてますので引っ張るだけで運べますよ。

娘さんを抱えながらでも出来ると思いますが…大丈夫ですか？」

「ええ、なんとか大丈夫です。

本当にありがとうございました。」

「いえ。

お気をつけて。」

「重ね重ねありがとうございました。」

野菜はお手そ分けである。

カカシと私が食べる分以上は腐る前に食べてもらわないともつた
ない。

「やうやく潮時かしら？」

彼を見送って、そんなことを思つ。

ちょっととした被害者ですからここにたどり着くことができる。

それすなわち魔女狩りの手がいつ届いてもおかしくない状態である。

このまま私がここにいると村の存在までばれかねない。

まあ、ここに来る人間を皆殺しにしてしまえば良いんだろけれど、
そういう短絡的な思考はちょっとね。

もちろん法律なんて無い物騒な今の世の中。

人殺しの一つや二つはもうすでに経験済みだが、だからといってこの選択は野蛮極まりない。

「うん、決まりかな。

スペ君。

数日中にエヴァを探しに行くから家の中の荷物をまとめてくれる?・

「急だな。別にいいだが、どうしてまた?」

「隠れ里の存在までバレかけてるからね。

私はこれから付近の魔女狩り組織を潰した後、村の人には強めの口止めとお別れの挨拶をしてくるから準備をしておいてくれるかしぃ。」「

「そうだか。

わかつただ。」

「うん、お願いね。」

こうして私ののんびり自給自足生活は終わりを迎えた。

おそらく、真祖の吸血になる直前か直後の今ならただの10歳児に変わりないエヴァンジェリンが原作とどう違うかちょっと楽しみになりながら。

彼女に会った後ならば久方ぶりに男物の服を着れるといつのもあって、ちょっとテンションが上がってる私。

「うん、楽しみだ。」

なんだかんだで今的人生が良い物だと思っている。

3つ目 気軽なお節介はたまに傷

エヴァンジエリンを探すべく、のんべんだらりと旅する」と1ヶ月。これまたなかなか見つからない。

真祖の魔力を辿つていこうと思つたけど、真祖どころか魔力の残り香を見ること自体まれである。

うつむ。

この時代は魔法使いがそれほど存在しないってことだろ? どうやらエヴァちゃんは未だ真祖には至つてないようで、それっぽい魔力を感じることも無い。

スパ君も漠然とした位置を知識として知つていいだけにしか過ぎず、手がかりが全く無い状況である。

「とりあえず、今日の寝床はこの辺でいいかな。」「んだ。」

ここは小さな村外れの森の中。

ロールプレイングゲームじやあるまいし、宿やらホテルがそろそろあるわけでもないこの時代。

野宿が基本である。

もしくは村や街の人には泊めてもらうかであるが、魔女狩りやら戦争で大変な今時分に得体のしれない旅人を泊める余裕のある家があるはずもなく。

もう一月も野宿しつぱなしで、もう会わなくてもいいんじゃないか? ?と思いつ始めてる私である。

「明日、近くの村に行つて何の手がかりも無かつたらおとなしくマホラの家に戻ろうか。」

「これ以上は面倒だしや。」

「オラも賛成だ。
布団が恋しいべ。」

もう女装して90年以上は経つ。

確かに呪いは解きたいが、今となつては野宿してまでの物ではない。正確には分からぬけど、あと500年もすればマホラ学園が設立されるだろうしね。

「できれば復讐を止めてやりたかったんだけどね。」

原作では自嘲気味に最初の1人は憎しみで殺したと言っていたエヴァ・アンジエリン。

後悔してはいなけど、して良かつたとも思っていないみたいだから阻止しようかな？

とか思っていたんだけど仕方ないね。

「おやすみだ。」

「う、うん？」

ああ、おやすみなさい、スパ君。」

野生動物に襲われない様に、結界魔法を張った後、眠る私とスパ君。うとうとしていると急に沸いて出た様な魔力反応を感じた。

「つー？」

「これは・・・人間とは違う魔力だな。」

魔力を感じる方向に視線を向けるスパ君。

私も同じ方向へ目を向ける。

「ようやく見つけた！

スパ君も付いてきてね。

私の予想通りなら、私一人じゃ難しいから。」

「わかつただ。」

影のゲートで、即時に移動。

魔眼を発動して即刻見つける！

「魔力の流れは・・・」ひちかしり?
ん?」

エヴァちゃんと思わしき魔力の他にもう一つ。
ヤケに大きい魔力がこちらに向かってくる。
おそらくだが、エヴァを吸血鬼へと変えた誰かだ。

「ふむ・・・私の手で殺して置かないダメね。
殺しておけば復讐をしようが無いし。

スパ君は先に行つて、エヴァちゃんの気を引いておいて。」

言葉で返事をせず、頷いてそのままスパ君は走り抜ける。

私は私で戦闘準備。

闇の魔法を開発かつ会得済みなのでそれを発動。

最近の悩みは闇の魔法の影響で魔族化してきたせいか、尻尾やら翼
が生えてきたことである。

翼の色は髪の毛と同じ金色に近い黄色。

全く持つて、天使様という名に相応しくなってしまったものだ。

「む?」

お前は・・・村はずれに居た化け物か。

なぜここにいるの？」

進路方向に待ち伏せ——とこつよつ道を通せんぼす。

「酷い言い草ね。
傷つくわ。」

不老とか魔族化したりとか、人間止めちゃつてるから否定はできません。
悲しいことに。

「それで、私に何か用かな?」
「いいえ、特には。
用が無いと会つてはいけないのかしら?
ダンディなオジサマ。」「貴方ほど美しくも可愛らしい女性に声を掛けられる。
殺氣を垂れ流しながらでなければ歓迎したのだがな?」
「あら、『ごめんなさい』。
これで・・・いいかしら?」

いかんいかん。

ついつい殺氣が漏れてしまつたようである。

修行が足らないね、私も。

殺氣を抑えて、再度目の前の40頭のおじさんを見定める。

「それで、私に何用か?」
「なぜ吸血鬼を作り出したのか聞いておじさん。」

私の言葉を聞いて、少し目を見開くおじさん。

「何のことだか分かりかね——」

「とぼけないでくださいな。

手が滑つて喉に向かつてしまふかも？」

とつとと話を終わらせないと、エヴァちゃんがどうなるか分からない。

それどころか付近の人間を皆殺しだ。

多分だけど吸血鬼と化した直後は手当たり次第に周りの人間を襲う、獸同然になるはずだ。

ネギが闇の魔法に取り込まれかけたとき、人間が魔族化した直後はそうなるとかかんとか言ってたから間違いあるまい。
まず殺されるのは身近な人間。

そんな経験させたくない。

スパ君が向かつているが、間に合つかどうか微妙である。

「あははははははは。

そこまで分かつていいならば致し方あるまい。」

いきなり笑い出す男。

そしてあふれ出す魔力。

「あなた・・・もしかして・・・」

「そうだ！」

私もそうなのさ！！

老いが怖かつた私は不死と知れた吸血鬼となるべく研究を続けた！！
あまたの吸血鬼を捕獲し、切り刻み、その血の一滴に至るまで調べ
つくしたっ！！

そして見つけたのさ！！

いや、造り出した！！

人間でありながら、吸血鬼へと・・・究極の生き物へと進化する術

を！－

いや、いや、いやいやいや－！－
いや、違うつ－！－

吸血鬼をも越えた完璧なる超人へと化す手段だつ－！－

おじさんの瞳孔が開き、紅く染まる。

厚みと質が増して行く、大量の魔力。

それを目で、体で感じる私の体が震えだす。

「吸血鬼が本来弱点とする、陽光や十字架、聖水。

それらをも克服した吸血鬼ならざる吸血鬼。

真祖の吸血鬼。とでも呼ぼうか。

そのための術が今しがた完成したのだ－！－

あの娘のおかげでなあああああ－！－

なるほど。

エヴァちゃんは実験台だつたといふことか。

エヴァちゃんにかけた術が成功し、完成したと判断。

おそらくすぐにでも自分に使つたのだろう。

どおりでエヴァンジエリン以外の真祖と呼ばれる吸血鬼がいなかつたわけだ。

まあアレだ。

こいつは殺さないとダメだらう。

「しつかり馴染んでからと思っていたが・・・やむを得まい。

貴様でこの力を試させてもらひおう－！－

「つ－？」

ズガンと地面が抉れる音と共に、瞬時に距離を詰めてきたおじさん。

改め外道魔法使い。

予想外のスピードだ。

とはいって、十二分に反応できる。

だが。

あえて私は反応しなかった。

「（）ふつ。」

胸を貫く外道の腕。

血が傷口から、口腔からもびよびよあふれ出る。

「ふはははははあはははあはつ！
どうだこの力つ！？」

黒い髪にその魔力。魔女狩り組織の人間を虐殺して回っているという噂に聞く天使様とはお前のことだろう？
その辺の人間では足元にも及ばない天使といえど、私の力の前にはゴミに等しいつ！！

身の程を弁えるが良い！！

完全な生物と化した私にはたとえ、神の使いとは言え勝てるはずが

―――ざああああがつ！？」

私は外道の腕を掴み、そのまま”握りつぶした”。

「ぐあああああああああああああつ！?
き、貴様つ！？」

貴様つ！..貴様つ！..貴様あああああつ！？」

すぐさま腕を引く外道魔法使い。

涙を流しながら泣き喚いているがビリでも良い。

「ふぐぐが・・・があ・・・ふく・・・ふふふ・・・くくくあは
ははあはは。

見ろつ！

見ろつ！

見てみろつ！

死に損ないの思いがけない力にビビッたが、所詮は魔力が多いだけ
の人間！！

私は究極だ！！

完璧だ！！

腕が・・・腕がすぐに治つていく！！

あははあははあははつ！！

貴様が死に物狂いで与えた傷ですらこのとおりすぐさま治る！！

無駄だつたなあつ！！

せめて、腕だけでもとでも思つたかっ！？

だが無駄だつ！！

貴様はそのまますぐにでも死ぬだつが、私は傷一つ残らんつ！！
ざまあみろだつ！！あははあはははははつ！！

嗚呼・・・なんというか、こいつ凄いウザい。

不愉快だ。

自分のエゴで年端もいかない子供に業を着せて。

自分は何も思つていな。

下手をしたらすでに忘れているんじゃないだろつか？

これから先、彼女がどれだけの苦労と悔恨と苦痛にまみれて生きて
いくのか一欠けらも理解してない。
しようとしてない。

出来てしない。

所詮、この世は弱肉強食だ。

弱い物は泣き寝入りするしかないかもしない。

それが正しいかもしない。

それが理かもしれない。

世界の決まりかもしない。

でも、しつたことか。

しつてたまるか。

あれだな。とにかく殺さないと。

「あはははあははは・・・はは?
なつんだとつ！？」

私の胸に空いていた風穴がショウショウと音を発して塞がっていく。
急激な細胞分裂による熱で傷口付近の血液が沸騰し、蒸発している
音だ。

「な・・・なぜ！？」

「究極の生物とやらが貴方以外にもいるつてことじゃない？」

瞬動で距離を詰めてアイアンクロー。
頭をぐわしつと掴む。

「や、やめつー！？」

「、このばばものめつ！！」

「貴方に言われたくないわよ。」

そのまま握りつぶす。

トマトが潰れるような音を立てて、脳漿と髄液、血液、骨片などが
飛び散る。

「頭を潰せば殺せるはずだつたから・・・これで大丈夫よね?」

血にまみれながら、呟く私。

「・・・さて、早く向かわないと。」

誰にと言つても無く、口を動かしながらエヴァンジエリンの元へと向かう。

スペ君は大丈夫だろうか?

目の前には眠る少女。

エヴァンジエリンが居た。

僕は結局、また同じミスを犯した。
犯してしまった。

外道魔法使いのクソつたれな話を聞いていたにも関わらず、また後々ながら理解した。

もつと頑張ればよかつたんだ。

頑張つて頑張つて、頑張つて。

頑張つて彼女を探して助けてあげればよかつたんだ。

こんなバカの実験台にされた彼女が不憫で不憫で仕方が無い。

結局のところ、どこかで僕は他人事として見ていたんだ。
歴史を変えられたにも関わらず、また失敗してしまった。
復讐を阻止してあげれば良い?
バカじやないのかと思う。

何を寝ぼけたことを言つていたのかと。
僕は不老だ。

これから先、1人で生きていかないといけない。

友達を作つても、家族を作つても最終的には1人残される。
無意識的に同じく不老となるエヴァを望んでいたのかもしれない。
1人残されるのが嫌だから。
だから否定的だった。

無意識的にでも意識的にでも。

元々の歴史に介入して物語を変えてしまつのは良くない。
せめて復讐を阻止してあげよう。
後々しこりとなるのだから。
そのしこりを取り除いてあげよう。
よしそうしよう。

なにが、あげようだ!!
してあげるっ!?

何を善人ぶつてゐるだ!!? 僕は。

そんなことを思いながら、正当化しながら自分の汚い部分から目を
逸らしていた僕。

あいつを見ていて気づいた、気づいてしまった。

あいつとなんら変わらないと言つた事。

「別にエヴァが吸血鬼とならなくとも、僕がエヴァのポジションに代わりに入つてやれば良かつたんだ。」

物語でエヴァの出てくる所、全てにおいて僕が代わつてやれば良かつたのだ。

僕がネギに修行を付けて、茶々丸を作つて、京都でフェイトと戦つて。

そうしてあげれば良いだけの話だつた。
そうしたほうが良かつた。

僕が来たとき、スパ君と戦い合つていた彼女。
なかなかに苦労して彼女を眠らせるとき彼女は振り絞るように泣きながら、悲痛な声で、慟哭をあげた。

『私を・・・私を殺しなさいよっ！！

父さんも母さんも・・・きつとソレを望んでいるものっ！..』

『そ、そんなこと・・・』

『貴方に・・・貴方に何が分かるつ！？
何を分かるつ！？

貴方は親を殺したのかつ！?
殺したことがあるのかつ！?

体を・・・体を私の・・・私の腕で貫かれながら・・・「私が付い

てるわ」と私を抱きしめてくれた母親をつ！..

容赦なくそれを・・・その血を啜つた娘につ！..

実の母を食らう化け物を・・・娘を何も言わずに抱きしめてくれた

父親につ！..

それに牙を突きたてた私の・・・私の気持ちの何が分かるつ！..』

『つ！？』

『殺してよ・・・お願いだから・・・私を殺しなさい・・・い・・・
よ・・・こんな化け物。

生き・・・て・・・いい・・・けない。』

変えられたにも関わらず。

これで僕はまた一つの過ちを犯してしまった。

僕は本当にバカだ。

「アリス・・・気にする事ないだべ。

仕方なかつたことだべ。』

「もう少し私が・・・いや、村で聞いていれば分かつたはずだよ。
あそこで野宿せず、もう少しやる気を出して・・・いや、そもそも
真祖になることを阻止してあげればよかつたんだ。
本当に嫌になる。

もう変えられない。

世界は・・・歴史はこの時間の僕を認識してしまった。』

「・・・おめえが気にすることでは・・・」

「・・・違うんだ。

違うんだよ。スペ君。

僕は自分と同じ・・・存在が欲しかつただけだつた。
もつと真剣に、真面目に考えてやれば良かつた。

分かっていた。

分かっていたはずだつた。

自分を真祖にした人間を殺す。ただ真祖にしただけだつたら動機と
しては弱いと思つてた。

もう少し早く思い出せばよかつたんだ。

魔族化した直後のデメリットを。

彼女が憎んで殺した唯一の人間。

彼女は600年生きるつとで色々な迫害を受けていたはずだ。
それでもはつきりと憎んで殺したのは最初の1人。
あの外道魔法使い。

これだけのことがあれば無理もなかつただらう。
なにが復讐は阻止してやろう・・・だ。

馬鹿馬鹿しいにもほどがある。

きつとあいつを殺すことで、彼女は気持ちに区切りをつけるはずだ
つた。

その区切りを僕の勝手な自己満足で消してしまった。

彼女という人間を構成する上で一番重要なファクターだつたはずだ。

「・・・だけどさ、おめえは・・・」

「ううん、大丈夫。

分かつてるよ。

別に助ける義理も情も無いことは
でも、どうしようもないんだ。

目の前であんな物を見せられちゃうとね。
どうしようもなく、虚しくなる。

もう少しなんとか出来なかつたのか?と思つてしまつ。
何よりもあいつを殺してしまつた。

キッカケを。

けじめを。

区切りを。

それを失くしてしまつた。

その責任は僕が取らないといけないよね。

「・・・アリス。」

スパ君は心配そうに僕を見る。
本当に良い友達を持った物だ。

僕みたいな阿呆なんかにはもつたいないくらいだ。

「スパ君、頼みがあるんだ。

僕にはまだ使えない・・・使いたくないし、必要ないと思っていた魔法。

それをエヴァに掛けて欲しい。

念入りに、完全に、きっちりかつちりと。

どうあっても解けないくらいに堅牢に頑丈に。」「

「や、それはなんだべ？」

不安そうに僕を見る。
別に大したことじゃないよ。

スパ君。

「・・・分かつたべ。

本当に良いだな？

おめえさがそこまでするひとは・・・

いいや、僕だからこそするべきなのさ。

「大丈夫。

金髪幼女の手伝いはしつかりやるからさ。」「

「・・・分かつただ。

決意は固そだからな。」「

「嫌なことさせて」ごめんね、スパ君。」「

「気にするなだ。

おめえとオラの仲だからな。」「

ありがとう、スペ君。

せめてもの償いが出来そうで一安心の私である。

4つ目 仇敵

「てやつー。」

「甘いわ。」

突きを放つてくるエヴァちゃん。

それに合わせて、カウンターを放つ私。
たまらず一撃を受けて倒れこむエヴァちゃん。

「その程度で殺せると思つてゐるのかしら?」

「・・・『じほつ・・・じほつ・・・』

「何を休んでいるの?」

私を殺すつてのは口先だけ?

貴方のお母さんとお父さんが今あなたを見たら、どう思つかしら?
まあもうこの世には・・・

「だ、黙れつ――」

肩で息をしながら、向かつてくるエヴァちゃん。

体を半歩ずりして足を引つ掛ける。

たまらずズッこける。

「戦いの最中に感情を持つことを悪いとは言わない。
でも、感情をそのまま出すのは悪手ね。

気をつけなさい。」

「・・・えりそつに・・・

「そういうことは一撃でも私に当つてないと出来たら言こなさいな。
今ままだと負け犬の遠吠えよ。」

「・・・ひー。」

エヴァちゃんと暮らして早一週間。

私の思い通りに事が進んでいる。

私がスパ君に頼んだのは“記憶の改竄”。

彼女を真祖にした人間が私であるということ。

これは勝手なお節介で復讐を取り上げた私だからこそやらなければならぬこと。

眠らせる前に聞いた「殺して」というセリフ。

自殺しないかが心配だったけど、文字通り目の前に親の仇を用意したのが功を奏したようで、生きようと懸命にもがいてるのがありがたい。

どの道、自殺するほどの勇氣は無いだろうと思つていたけれど、これまでまず間違いなく自殺はしないだろうから良しとする。

「今日はコノくらいにしておくれ。

スパ君、晩御飯の用意をしなさい。」

「了解です……だ。」

少し高圧的な物言いなのは、スパ君が私に無理やり従わされているという構図を作り出すため。

スパ君にはエヴァちゃんの味方になつてもいい。

これから先、私は彼女の生きる目的としても生きることになる。復讐を目的としたほうが、イキイキするかなあと思つてやつてみた作戦。

ちなみに記憶の改竄に使つた魔法は強力な物である代わりに、効果時間が短い。
「50年」とに掛けなおさないといけないのだ。

短いといつても不老である存在から見ればの話だが。
徐々に弱まってしまうのだ。

「・・・出来ただ。」

「敬語を使いなさいと言わなかつた？」

「す、すまんだ・・・です。」

このやりとりは何度もした。

スパ君には申し訳ないが、直しても貰わないと困つてしまつ。
残虐非道を売りにしたいのに、口で諫めるだけではいずれ演技だと
バレる可能性がある。

今はまだまだ大丈夫だが、エヴァちゃんが100年、200年と経
験を積んで行けば、まずバレる。

まあ、それを言えば、ストレス解消の玩具遊びと称して、エヴァち
ゃんに生きるための修行をつけてやってるのもバレ兼ねないが、そ
こはそんな疑問も抱かないくらいに徹底的にじじく。
勉強面は似たような立場に置いているスパ君に教えてもらつ。
そのうち、勘織られないように修行とは全く関係なく苛めることも
必要かも知れない。と思つと今から鬱だ。

そつじたことも挿まなきや難しくなつてへるよな、やつぱり。

「食べたらとつと寝るのよ、言わずもがなガンガン苛めていくか
らね。途中で潰れたらつまらないし。」

「・・・」

無視してご飯を食べるエヴァちゃん。

最初はご飯も食べなかつたのだから良いほつだ。

その後に寝入つたのを見計らつて、スパ君が話しかけてきた。

「こんなこといつまで続けるんだべ？」

「オラ辛いだよ。」

「つづ・・・それを言わると困っちゃうな。

そんなに敬語無理？」

「ち、違うだよ！――

オラが辛いって言ったのはそのことじゃなくて、アリスが・・・
・・・分かつてゐる。

友達が謂われなく憎まれてゐ・・・それを見るのが辛い。
そうでしょ？」

「んだ。

そこまで分かつててどうして・・・

「まあ謂われはあるんだよ。

私が悪い。どう悪いかはもう話したでしょう？

「だけども・・・

「大丈夫だつて。

予定では500年くらいで済むから。

神様から頼まれたこともあるし、死んでやる気もない。

「そだけど、十分長いし辛いことだと思つだが？」

心配そうに私を見て、気遣つてくれる。

最近、ずっとスピ君にこんな表情をさせてゐるな。
罪作りな男だぜ、僕つてやつは――

「まあ、どうせ寿命無いしね。

これから少なくとも1000年は生きるんだよ？

そのうちの半分くらい余裕だつて。

単位も単位だし。

100年のうちの50年だつたらともかくね？」

「・・・しょうがないだ。

無理はするでねえぞ。アリス。」

「うん、ありがとう、パパ。」

「だ、だれがパパだべ！？」

「あははは。」

「あははは。」

心配の仕方が、娘バカのお父さんそのものだよね、うん。

「おやすみ、スペ君。」

「ああ、お休みだ、アリス。」

こんな感じで私の親の仇なりきりじῆじῆが始まる。

「ほらほらどうしたじῆじἶ！」

それで終わりかしら？

おーほつほつほつほー！

適当にお嬢様風に嘲り笑つてみた。

現在世界は魔法世界。

場所はケルベラス大樹。

野生の飛竜種や各魔獣種が横行する大森林である。
富士の樹海なんて目じやない。

「くつー！」

こんなところで死ねない・・・つー！

適当に放り込んでサバイバルをさせてみた。

事前説明無しで、寝てる間にベッドごとぶち込んだ。

ちなみにスパ君をサポート役として付けてある。
いざというときのためにね。

一応、エヴァちゃんの日の前でスパ君には“死んだらそれまで、所詮玩具で暇つぶしだから、助けるな”と言い含めてある。
もちろん、これは芸人的な意味の“助けるな”であり、要は助ける
つて言つてるのだ。

押すなと言つたら押せ、みたいなお約束だね。

もう付き合いが100年近いスパ君にはもちろん分かってる。

そしてまたある日はコンクリ詰めにして鎖分胴を巻きつけた後、海
に沈したり、意味も無く重りを付けて走らせたり、賞金稼ぎに喧嘩
を売らせたりと色々やつてみた。

もちろんそういう日も、ストレス解消サンドバック[®]TMという
名の私との組手は欠かさない。

言葉や算数、一般常識といった教養はスパ君から押教えさせ、一部
苛め風に鍛え上げる日々。

そろそろ大丈夫だろうということ、今度は魔法世界に置いて行き、
転移魔法無しで我が家に戻つてくるなんていうことをかシンドイ特
訓も行つた。

魔力を込めた首輪をかけて、「一ヶ月以内に戻らないと首から上が
吹き飛ぶ」と脅しておくのも忘れない。

逃げないようにと付けた物だが、もちろんこれは私の印象を悪くす
るためのものである。

人間、どうしたって近くにいれば情が沸く。

その情を消し飛ばすのと、追い込んで結果的に鍛えられているとい
うことに気づかせないためだ。

人間、いくら歳を食おうとも一度持つた偏見や植え付けられた先入観と言つた物を覆すのはなかなかに難しい。

いい具合に先入観を育てられてるようで、我ながら見事な誘導である。

そのまま200年程が経過。

300年を越えたところでいい加減限界が近くなつた。

近くに長く居させるのはよろしくないと判断して、魔法世界や旧世界にほっぱりだすことが多くなつてきた。

もちろん恒例の首輪と魔力封印の腕輪や詠唱封印の指輪などもつけさせてだ。

期間も短くしたりして、修行の難易度を上げている。

私に対する印象も本来ならいらないであろう、首輪などをつけることによつて、しっかりと私を憎んでいるので無問題。

会つたび会つたび恨み辛みの籠つた呪詛の言葉を吐かれるからね。自分で望んだこととは言え、しんどいものがある。

なんせ300年以上の積み重ねであるからして。

なおかつ言葉使いなども可愛く強制してみた。

「姉様つて呼ばなきや、修行場やす。」

とか

「“～かしら”とか”～よ”とか使つよつ」。

とか。

450年ほどが過ぎたある日。

彼が活躍する頃まであと130年ほどだらつ。

そろそろ準備をしないと間に合わなくな。

今日でこの生活も終わりだと想つとも此のものがある。

「エヴァちゃん、もう飽きたからビロなつと行つてもいいのよ。」

と言つた。

「な、何を言つてゐるの・・・姉様。」

「どこへなりと好き勝手して良こよつて。あ、でも魔力は軽く封印ね。」

「は?」

私のいきなりの飽きた宣言に開いた口が塞がらないよつだ。

「どうか、田障りだからとつと消えて頂戴。」

「え? へ?」

「ちょ、ちょっとー?」

転移魔法で送り込む。

ついでに軽く魔力封印。

今ままじや強すぎるからね。

ピンチに陥つてもらわないと困る。

ふつと田の前から消えたエヴァちゃん。

「これで彼女にやるばきひと終わり。」

「ど、どこへ送つたべ?」

「適当に魔法世界。」

歴史で言つながらもつと後に会はずなんだけれどね。今から送つておかないとフラグが立たないもの。それに少しだけ細工もある。

良くすれば仮契約・・・もといキスくらいできぬでしょうか。」

「もう、会わないだか?」

「少なくとも私からは会つつもりは無いわね。

まあ、私・・・アリス・スプリングフィールドが生まれてこの場に居る段階で、細工のほうは上手くいかないでしょうねうけど。

本当に・・・残念なことにな。」

「なんだべ?」

「まあ大したことじゃないの。

ここ麻帆良の土地も騒がしくなってきたようだし。

いい区切りだとthoughtたから。

・・・初めてのお客さんよ。お茶を出してもらえる、スパ君。」

私の目の前には1人の男がいた。

「さすがは“金色の魔女”殿。

気配は消していた・・・つもりだったのですが。」

「若い割には出来そうだけど、少なくとも気配の消し方は一流よ。」

といつ私の言葉に苦笑する男。

「これは手厳しい。

それに、若い・・・ですか。

どう見えてるのかは分かりませんが、私、70はいつているのです
がね。」

男の外見はしわが多く、若く見ても60後半である。

「分かつてるわよ。

70でも若いって言つてるの。

私の歳、聞く?」

「いえ、遠慮しておきます。

女性に対しても歳を聞けるほどどの度胸はありませんので。」

「ふふふ、分かつてゐるのね。」

まあ私は正真正銘男だけど。

「椅子に座つたらいかが?」

「・・・はい、やうさせてもらいます。」

「お茶が運ばれてくる。」

男は一口のみ、「これはおいしいですね」と微笑んだ。

「单刀直入に言いますと、この土地を買い取らせていただきたい。」

「それはお断りしますわ。」

即拒否する私。

もちろんこれには考へがある。

今このときのためにこの辺一体の土地は買い占めている。

「それはお断り・・・となると妥協案があるのですね?」

「ええ、もちろん。」

あなたの方の目的は世界樹を中心に学校を・・・学校を模した東洋拠点の開設、でしう?」

「そ、そこまでご存知でしたか。」

確かに、貴方様の言うとおりです。」

「そこで私はあなた方に土地を貸し『える』という形を取りたいのです。」

私の目的。

それはこの土地を誰よりも先に買い取つておき、その土地を貸すと
いう形で貸与することである。

すなわち、ネオニーー、ならぬ「ヨータイプ」の「」
略して“「」”となるべく「」年前くらいにから考えていた計
画である。

土地を貸するにあたり、土地の使用量をせしめよつてわけだ。
我ながら頭の良い作戦である。

「うむ……。」

「私の家は先祖代々この土地を守つてきました。
この土地を離れるのはこの土地が滅び、我が家が滅んだときです。
譲り渡すことだけは出来ません。」

「……わかりました。

そう上に掛け合つてみましょ。」

「……申し訳ありません。」

「いえ、これから頼んだ」とですから。」

勝つた……

これから先は、80年」とくらにに適当に変装魔法と偽名を使えば
良い! -

これで向ひ500年は泰じやないだらうか?
まあわざがにかしまで上手くはいかないだらうけどね。

「あぐどこべ……。」

スパ君の呆れ声が聞こえた気がするが聞こえないフリをした私である。

騙されるまうが悪いのさー!
ぐははははあはははー!

5つ目 Hヴァの気持ち

私は幸せだった。

裕福な家庭に生まれ、何不自由ない生活。

優しい両親。

大きな家。

華美な服。

幸せを表現した様な存在。

それが私だった。

そうした幸せがある日急に壊れることになる。

不思議だった。

自分の体のようで体じゃない。

少し腕を動かしたつもりでも、その”少し”は目の前に居たメイドの上半身を吹き飛ばした。

あまりの光景に目を疑つた。

あまりの速さ、あまりの重さ、あまりの力。

それゆえにあっけないくらいに簡単に千切れとんだメイドの上半身だつた何か。

彼女はメリ一と言つて、幼い頃から私の面倒を見ててくれた姉代わりのような人だった。

可笑しい。

オカシイ。

おかしい。

おかしいじゃないか。

なぜ吹き飛ぶ。吹き飛ぶ必要があつたのだ。

吹き飛ぶ理由が分からぬ。
いや、分かつてはいる。

分かつてはいるのだ。

今までにはありえない、ありえるはずの無い圧倒的な腕力で目の前のメイドを殴り飛ばした。

その結果が目の前のコレだ。

あれ?こんな力がなぜ自分にあるのだろう?

そんなことをぼんやりと考えながらも頭の大部分は眠つているように鈍い。

考えが、理性が纏まらない。

メイドを吹き飛ばした際の音を聞きつけてきたのだろう。
母様が部屋に入ってきた。

ダメだ。

ダメ。

近づかないで。

お願ひだからこないで。

今にも意識が飛びそうな中、がんばつてがんばつて声を振り絞った。
にも関わらず近づいてくる母。

やめて、どうして、近づかないで、殺しちゃう。

殺す?

誰を?

母を?

どうして?

なぜ?

なんで?

分からぬ。

どうして殺したくなるのか分からぬ。

とかなんとかやつてゐる間にほら、言わんじひちや無い。

私の右腕が母様の右胸を貫いていた。

簡単に簡潔に。

ずぶりと音を発てる間も無く。

母様は何か言つてゐるようだけど聞こえない。

そういうえば、右腕と右胸ってなんだかイントネーションが似てる。
なんていうとりとめもないことを思つてみた。

まあ何でもないことだ。

どうでもいいことだ。

くだらないことだ。

さあ、食べよつ。

啜ろつ。

お腹が減つた。

目の前には美味しそうな暖かくて真つ赤な血の塊がある。

ちょうど良い。

ちょうど良かつた。

あれ？

なんで血の塊があるんだつけ？

嗚呼、そうそう。

母様を殺したからだ。

誰が？

私が。

ナンだろつか？

何か忘れている気がする。

とても大事なこと。

人として忘れてはいけない。
大切なこと。

食べる前の頂きます？

「ごちそうさまだったかな？」
まあいいや。

とりあえずお腹を満たして、寝てから考えよう。

そうしよう。

起きた時、起きた時考えれば良いことだ。

今考えても詮無いことだ。

今考えるとダメな気がする。

うん、きっとダメ。

動けなくなっちゃうもの。

寝ようとした矢先。

今度は父様がやつてきた。

何を驚いているのだろう？

何かしたつけ？私。

それよりも早く寝て。

早く寝て早く起きて。

食べないと。

殺さないと。

誰を？

人を。

どんな人？

私をこんなにした人。
殺してどうするの？

殺したいから殺すの。

どうして殺したいの？

母様を殺したから。

殺したのは私？

ううん、私は悪くない。

誰が悪いの？

私をこうした人。

だから？

だから食べる。

彼を。

殺す。

殺してやるの。

とか考えていると、目の前には首筋が。

誰の？

まあいいや。

食べてから考えよう。

そうしよう。

食べて食べてお腹一杯に。

さて、今度こそ寝ようと思つたら、藁と丸太の塊がやつてきた。
なにこの人？

人？

そもそも人なの？

まずそう。

まずそだから要らない。

邪魔。

目障り。

壊す。

しばらく経つて、今度は女人の人。

私を。

部屋を。

見た瞬間に酷く悲しげな顔をしたけどなぜだろう？

こんなに幸せな家庭。

なかなか無いのに。

嗚呼、酷く眠い。

眠くなってきた。

私の口が勝手に動く。

何を喋っているのか分からぬ。

分からぬの。

分かりたくない。

分かつたらダメ。

ダメなの。

分かつたら、ダメ。

目の前の女性を殺すため。

私は今日もがんばる。

この人のせいだ。

この人のせいで私の幸せは壊れた。

壊された。

死ね。

死ねば良い。

どうして死ない。
死んでくれない。

私の幸せを壊しておいて。

どうしてのうのうと生きていられるの。

どんな顔をして生きていられるの。

死にたくても死ねない。

それもこの人のせいだ。

この人のせいに違いない。

信じられない、信じたくない。

ここにはゆるせない。

あれから100年。

あの忌々しい女は未だ変わらず。

私と同じく化け物のようだ。

年老いない。

化け物め。

最近、ヤツの嫌がらせがエスカレートしてきた。
覚えてる。

絶対に殺してやる。

10倍、100倍、1000倍にして返してやる。
返してやるんだからな。

苦しめて苦しめて殺してやる。
いつか絶対だ。

ある日、あいつの従者のような木偶に聞いてみたことがある。

「なんで、貴方はあいつの『言つ』とを聞くの？」

「オラ・・・おど・・・そうだ、脅されてるだ。

言つこと聞かないと・・・殺すで。

オラノロマだから。」

「・・・下種め。」

「・・・そ、そんな」と言つたらダメ・・・でないけど、言わない

ほうがいいだ。

根っからの悪人はいるにはいるが・・・アリ・・・あいつがそうとは限らないだ。」

私の下種という言葉を聞いた瞬間、涙をこぼれるようにプルプル震えだす木偶人形。

言わされているのかも知れない。

やつぱりあいつは下種だ。

今度は首輪と何をつけられるんだか。
と思っていたら。

ヤツは首輪をつけるのを忘れた。
さまあ見ろー！

最近は言葉遣いまで強制してきていい加減付き合い切れないとこ
だ。
魔力を封印されたけど、中途半端なものでせいぜい5分の1減った
位。

この程度、今までの嫌がらせに比べたら何の枷にもならない。
なによりも首輪を付け忘れたことがありがたい。
気づいて追手が来る前に、すぐさま逃げよう。
逃げ出そう。

あいつを・・・アリスを殺すには力が足りない。
もつと心を。
体を。
技を。

鍛えて鍛えてあいつを殺す。

殺してやる。

待つて。

父様。

母様。

今、仇をとるからね。

まずは数をそろえよ。

人形だ。

人形に魂を込めてそれに襲わせよ。

待っている。

絶対に絶対に殺すから。
殺しにいくから待っている。

チリつと痛む胸のことは気づかないフリをした。
考えたところで分からない。
そんな気がしたから。

私が魔法世界を旅して130年。
最近ではサウザンドマスターとの一行とやらが名を上げているら
しい。
噂ではとても強い傭兵集団だとか。

どうでも良いな。

それよりも今の私の状況をビックりさせねばなるまい。

飽きたと言つてほっぽりだされてから10年くらいは田立たずにつま
つ手を警戒しながら生活していたが、あの言葉は本当のようで今まで一度たりともあの女の姿を見たことは無い。

それを実感してからと言つ物。

人形軍団を造つて動作確認兼ストレス解消のため、適当に人間にち

よつかいを出し回っていた。

といつても、他愛も無いもので特別悪逆非道なことをしていたつもりは無かったのだが、いつの間にか600万\$の賞金が付いていたのにはびっくりだ。

どうやら見に覚えの無い罪までがこれ幸いとばかりに擦り付けられているらしい。

ほとんど殺した覚えが無いのに、殺した数は10万人を越えるとか。もう笑うしかない。

話を戻すが、恥ずかしながら結論から言えば現在絶贊迷子中なのである。

賞金稼ぎを撒くがてら森に逃げ込んだら迷ってしまったというわけだ。

さすがの真祖といえどこれは答える。

もう迷つて一ヶ月は経つていた。

どれだけ広い森なんだって話だ。

魔法の発動媒体を失くすわ、そもそも魔力 자체が枯渇するわ、お腹が空くわでもう大変。

なんで私がこんな目に遭わんといかんのだ。

どうせ、こういう目に遭うならば私ではなくあの女にするべきだろうが。

神はとことん私を嫌いなようだ。

まあ信じてなど居ないがな。

せめてもの救いは従者たるチャチャゼロがいることだらう。

「オイ、ゴシュジン。

ソッチハ”ガケ”ダゼ？」

「は？」

田の前には絶壁とも言ひべき直角の崖。
ところか——

これは死んだ。
死んでしまつた。

吸血鬼が崖に落ちて死ぬまで、どこまで間抜けなんだ、
頭から落ちればいかに吸血鬼とて死ぬ。

せめて旦那を・・・将来の伴侶を見つけてから死にたがつた。

卷之二

・
・
・
あれ?
?

いまで絶ても落ちたしんたか?

十一

「大丈夫かちびっ子？」

お前は誰だ?』

「・・・人に名を尋ねるときは自分からとか、崖に落ちかけてる今の状態でまずそれを聞くとか、お前みたいなちびっ子がなぜこんな辺鄙なところにいるとか聞きたいことはまああるが、とりあえず先に助けてもらつた礼を言つたらどうだ？」

目の前には赤毛の——まだ幼さの残る少年が私の手を握つて笑つ

ていた。

「で、なんであんなところに居たんだよ?」

「ナギ。

いけませんよ。

女性にはいろんな秘密があるものです。」

「い、いや。そうは言つてもな、アル。

こんな辺鄙な場所の崖に落ちる秘密つて何だつてんだよ?」

「この辺に出てくる上位龍種に喧嘩を売りに来たとかじゃねえか?」

「いや、ジャックじやあるまいし。

てか、詠春。鍋の準備はもう終わりか?」

「ちょっとまて。

もう少しで出汁が取れる。」

「出汁なんて肉を入れてる間に出るじやろ?」

「いけませんよゼクト。

最初に出汁を取るのが——

「

一体ナンなんだ?

ここからは?

「驚きましたか?」

常に二二二二二している油断なら無い男が話しかけてきた。

「う、うん?

ま、まあな。お前らは・・・いや、私はエヴァンジロリン。

こつちは従者のチャチャゼロ。」

「アロシクナ。」

とりあえず自己紹介を済ませておいた。名前だけならば賞金首として問題あるまい。

「あの不死者の、ですか？」

闇の福音とも言われている？」

「……だとしたらどうする？」

と思つたのだが、速攻でばれてしまった。

意外と有名なのか？

たかだか600万\$……はまあ有名になるわな。

「いえ、どうもしませんよ。面白そうな人にあえて嬉しいくらいです。」

「むつ。」

「どうもこの男は気に食わん。というか……まあ気に食わん。

「私はアルビレオ・イマ。」

唐突でなんですが、私って他者の人生の覗き見が趣味でして――

「ふむ。」

悪趣味だな。」

「ふふふ、ありがとうございます。」

私にとつてはこの上ない褒め言葉ですね。

・・・話を戻しますが、その甲斐あつて私のアーティファクトはこんな物であつたりするわけです。

アーティファクト。」

「……？」

本ばかりだな。

本が好きなのか？」

アルビレオ・イマの周りに螺旋状に展開された本の数々。

「私のアーティファクト。
イノチノシヘンの能力は会つたことのある人間の半生を記す……
すなわち人生の書とも言えます。」

なるほど。

覗き見が趣味とは良く良く言ったものだ。

「わかつて貰えたでしょうか?
早速あなたの半生を見たいのですがよろしいですか?」
「ダメと言つた所で見るのだろう?
そもそも見られて困る物でもない。
不愉快ではあるがな。」

とこうと、残念そうに眉をひそめるアルビレオ。

「……できやーきやー恥ずかしがつてくれれば、可愛かったのです
けれどね。」
「……本格的に性格が悪いな、お前。」
「よく言われます。」

「口リと微笑んで返す男。

そして、さつく私の本を開いて読み始める。

私の半生など概ね碌な物ではない。

目の前で読めばさすがに恥ずかしがるだらうとも思つてゐるのだ
らうが、600年前後も生きていればその程度何の問題も無い。
せいぜい氣まずくなれば良いさ。

と思つてほくそえんでいると唐突に笑みを消すアルビレオ。

「ここまで露骨に表情に出すとは思わなかつたが、少しせいぜいした
な。

「どうした？

予想以上に酷かつたか？「うん？」

「ええ・・・ある意味予想以上でした。」

あなたは・・・記憶を一部、改竄されている。
あなたの身近にいたある人に寄つてね。」

・・・改竄？

身近のある人？

心当たりがありまくるな。

だが、改竄とはどういうことだ？

「ゼクト。

解析用の魔法をお願いできますか？
最高位の物を三連式でお願いします。

エヴァンジエリン。

少し動かないでもらいますか？」

「あ、ああ。分かつた。」

なんだ？

なんだか大掛かりだな？

「む？

どうしたのじや、アル。」

「やればわかります。」

「・・・分かつた。」

最高位となると・・・あれかのう。」

しばらくぐじつとしていたが、五分ほどかけてようやく分かったようだ。

「恐ろしく巧妙に隠されていた記憶改竄魔法じやのう。

本来記憶を弄る魔法は持続時間を優先的に、威力を弱めて使うものなのじやが・・・

驚くべきことにこれはどんなキッカケがあつても、たどえ起こつたことをそのまま本人に知らせて、決して思い出さない様に厳重に幾重にも記憶を封印してある。

持続時間は50年。

しかもお主。

一部が封印されていて、それだけの膨大な魔力量か。

真祖の吸血鬼だけはあるの。」

ゼクトとか呼ばれた白髪の子供が呆れたようになぞう言つた。
厳重に封印するほどの記憶?

なんだそれは?

あの女はもちろん、木偶からも聞いていない。
何をしたんだ? 私に?

「それだけではありませんよゼクト。

この記憶改竄魔法の驚くべきところは50年の寿命しかないとこを封印した魔力で補つていたというところです。

これは解除するか死ぬかまで解けませんね。

決して自然には解けないように仕上がっています。」

「うむ、分かつてある。

さらに驚くべきことはワシとアルが協力して、ようやくその存在が分かるほどの希薄な封印。

希薄でありながら、厚く硬い。

解除もその辺の人間には決して出来ない仕様になつてゐるとは、恐ろしい物じやのう。

それほどまでに知られたくないこと・・・とはナンなのか？

少し興味がある。」「

いつの間にかゼクトとアルのみならず、ナギと呼ばれた少年や剣士、ムキマツチョまでこちらを見ていた。が、私としてはそれどころではない。

「そ、そんな物・・・いつの間に？」

「・・・私としてはこれに関わるつもりはありません。今しがた出会つた他人が口を出せるようなことではない。

ですが、個人的には知つておくべきことだと思ひます。

あなたが解いて欲しい・・・というなら今すぐでも解除しますがどうしますか？」

今まで・・・今まで騙していたのか？

あの女は。

木偶は。

私の記憶を弄つて？

何を隠した？

おかしいと思つていた。

うすうすは気づいていた。

私に対しても落ちない点が多かつたことが。

これがその答えのような気がする。

私の勘がそう告げていた。

なんだかんだで彼女達には感謝していた。

遊ばれていたとは言え、玩具扱いだつたとはいえ、結果的には助かっているから。

最近に至つてはあれほど願つていた復讐の念が弱まるくらいには。でも、でも、でも！－

あいつらは何を隠した？

私に？

どんなやましこどりを？

「おやらくあなたが考へてゐることとは真逆ですよ。
どうしますか？」

念のため。

これは言つておきます。

この記憶改竄は彼女らが”貴方のこと”を思つて”やつたことだよ。”

私のため？

私の？

人をこんなにしておいて？

親を殺させておいて？

何を虫のいこいとを言つて居るんだ！？

あいつらは！？

「解除しろ。

・・・してくれ。」

無き記憶を取り戻して、復讐心も取り戻す。
決まつている。

そして、そして、そして。
今度こそ殺してやるつ！－

「・・・分かりました。
では・・・始めます。

ナギやらカン、詠春、ゼクトの魔力も借りりますよ。
これを解除するには膨大な魔力が必要ですから。
エヴァンジエリン。

貴方の魔力も使わせてもらいます。」

「・・・構わん。」

早く。早く。早く。

思い出して、思い出して、あいつらを殺し・・・殺しに・・・

「殺しに・・・行けますか？

貴方は。」

・・・なんなのコレは。

「お、おい！？」

アル？何やつたんだよつ！？

泣き出しちまつたぞ！？

ちびっこが！－！

「アル、さすがに年端もないガキンチョを泣かすのはどうかと

俺様も思うんだが？」

「・・・私もさすがに今回のこととは見損なつたぞ。」

私は・・・泣いているのか？

「失礼ですね三人とも。

ゼクトは分かつてくれて・・・

「痛くしたんじゃなかろうな？」

「・・・ませんね。

仲間なのに、ここまで信じてもらえないとは。」

殺しに？

殺す？

誰をだ？

「殺せるはずがありませんよね？」

貴方にとって彼女は・・・親でもあり、姉でもあり、師匠でもあり、恋人でもあり、伴侶でもあります。

本当に氣づきませんでしたか？」

氣づく？

何に？

「彼女が親の仇である・・・その事実がウソだということに。

貴方してくれた全てのことが、貴方の今のためだったということに。

本当に？

微塵も？

欠片も？

気づかなかつた。

・・・ワケが無い。

田をそむけていただけだ。

目標が無ければ。

やりたいこと

それに向けて強い意志が無ければ、生きていく気力しなかつたから。

復讐に逃げていただけだ。

その辺の人間が相手ならばともかく。

あなたは何年、何十年、何百年と近くに居たのですから。

どんなに隠しても。

どんなに逸らしても

卷之三

「・・・ひくつ・・・ひくつ・・・

!

そうだ、私は甘えていただけだ。

あの人に。

あの木偶に

私があの女の悪口を言つと決まって悲しそうな顔を見せる木偶。

毎日欠かさず、美味しい食事。

無茶無謀な嫌がらせに見えて、結局生きている今。

あれだけのことがあって、あれだけのことをしてもうつて。
なぜ気づかなかつたのだろう。

気づいていたはずなのに。

なぜ皿をそむけてしまつたのだろう。

「・・・これを。」

なきじやくの私に指輪を持たせるアルビレオ。
魔法媒体だ。

「貸しにしておきます。

すぐにも向かいたいのでしきつ?

応援します。

がんばつてくださいね。」

アルビレオの言葉が終わるのも待たず、駆け出した。
彼女の・・・アリスの家へ。

久しぶりに来た家はとうになくなつていて。

学校となつていた。

でも、さがした。

きっとどこかにいるはずだ。

すぐ近くにいる。

魔力がある。

あの暖かい魔力が。

ほつとする優しさを持つ魔力が。

家は変わつていたが、間違えるはずもない。
雰囲気で分かる。

彼女の家だ。

思いつきりドアをぶち開けた。

びっくりしているアリスの顔が面白い。

魔力を抑えてやつてきたから、驚いているのに違ひない。

彼女は言った。

「今更、何しにきたの？
君にはもう興味がないんだけど？」

と。

ははは。

バカみたいだ。

私がまだアリスを憎んでると思つてゐる。

本当にばかばかしい。

600年も経つて漸く自分の気持ちに向か合えるのだから。

「もうそんな芝居しなくて良いの・・・姉様。」

「・・・芝居?」

何のことだかわから・・・」

嗚呼、この期に及んでこの人は悪役を演じよつとする。
もう無駄なのに。

無理無駄、極まりないのに。

本当に優しい人だ。

私の恨み言。

今まで1000や2000なんて物じゃない。
一万一万でもない。

それこそ毎日、私の罵倒を聞いてまで、私に生きる目的を作らせて
まで。

私を愛してくれた姉様がここにいる。
目の前にいる。

都合の良いのはわかってる。
でも、でも、でも。
もう間違えない。

姉様のためにも私のためにも。

間違えない第一歩。

その言葉を私は紡いだ。

『だあ～いすきつーー。』

今日からが本当の私の人生だ。
大好きな姉様に抱きつきながら。
切にそう思う。

6四目 アリスの気持

「ここも変わったわね。」

「そうだべな。」

人がこんなに溢れるとは、けよつと前までは思ひもよらなかつたべ。

「

私は新しく作ったこの家でのんびりと過ごしていた。

ここは静かであるが、少し歩けばすぐ公園の真っ只中である。

「麻帆良学園・・・だつたべか。」

「ええ、いつの間にか名誉会長なんて立場も付いてるし。面倒極まりないわね。」

単に土地を貸し与えて後は適当にニーステ生活を楽しもうと思つていたのに。」

貸すところか、いひなつてみると法外な値段で売りさばいても良いと思つたのだが、良くも悪くもお金の価値は不变では無い。硬貨一つとっても、江戸時代から今にいたるまで、かなりの変化がある。

たとえば、社会で認つてあるうつ硬貨における金の流出問題。

江戸時代。日本と外国が貿易をするために行われた外国貨幣と日本国貨幣。

あの時代は金の量＝お金の価値、という価値觀が主流だつたため、日本硬貨に含まれる金の比率が外国よりも多かつたため日本は損をしていた。

それに気づいた日本は、銀貨にもかかわらず金貨と同等の価値を持つ硬貨を作り出したり、金の比率が少なくとも金貨として扱う。な

どといつ貨幣革命と言つても良いようなことがやれりであった。

現代で言つなら、一千円札が有力か。

一時期流通した紙幣、一千円札。

結局のところ、当初予定していた効果が見られず、イタズラに混乱しただけに、後に廃止された。

すなわち、昨今の中学生、高校生は貨幣自体に価値が存在すると刷り込まれているが（もちろんその解釈でも普通に生きる分には問題が無いしあながち間違いでもない）、厳密には貨幣は商品券のような物であり、それ自体には価値が無い。

商品券となる貨幣、紙幣を渡して始めて価値あるものを入手できるのである。

こういったことから長期的に・・・特に私のような人外からすれば土地を売りに出すよりも、貸して常に搾取できる形を取った方が確かに建設的かつ効率的である。

「本当に・・・良かつただべか？」

「・・・何が？」

スパ君が唐突に真面目な聲音で聞いてきた。

「お嬢のことときまつとる。」

「・・・はあ。

下手な人間よりも人の機微に敏感な力カシがここまでやっかいだとは思わなかつたよ。

「今更、何を言つてゐるのさ。

もう一〇〇年も昔のことだよ？」

「・・・そだけども、アリス。

おめえさ、気づいてないんか？

あの日からおめえ、笑ってねえべ。」

そんなことは無いと思つただけどな。

「そつかな？」

割と笑つてると思つよ？

ポーカーフェイスは元々苦手だし。」

「・・・本当に心の底から・・・幸せな笑みをしてるだか？」

「心配性だなあ、スパ君は。」

やめてくれ。

言わないで。

そんなこと望んでない。

望んでも無駄だ。

「ずーっと一緒にいたオラには分かるだよ。

おめえさ、無理してるだ。

おめえさ本当はあの娘っ子のことを・・・

「やめてつ！－！」

つい魔力が流れ出してしまい、家にビビが入る。

そうそう、今となつては人外どころか化け物すら超越する魔力量になつてます。

純粹な戦闘力で言えば、サウザンドマスターとラカンが2人がかりでなんとか勝てるくらいの強さ。

魔力ありきならどんな存在にせよまず負けない戦闘力を誇る私。

私TUREEEEEEが出来てしまつ。

「・・・分かつてゐから言わないで。

お願ひだから、分かつてゐから・・・。」

「いやダメだ！－！

いい加減、オラも見てゐるのが辛いだ！－！

限界だ！－！

おめえに付きましたのもアリスのためだじ悪つてだがらだつ
！－！

でも・・・とてもじやねえが、そつ思えねえんだべ－！－！」

・・・スペ君には分からなによ－！

「わかつてたまるか！－！

おめえさがやつてるのは、ただの自虐だべつ－！

自己満足だべ！－！

あの娘つ子のためならまだ分かる－！－！

でも、おめえさがやつてるのは・・・やつてゐのは・・・

なんで君が泣くんだよ・・・スペ君。

「オラはおめえに幸せになつて欲しいだよ・・・ぐず。
なんで自分を許せないだよ・・・もう許されていいべ。アリスはが
んばつたべ。」

違う。
違つんだよ。

「確かにスペ君の言つてゐることもある。
何よりも自分が許せない。

その罪滅ぼしだつて部分が大半だ。
自己満足だつてのが概ねだ。

でも違う。

一番の理由はそこじゃないんだ。」

確かに許せない。

気軽に彼女の復讐を。

けじめの機会を奪った自分が許せない。

助けることができたはずなのに、見過ごした自分が許せない。

見通しが甘かつた自分が許せない。

楽観的な同情が、お節介が許せない。

それは確かにある。
責任を感じている。

でも、それだけなハズが無い。

あるわけが無い。

それだけで。

罪悪感だけで。

责任感だけで。

それだけで。

100年ならともかく、200、300、400年と。

罵倒されながら、殺意を向けられながら、それでも相手を想いつづける。

僕のせいだから?
僕がやるべきだから?

出来るはずがない。
出来るわけがない。

義務感？義理？道理？筋道？常道？正道？

ふざける。

ふざけてしまえ。

ふざけんな。

そんなちんけな物でここまで頑張れるはずが無いじゃないか。
僕はそんなマジじゃないし、自虐趣味も持ち合わせていない。
そもそもそこまで誠実な男じゃないっての。

好きだからに決まってる。
愛してるからに決まってる。

彼女をはじめてみたとき。

その目を見たとき。

一眼ぼれと言つても良いかもしれない。

魔族と化しながら、親を殺しながら、それでも自身を、自我を持ち
続ける強靭さ。

自分のしたことを受け止めようとする誠実さ。

誰のせいにするでもなく、殺した相手を抱え込む優しさ。

憎い憎いと良いながらも決して卑怯な手は取らなかつた気高さ。

どんなに苛められても。

どんなにいたぶられても。

どんなに苦労しても。
這い上がってきた堅実さ。

そんな彼女の力になりたい。
手助けをしたい。
救いたい。

それが一番の理由。

同情なんかでここまで出来る人間なんているわけ無い。

僕は彼女が好きだから。

大好きだから助けていたのだ。

一眼ぼれって嫌だよね。

全く持つて嫌だ。嫌だ。

どんなに辛くとも。

どんなに苦しくても。

惚れた女のためならば火の中水の中、魔法の中。

余裕綽綽ってやつですよ。

僕って嗚呼良い男。

僕が生まれて存在してるがゆえに、サウザンドマスターであるナギ

との恋は破局確定だけれども。

アリカ姫と会う前ならば多少はラブラブできるかなと。

記憶封印の魔法に無意識的に後を追う様に簡単な意識誘導魔法をかけたりして細工したりとか。

封印に使う魔力の確保のために魔力も一緒に一部封印したけれど、万が一死んでしまわないよう。

万が一、野垂れ死にしないように。

チヤチヤゼロにこつそりお願いしたり。

そう、僕が今まで生きてやつたことは全て自分を責めているように見せかけた、单なる手助けだ。

惚れた女性が少しでも、多少でも、微量でも。幸せに、楽に、おかしく過ごせるように。

恋敵であるはずのサウザンドマスターの件まで応援したりして。バカじやないのかと想う。でも、男つてやつは概ねバカなのだ。仕方ないのだ。

せっかく、割り切ってたのに、SPA君がほじくり返すからまた涙が出てきたじやないか。どうしてくれん?

「仇役が泣くほど嫌なら止めればいいべー!」

惚れたなら、おめえさの手で幸せにしてやればいいべー!?」

「そしたら、誰が仇役をやるの?」

誰を犠牲にすればいいの?」

「そんなのオラが・・・」

「そう言つてくれるSPA君だからこゝ出来ないんだよ。

他人を巻き込むのは論外。となると僕しか居ないでしょ?」

本当にSPA君は良いやつである。

「それに僕は單なる失恋つてやつだよ?」

彼女に比べれば遙かに幸せだ。
さつき、SPA君は言ったよね？

本当に幸せを感じて笑ってるかつて？

「んだ。」

「最上の幸せじゃないってだけで、今僕はとっても幸せなんだよ？
好きな人のために色々出来て、その人の幸せの手伝いだって出来る。
SPA君っていう親友も居る。

ほら、振り返つてみればとても幸せだ。」

「・・・そうだべか？」

「そうだよ。

さつきは惚れた人のためだから頑張るとか言つたけど、君が居てくれたから・・・理解者が、唯一の家族が近くで支えてくれたから、今の僕がある。

十一分に幸せだよ。」

「・・・本当にそうだべか？」

「そうや。

無理してるかは長年付き合いのあるSPA君なら分かるでしょう？
悪いところにばっか目に向いてるけど、良いところももちろんある
さ。」

「・・・分かったよ。どうせ言つたって無駄なことは分かってるだ。
今回のことでもまたそれを再確認しだべ。」

「じめんね、頑固な息子で。」

「・・・オラの息子だと想つてゐるならたまにはオラに甘えるだよ。」

「十分甘えてるつもりなんだけどな・・・こんな迷惑や心配をかけ
てる時点です。」

「もつと甘えて良いつことだよ。

そっちの方がよっぽど心配ないだよ。」

・・・もつととなると甘え方が分からなくなるね。

「それに女の人は彼女だけじゃない。

今回はたまたま上手くいかなかった。それだけ。」

「とか言いながら、もつ好きになることは無いんだべ？」

うぐ。

鋭いなあ、本当に。

まあ好きになる人なんて一生に1人いればいいよね？

「そ、そんなの分からぬじやないか？

自分でも予想外の恋が芽生えるかもしれないよ。」

「・・・そう願うだ。」

難しいことには違いない。

だが、本当にその辺は前向きに考えている。
とこうか考えざるを得ない。

サウザンドマスターがダメならその息子。

ネギにまかせようと思つてゐるのだ。

歴史上ではネギはこれから先、ハーレムをつくることになる。
が、それを僕が横から搔つ攫うのだ。

エヴァちゃんに会つまでは原作に入するつもりはあまり無かつた
が、エヴァちゃんの恋を成就させるためには必要である。
本来の歴史ならばエヴァちゃんはサウザンドマスターに惚れるはず
だ。

そのためのお膳立てもある。

結局、失恋は決まつてゐるが、そこからネギへの興味も人一倍とな

る。

僕というイレギュラーがいなければ特に何もせずとも、好感度は上がっていくだろうからネギの感情のみが問題となる。もちろんネギに近づく女生徒をここぞとばかりに名誉会長の権限を使つて妨害。

それで無理なら手段は選ばん。

優しくして僕に惚れさせるという手も考えている。

申し訳ないが、殺しや脅しも視野に。

下種な手だと自覚はしているが、僕は全知全能でも聖人君子でもない。

誰を一番大切にするべきなのか？

その優先順位は間違えない。

弟のネギにはエヴァちゃんとのみラブラブしてもいい。

「」の話はここまで。

せつかくだし、ネギとエヴァちゃんをくつづけるための作戦も軽く考えておこうかな？」

「・・・オラにも協力しろってか？」

「当然。

やつてくれるよね？パパ。」

「・・・オラが手伝わなくともおめえさはやるんだべ？」

手伝うだよ。」

「だからパパって大好き！」

「・・・気持ち悪いだな。」

し、失敬だな。

パパさんプレイはスペ君にとつてはよろしくないみたいだ。

バタンッ！

急に乱暴に開いたドアが目の前を過ぎ去った。

なにこれえ？

開いたところが引きあわせたって感じ。
引きあわせたて、飛ばした？

「ちょっとーー？」

だ、誰よーー？

人ん家のドアを景気良ぐぶり壊してくれたヤツ……は……あら

？」

え？

なんでエヴァちゃんがこんなとこに？
おかしいぞ？

チャチャチャゼロからは何も聞いてない。
つとヤバイヤバイ。

ポーカーフェイス。ポーカーフェイス。

彼女の前での私を演じないと。

「今更、何しにきたの？」

君にはもう興味がないんだけど？」

まあ普通に考えれば殺しに来たってことないだよね？

でも、何かおかしい。

そもそも魔力がエンブティ間近。

そんな状態で殺しに来た所で返り討ちに遭うことにくらい分からぬ
わけがない。

何らかの経緯で感情が暴走。

自身を省みず、欲求のままに殺しにきた。というのも考えにくい。

なんせ、やつした感情は戦いにおいて命を落とす原因にならしかねない。

特に”確實に殺したい”相手に万が一にでもそんなミスをするような教育はしていない。

じゃあなんだ？

目から感情を読み取るにも色々な物が渦巻いてるようで、全く読めない。

理解が出来ない。

何を考えている？

彼女とはかれこれ400年以上の付き合いだが、こんなことは今日が初めてだった。

「もう・・・そんな芝居はしなくて良いの・・・姉様。」

「・・・芝居？」

何のことだかわから・・・」

芝居？

記憶改竄の解除を自力でした？

いや、ありえない。

エヴァちゃんでも解けないように、念入りに。

それも私の家族兼師匠であるスペ君にやつて貰った記憶封印だ。

私の手でも確認してある。

元々サウザンドマスター やその周辺の最強クラスの人間に接触させる予定だったから、そのクラスの鋭い人間でも気づけないように巧妙に隠蔽したはずだ。

それこそ解析魔法に詳しい権威が念入りにやつて初めて、ようやく気づけるというレベルの完璧な隠蔽を行つた。

そのため、その辺の解析魔法を掛けられる機会があつたとしても問題ないはずだ。

そもそも何か支障が出ているというわけでもない相手に、解析魔術を念入りに行なうなんていう意味不明なことをやる人間が居るわけがない。

しかも万が一気づかれて解除できないようにかなり強固に、協力に。

私の全魔力を込めた”最強の呪い”のような物だ。

これは魔法の中でも最高峰の呪い効果を持つといわれる”永久石化”を解除できる人間ですら解除できないと想われるレベル。まずありえない。

そう、それこそ英雄級の人間が集まつて、偶然が重なつて。始めて解ける記憶封印術。

まずこんな偶然が重なるわけが無いと安心してサウザンドマスターたちと接触させたのだが。

『だあーいすきつーー!』

正直、舐めていた。

もつと念入りにやつておけば良かつた。

それこそ造物主にも解除できないほどのものを。

抱きついてくるエヴァンジエリン。

どうして抱きついてくる?

私が何をしたのか分かつてているのか?

何を考えているの?

分からない。

聞きたくない。

答えを聞くのが怖い。

そうだ、もう一度。

もう一度。

今度こそ。

完全に秀逸に完璧に。

二度とよみがえることの無いように深遠の底に沈めてしまおう。

嬉しい。

嬉しそぎて涙が出る。

でも、こんな最上の幸せは求めていない。

求めたくない。

自分の愛した人をみすみす不幸な目にあわせておいて?

今更どの口が幸せを求められるというのだ。

そんな人間が彼女の横に居て良いはずが無い。

彼女を幸せに出来る人間はきっとほかに居る。

さあはじめよ!」

もう一度。

もう一度。

記憶を・・・

「あぐつーー?」

チャチャゼロが僕の右腕を切り落とした。

せつかくの魔力が飛散してしまった。

何をしてくれる?

ほら、エヴァちゃんもいきなりのこと驚いているじゃないか。僕の血なんかで汚れちゃって。

せつかくの可愛らしさが半減だ。

「どうこうつもりだい？」

チャチャゼロ？」

「・・・ゴシュジンノタメニ

ウゴイタダケダゼ。

オレハ。」

何を言つてゐる？

彼女のためを思うからこそ、いや、自分のためなんだけどね。うん。

「攻撃魔法を使うとでも？」

まさか。もう一度記憶を封印するだけだよ？」

との言葉を聞いて、瞬時に離れるエヴァちゃん。
なぜ離れるのだろう？

「どうこうつもりですか？」

姉様。」

「エヴァちゃん。

これは君のためもある。

スパ君。彼女を取り押さえて。

チャチャゼロも、邪魔をするなら壊すが？」

「つー？」

僕の言葉を聞いて、構えを取るエヴァちゃん。

どうしてそんな顔をする？

「嫌です。姉様。

私はもう忘れない。」

「トイウワケデ、オレハアリストノ邪魔ヲサセテモラウ。」

はつ！

何を言ひてるんだか。

僕とスパ君に適うと思つてゐるのか？

「ダメだ。

消さないとダメだ。

スパ君、何をしてるの？

早く手伝ってくれないと——

「いや、オラは協力しねえだ。

いい加減、面倒は見切れないだ。」

「どうしてつ！？」

「もう止めるだアリス。

もう十分、罪は償つた。

何よりもおめえさ勘違いしてる。」

何を勘違いしてるつて言つんだよ？

「幸せは誰から貰うもんでねえ。
自分で決めるもんだ。」

「そんなの奇麗事だつ！
「バカヤロオッ！！

づあつ！？

殺す気かつ！？

いきなりの全魔力を込めたパンチとか！？

すぐさま私が結界を張らなきゃ、学校の半分が吹き飛んでるところだ。

とこうか、バカヤロオとか言われたの初めてです。

「人によつて価値観が違つよつて、人によつて感じる幸福も違つ。

お嬢を見てみるだ。

お嬢は幸せに見えるか？」

エヴァちゃんは目に涙を一杯に溜めて、嗚咽を必死に我慢している。

「それは・・・記憶が戻ったから・・・復讐の相手が・・・いなく
なつたから・・・」

「違うよおつー！」

ひでぶつ！？

こんどは吸血鬼の腕力を全て込めたビンタとか。

何！？

この人たち！？

どさくさに紛れて、殺そうとしませんかつ！？

「復讐なんてどうでも良いくつーー

私知つてたつーー

変だつてことにーー

100年も200年も経てば、たとえ記憶が改竄されてたつて分か
るーー

分かるに決まつてるでしょつーー

「ど、どうでもいいの？」

「復讐の念がそんなに長続きするわけないでしょーー私だつてバ

力じやない。

全部私のためじゃつてくれてるの」心から感激してゐる。」

僕の長年の苦労はどうへ行つた！？

「・・・私にとつての幸せはそんなことじやない。
私のことを思つてくれてるなら、姉様が居ればいい。

居てくれるだけで良い。

ずっとそこばに面てくれれば良いの。

それだけで幸せだから

幸福ななら

だから、姉様も・・・無理なんてしなくて良い。

私が姉様を幸せにする番。

だから、お願ひ。

私をそばにおいて?」

といって、上目遣いに僕を覗き込んでくるH・ヅ・アちゃん。

こんなときに不謹慎だと思うかもしれないが、すゞく可愛いです。

と、さうか、結局これって僕の一人相撲じゃね？

僕は400年以上も何をやつてたの？

馬鹿なの？

アホなの？

死ぬの
死

もう笑うしかないつてね。

笑つて全てを吹き飛ばしてやらあ。

何をやってたんだろうね僕は。

勝手に抱え込んで、勝手に押し付けて。

結論から言えれば、どぞのつまり”大きなお節介”だつたつてわけだ。

400年経つても同じ失敗を繰り返す僕は一体、どれほどの阿呆でバカなのか。

小一時間くらい考察してみようかね。

「ね、姉様？」

姉様は私の・・・私のことをどう思っていますか？」

どう？

どう思つてる？

愚問だね。

決まっている。

僕は速攻で答えた。

「だあ～こすわっしー！」

意趣返し兼ねて、こんな感じにね?
いかがでしょ?う?
エヴァにゃん?

6 四目 アリスの気持ち（後書き）

ここまで来たら分かるとおり。

今作でのヒロインはエヴァアです。

主人公は非常に思い込みが強く、押し付けがましい・・・すなわち、不器用な男の娘。でも、こつから先はラブラブ一直線。

安心して（？）見守ってくださいませ。

本来ならもう少し長いのを予定していたのですが、これが作者の精一杯。

このページでエヴァンジョリン編は終了。

次回からは紅き翼編。

と言つても主人公は表向き活躍はしません。

7つ目 名実共に、一生共に

「・・・はあ。」

「どうしたべ？」

アリス。」

私を氣遣ってくれるスパ君。
まあ、いきなり大きなため息を出せばねえ。

「どうしたも何も無いよ。

こんな馬鹿なことを600年も氣づかないなんて・・・自分のバカ
さ加減に呆れる。」

「オレー！」主人ヲマモレトカ、イイツケタリナ。」

「う、うるさいな。心配だつたんだ。
何かと物騒だしさ。」

チャチャチャゼロにはキッチリ守つてもううように、超さんが使う魔法
紋と同じものを組み込んである。

もちろんエヴァちゃんには秘密。

ちなみにエヴァちゃんは頭から被つた血を取る為に、お風呂に入っ
ている。

切り落とされた右腕はどうなつたって?
つなげたに決まってるじゃないか。

「うなつてくると、全部話さないとダメかなあ・・・？」

「オラは別に構わないだ。」

「ハナシタホウガイイダロ。」

秘密ニサレタママジヤ、オモシロクネエトオモウゼ。」

私がサウザンドマスターとアリカの子供だつて事も、神様に頼まれてただ生きるのが目的だつてことも話さないとダメだらうな。髪の毛も黒じやなくて本当は金だとか、小さなこともある。
これから先、大体のことはいつかバレルだらうし。

歴史を知つてゐるつて事以外は全て喋ろうと思つ。
歴史うんぬんはまあ良いだらう、話さなくとも。そもそも700年も前に知つてたことなんて殆ど忘れちゃつてるし。未来人が居るとかいつか魔法世界にネギがいくとか。
それくらいしか覚えてないです。

「それよりもだ。

一番の問題がある。

「なんだべ？」

「ケケケ。

オマエガ男ダツテコトカ？」

む？

人形のくせに鋭いじやないか。

といふか、我が家においては人間よりも人形の方が鋭いかもしだい。

スパ君しかり、このチャチャゼロしかり。

「そのとおりだよ・・・彼女を魔法世界に放つたらもう会つてしまは無かつた・・・といふか、そもそも知らせの必要が全然無かつたんだね。」

別に男だらうと女だらうと、どうでもいいじゃん？

みたいな。

どうしようつか？

「『主人ノ、マンマエテ脱イダラドウダ?』」

「なんで！？」

「いきなり脱ぎ出したら変態じやん！？」

「お風呂に一緒に入つたらどうだべ？」

「いや、それも無いわ！..」

「どうか、一緒にお風呂？」

お、おま、おまおま、おまえね！..

いくら幼女といえど、好きな女の子といきなり一緒にお風呂とか！..?

入れるわけ無いじゃん！？

恥ずかしすぎるわ！..

もし生理現象的なもので反応しちゃつたらどうするの！？

付いてるはずが無い物を見て、ただでさえショックを受けるだらうに、目の前で反応するとか！..

エヴァちゃんのリアクションが予想できないだけになおのこと怖い！？

でも、このままだと彼女の好きは異性の好きではなく、家族としての好きなんだよね。多分。

お互に人外だし、600年も生きてれば性別なんて括りに捉われてない・..・という可能性もなきにしもあらずだが。

私としては異性としての好きでも相手にその気が無いのは嫌だ。かといって男だと教えた途端に嫌われたりとかしたらどうしようつて思いもある。

「700年近クモ生キトイテ、チツチエコトアラキースルナ。」
「気にするつて！」

「意氣地が無いだ。

一生、憎まれ役を勝手出る氣概があるべせじて、この程度の覚悟が無くてどうするべ?」

変なところで並の人よりも纖細なぐせして、じつこうといふドアリカシ一無いね!?

君たちは!!

「チャチャゼロに聞きたいんだけど・・・エヴァちゃんの好きはどういう好きだと思う?」

「オレヨリモ付キ合イノナガイ、オマエガワカラネエノーワカルトオモツテルノカ?」

トイウカ、ワカラネエノカヨ?」

「・・・殺氣とか、ご機嫌状態とかそういうのは分かるんだけど。・・・私に向かってく好意を受けたのは・・・今日が初めてだし?」「オラとしては問題ないと思うだ。

それに、なんだかんだで好意に近い感情は向けてたで?」

「そ、そうだつたの?」

「オラから見た感じでは、お嬢は薄々なり氣づいてた節があるだからな。

アリスがお嬢を想つてたり、お嬢のためにしてきただつてことを。」

「・・・気づかれないようにしてたつもりなんだけどな。」

「アリスはボーカーフェイスが苦手だから・・・ちらほら思わず漏れたつて感じの笑顔を向けてたで。
気づいてなかつたんだか?」

「・・・うるさいな。

腹芸は苦手なんだ。」

「そんなおめえを見てたら、嫌いになんてなれねえべ。

男だと知つたら、むしろ喜ぶんでねえか?」

は?
なんで?

「交尾ガデキルカラカ？」
「ぶはつ！？」

いきなり何言い出すんだ！？

こ、こ、こここ、この、この、ここの人形は！？

「交尾シテ愛ラタシカメルンダロ？
人間ハ。

変ワツタイキモノダゼ。」

「んだべ。

交尾を誘つたらどうだべ？

断られたら家族として好きで、断られなかつたら家族として旦那と
してだつてことだべ。

簡単にわかるべ。」

あ、アホじゃないのか！？

この人形どもは！？

といふか交尾、交尾と言つな！！

「な、何を言つてるんだよバカ！！

わ、私は・・・え、別に口リコンじやないし！！

な、なな、なんといふか、一緒にいれれば満足だしつ！！

「ね、姉様？

一体何の話ですか？」

わひやあつ！？

いつの間にかエヴァちゃんがいるよ！？

「いや何でもないよ！――

四百一

「アーティストの門」

それに寝る時間といつても、

妃様

ふす」として、類を臍らます。カアちゃん。

「おまえ、何が何だか分からんのか？」

「バカな人形が余計なことを言う前に!!」

いや、それよりもだ。

「それよりも、
ハザーブルさん！？」

どしてタオル一枚でここに！？

セヤんと着替えは置いておいたでしょ!!

中のな、なな、流し合いとかも良いかな、と思いまして。」

#111

じゃねえ！

来るなよ!!?

「アーヴィング、お前がどうのうが、おまえが何をやるか、

というか、エヴァちゃんお顔真っ赤だよ！？

そんなに恥ずかししなりまた今度にしたら！？

「あの、今はそういう気分じゃないって言うか・・・ね?」「ね、姉様は私とお風呂に入りたくないんですね?」「流し合いなんて面倒ですか?」

ପାତ୍ର !?

泣き声になるHUGアチャレンジ

目に涙か一枚

九十九

「いや、面倒でも嫌でもない・・・んだけど、今はまずいといふが、むしろばつちこいつていうか
でも来るなつていうかね？」

「みたいな？」
「ぐくと移つちやうよ？」

赤痢アメーバってなんだそりや！？

この状況で、そのチョイスが出来る自分を褒めたくなる！？
ありえないさすがだろ！？

私のバカ！！

「アレハワザトヤツテルナ、ゴ主人。」

一
わざひ?

・・・・・ビル二階———ああ、そうだが。

「サスガオレノゴ主人。」
「もう知ってるだな。あれは。」

人ヲカラカウノモ、才手ノモノダ。

後ろで人形どもが何か言つてゐるけど、そんな場合、じゃない。
さて、どうしよう…?

この場での選択肢4つある。

1、逃げる

2、そのまま入る

3、なんとかごまかして入る

4、入らない

逃げるは無い。

いくらなんでも無い。

入らないというのも無い。

泣かせてしまつ。

そのまま入るも無い。

まだバラす覚悟が無い。

残りはアレだ。

ごまかして入るだ。

よし！

幻術だ。

こんなときのための幻術！

とは言つてもエヴァちゃんくらいだとバレるかもしれないが、バレたところで何を誤魔化しているまでは分からぬはずだ！

後から気づいたことだが、”女と偽つて女性と風呂に入る中身も体も男の人間”って犯罪なんじやないだろうか？

少なくとも、今現在はテンパつて思い立たない私である。

さっそく風呂場へ。

エヴァちゃんも少し恥ずかしいのか、タオルを取らない。

「どうか、それバスタオルだから風呂の中まで持つてきちゃダメじゃない? とは言えない私。」

上がった後にどうやって体を拭くつもりなんだらうか?

私も服は脱いだ。

男物の下着はもともとそういう趣味だってことで憎まれ役時代にすでに知ってるから問題あるまい。

下着を脱ぐと同時に私の股間にある男性特有のものから意識をそらす幻術を使う。

視覚的なものも一応掛けておく。

その間もまだバスタオルを取らうとしないエヴァちゃん。

そんなに恥ずかしいのになんでこんな無茶振りを! ? と思つたけども、これはチャンスである。

「えと・・・恥ずかしいなら無理はしなくていいのよ?
エヴァちゃん。」

言い聞かせるような聲音でそう言ひ。

頼む、通用して! !

神様に祈りながら・・・この際、あの金髪幼女の神様でも良い。

頼むからこの状況を開いて・・・

「いえ、大丈夫です、姉様。」

がつでも! !

おーまいじつど! !

あの使えない金髪幼女、ぶち殺す! !

とか理不尽な恨みを生成しつつ。バスタオルを外すエヴァちゃん。

やばい、口っこんじゃない。

口っこコンでないと断固として言つておいた。

700年も生きれば容姿は一の次になつてくるし。

口っこコンじやないし！

していい！――

ぐふつ！？

鼻血がでやうだ！！

反応しちゃこやう――！

まづこ――！

まづいぞおつ――！

「ああ姉様、背中を洗つて差し上げます。」

「え、ええ、ありがとや。」

がっちがちに緊張しつつ、私は戦場へと旅立つた。

ヤバイヤバイヤバイヤバコさんだ！――（？）

何がヤバイって、やたら体を擦り付けてくるエヴァちゃんがヤバイ。
必要以上に接触してくるんだけど、これってワザとじやね！？
甘えたい年頃なのか！？

でもこう見えて、彼女600歳前後ですよ！？

特に重点的に股間ばかり攻めて來てる気がする。

あ、ごめんなさい、姉様。とか言いながら股間をわしづかみにされた時は、死ぬかと思った。

心臓がはじけるかと思つたよ。

なんでわじづかみ！？とかツツ「む余裕ないよ！？」

鼻血と生理反応の阻止で精一杯です。

私の体を使って洗つてあげますねとか言つて、体を擦り付けて背中を洗うとか！？

どこのエロビデオ！？

石鹼が私の股の間に落ちたと思ったらそこに体を入れ込みつつ右腕をつっこむとか。

つい股を閉じて、エヴァちゃんの右腕を挟んでしまい、エヴァちゃんが驚いたのか腕を引くと股があま擦れて。生娘のような悲鳴を上げるところでしたよ。

もちろん「ひうつ！？」あたりでとどめた。

700年的人生経験は伊達じゃない！！

いや、こんな経験一度も無かつたけどさ！！

好きな女性自体、エヴァちゃん以外にはいなかつたからこんな状況・

・・というかえっちっぽいこと自体、これが初めてです。

エヴァちゃんも最初はぎこちなかつたんだけど、徐々に乗つてきたのか、やたらと色っぽい動きと声で責めてくるんだ。
何この子！？

本当に幼女！？

うぬは何ヤツ！？ただの幼女ではあるまいな！？
つて思つくらいに。

いや、ただの幼女じゃないけどさ！？

大丈夫だ大丈夫！！

私を舐めるなよ！！

こんな時こそガチムチ神の出番だ！！

頭の中でガチムチガチムチと呪文を唱えながら、目を瞑つて瞑想。頭の中では絶賛ガチムチバトルが白熱中！！

ふはははははははははは！？

ガチムチ万歳！！

ジークオン！！ガチムチ！！

私はガチムチ・パロ・ラピュタだ！！

目がああああ、目がああああ、ガチムチに犯されていく！！
ヤバイ！！

今度は戻れなくなる！－

「と思って田を開けるとそこには私を上田遣いでのぞいてくる美少女。装備は裸。

美術出版社

今までがチムチモリだつたせいが、その反動で、ギャツブで

ノリトシ

私のライフはもう〇よーー

体がいつの間にか洗い終えていたらしく（あれ？ いつのまに私は洗われていた？）浴槽に一緒に入ることとなつた。

大丈夫

今の今までのビンクスームに比べれば、ただ一緒にいるくらいなんともない。

私の股のところにあよじんと座つゝむよつに風呂につかる彼女。

エヴァちゃんのかわゆいお尻が私のトップシーケレットに押し当たられ、刺激され、いよいよもつてエクスカリバーの鞘が吹き飛んでしまった！！

ପ୍ରକାଶକ ପତ୍ର

大丈夫、大丈夫。

「ハシトの瞳にも映じた光をかねハカラ かせん。

色々危ないが問題ない。

問題は無い！！

再度、ガチムチモードを発動するのみ！！
さあ、私の中に眠るガチムチパワーよ。

今こそ目覚めるのだ。

ガチムチ眼を開眼し、全世界の国民に永劫なるガチムチの安らぎを
！！

さあ万華鏡ガチムチ眼による幻術で、現実では一秒しか経過しなく
とも幻術の中ではガチムチ専門誌『ガチに生きる』に掲載されてあ
つた、ガチムチプレイ百選を自身に掛けるのだ。

そうすれば私のエクスカリバーも滾る血潮を収めてくれるはず。
ごめんね、エヴァちゃん。私は修羅に・・・ガチムチに生きる者。
あなたのそばには居られない。

アディオス、エヴァちゃん。

とか思つてた頃がありました。
なんとまあ強力なことに、エヴァちゃんは驚く」としておやがり
ましたよ。

「姉様・・・私を・・・好きにして？」

好きにして・・・好きにして？

スキンにして？

スキンヘッドにして？

スキンヘッド？

すなわち禿になりたいというのかつ！？

この子は！！

なんて恐ろしい子！！

世紀末に生息するモヒカン達と交友をはぐくもつとこうのかつ……
そんなのお母さん許しませんよつ……！

とか言つたら、エヴァちゃんに殴られた。

「姉様、ふざけるのは止めて

姉様が男だつてのは知つてる。」

「……へ？

し、知つてたの？」

「というか、聞こえた。」

「……うつかりしてたわね。」

「むしろ嬉しかつたもの。

これで名実ともに姉様と一緒にいられる。

妻として、伴侶として。

姉様は私じゃいや？」

「……いやなワケないでしょ。

いいの？

私、貴方の復讐を奪つたし……色々迷惑かけた。

これからもきつと迷惑を……

とか言つと、またもや殴られた。

別に殴るのはいいんだけど、（よくないけど）吸血鬼の力考えてね、
エヴァちゃん。

私だから大丈夫なものを、普通の人なら殴られたところ吹き飛んで
るからね？

「今更過ぎるよ、姉様。

言つたでしょ？今度は私が姉様を幸せにする番だつて。

私の旦那様に……なつてくれますか？」

「H'ガアちゃん・・・。」

「キティって呼んで。」

「キティ。」

「うん。」

あ、やば。

泣けてきた。

嬉し泣きとか恥ずかしい。

「むしろいつもからお願いしたいくらいだもの。
私と・・・私の奥さんになつてくれますか?」

とこりとH'ガアちゃん改め、キティは。

「 もうねえ。」

不束者ですが、末永くお願いします。」

と言つた時の彼女の笑顔は私にとっての一生の宝物だ。

どんな時もカメラは持つておひつと誓つた瞬間もある。

7つ目 名実共に、一生共に（後書き）

前回でエヴァンジエリン編は終わる予定でしたが、今回で終わることになりました。

これで名実共に、彼女達は家族です。

昨日、結婚したらすぐ離婚という家庭が増えています。悲しいことですよね。清濁合させて相手を愛するというのが出来なくなっているつてことでしょうか？

結婚して始めて分かることで途端に冷める・・・ってことですね。

今回はこの作品中のみの設定が出てきました。

名前にすることですが、エヴァちゃんのフルネームは「エヴァン・ジェリン・A・K・マクダウェル」です。

略称も直したフルネームは「エヴァンジエリン・アタナシア・キティ・マクダウェル」となります。

A・Kの部分はミドルネーム。

ミドルネームは日本人の文化には存在しないため、分かりづらいですが、一言で言つなら「勝手に名乗れる個人名」といったところでしょうが？

文化圏によりミドルネームをそもそも持たなかつたり、名前を略してミドルネームのほうを名乗つたり、その逆もあつたりと日本人には理解しにくいものです。

かくいう僕もあまりはつきりとは理解してません。

というわけで、とりあえず今作ではエヴァンジエリンが名前。

マクダウェルが名字。アタナシアの部分が貴族名（どういう貴族？　という身分をあらわすもの）。キティが家族間のみで許される愛称として設定しました。

キティという名はそれこそ親や伴侶のみに呼ぶことを許されるもの。

・として定義しておいてください。

家族以外がこの名を呼んだ場合、初対面の女性の胸をわしづかみにすることよりも無礼なこと。として理解してもらえれば幸いです。すなわち、今回の「キティと呼んで」のエヴァちゃんの発言は暗に「家族になつて欲しい」という思いが込められてるわけです。今回の話はちょっととえつちなラブラブだけだと思つたかもしぬませんけど、結構重要だつたりする話です。

❀四三 はた迷惑な姉妹

結局のところ、何も無くそのまま終わった。

ウトウトしたころに私の布団にキティが潜り込んできたときは実に驚いたけど、まあ家族だし。
ま、いつかってことでそのまま寝ること。

スパ君が「良かつただ〜良かつただ〜」と言しながら泣いていたのがまた申し訳ない。

心配をかけてたことをより理解させられたよ。ホントにね。
チャチャゼロも何か思うところがあつたらしく。
どこから持ってきたんだか分からないが、そこそこ上等そうなワインをどこか嬉しそうに飲んでいた、気がする。
んでもって、次の日。

「姉様。

どこかへ行くのですか？」

「うん。」

私は現在、玄関で支度をしていた。といつても簡単な物だけ。
でも軽く旅できる程度には多い荷物だ。

「ちょっと魔法世界にね。
キティには言つたでしょ？」

私の目的は・・・というか、頼まれたことは一定量の魂生成。

あの金髪幼女の話によれば、私が生きている。

それだけで魂が生成されていくらしいけど・・・」

今更だが、私のこの世界での目的・・・というか目標？依頼？それを振り返つてみる。

あの神様によると、私は1000年生きなくてはならない。私の魂に魂生成器なるものを組み込んでいるらしい、私はただ生きているだけで魂を生成するとのことだ。

私が死んだときに神様が言ったように、”世界による魂の数は決まつていて” という世界の法則があるらしい。

それで、その世界で決まった数の魂をつくる。それが世界の創造をする上で一番先にやらなくてはいけないことらしい。それが出来て初めて、輪廻転生機構が働くのだと。一日に約100個の魂が仕上がるそうで、それを1000年分。それが私の役目だった。

別に急ぐ必要はないのだが、私は夏休みの宿題を最初の数日こじるタイプである。

後顧の憂い無く、何も気にせずキティとイチャイチャラブラブするためにも、死なない程度に真面目に魂生成をやろうか。となつたのだ。

そこで、魂生成の話に戻るのだがこれは生き続けるだけでなく、とある方法で早めることが出来る。

それすなわちこの世界における魂を生成する魔術。

『造物主の捷』（コードオブザライフメーカー）である。

それを行うのに必要な物がフェイト達が持つマスター・キー、グランドマスター・キー、グレートグランドマスター・キーのいずれか。

性能の関係上、できればグランドマスター・キー以上が望ましい。

私の魂に組み込まれてる魂生成器と組み合わせると、アスナ姫の力を借りずに造物主オリジナル魔法である『リライト』まで使ってしまっていい。

要は、チート能力を単体で使う力を手に入れるためと神様から言い

渡された宿題をさしあと終わらすために、「完全なる世界」の連中の誰から、マスターキーをちょうまかそうぜつてわけである。

そのために考えた作戦が”サウザンドマスター達、紅き翼について行き、サウザンドマスターが造物主をぶつとばす所でこいつそりと造物主の持つグレートなマスターキーを奪っちゃうぜー”で、それをするためにまず彼等に取り入るために今から魔法世界に行こうつてことである。

奪い取つたら、即トーンズラ。

もちろん、持つてるとフォイト達に付け狙われてしまつので、使つた後はこいつそり返す予定である。

ついでにアルビレオ・イマにお礼をしなくてはなるまい。

今の私達があるのは彼のアーティファクトのおかげのようだし。おかげ・・・というより”～せいで”と言つべきかも知れない。複雑な心境である。

「というわけで、ラブラブいちゃいちゃしたいところだけど、せつかくお礼という口実があるわけだからこれ幸いとばかりに取り入つてくるわね。

キティはお留守番——

「私もついてこきます！——

「いや、一応危険もあるわけだからキティは——

「ついていきます。」

「でもね、キティ。今の計画を聞けば分かるとおり、こいつそり奪うだけといつても力量の測れない相手のラスボスに会う機会がある以上——

「姉様にとつても危険です。私だつて守られてばかりじゃない。」

というキティの顔は決して意思を曲げない。言つことを聞かないという感じ。

・・・無駄よね。これは。

「私が誰に育ててもらつたと思つてゐるんです？」

「姉様、その程度の理由で私の意思を曲げられると思うたら大間違です。」

「そ、その言い草は酷いだよ！？」

「どう考へてもオラのせいではないだべ！？」

「ドウ考エテモ、アリス似ダロウ。」

うるさい人形どもだ。

「そ、それに…」
「ん?何?」

恥ずかしそうに言ひにくそつ、顔を俯けるキティ。

「う、浮氣をしないか・・・心配です。」

上目遣い気味に頬を真っ赤にして。

そんなことをのためうヰテヤ。

可愛こむー

呪い、たゞあ、やしない!!

!! いはやかなこと そのなしにせよ いはやかなこと

「ふふ。」

「・・・笑わないでください。」

そんなのありえないのに。

天地がひっくり返ろうと、月が消し飛ぼうと、太陽が燃え尽きよう
とありえない話だ。

それこそ私の人格が。記憶が無くなつて、別人になりでもしない限
りありえない話だ。

とは言つても、不安になるのが人情かな？

「わかつたよ。

そんなこと言われちや、何も言えなくなるわ。

・・・キティつたらいつの間にこんなに可愛くなつたのかしら?』

そのままキティに抱きつく私。

嗚呼、温い。

これが家族の暖かさつてやつだらうか。

「わ、私の愛らしさは・・・う、生まれたときからです。」

顔を真っ赤にしながらそんなことを言つてくる。

軽口のつもりのようだが、フルブル震えるくらい恥ずかしいなら言
わなければいいのに。

まあ私がからしたらキティ以上に可愛い存在なんて、ありえないんだ
けどね。

「ふふ、そうね。

・・・スペ君、というわけでキティの分の荷物もお願いできる?」

「すでに終わつてるだよ。」

「『主人ノ』私もついていきます」発言ヲ聞イタ時カラ準備シテイ

タシナ。」

「・・・相も変わらず、気の利くカカシね。
知識、技術もある」とながら、スペ君に出来ないことなんてもはや
無いんじゃない?」

全く持つて凄いカカシである。今更であるが、カカシの使用用途を
遙かに逸脱しているね。うん。

「ああ、それと、ナギに会う以上は髪の毛を黒くしておけじゃま
ずいかも知れないわね。」

黒い髪の毛でかなり雰囲気が変わると言つても、アリカ王女と近し
い彼等を誤魔化すのはいたさか無理がある。彼女そつくりな外見は
変に警戒されるかもしれない。

まあ、見られたところで他人の空似だと言つてしまえば良い気もす
るけどや。

何らかの仮面はつけていいのか?

仮面・・・か。

でも仮面は邪魔臭いな。

となると変装?

変化?

変身?

・・・ほほう。

ちょっと面白こじとを思いつこちやつた。

これはイケル!!

勝てる!!

何に?とは聞かないで。

なんとなくノリで言つただけだし。

「キティにも手伝つてもらいうからね?」

「何かは分からぬけれど、姉様の手伝いなら喜んでしまむーーー。」

ところがで、現在。

彼等はまたもや紛争地域にてバカスカ悪者を蹴散らしていた。

「良し。

こんな感じかしら?」

「ね、姉様!?

ほ、本当にこの姿で出ないといけないの!?

「ええ、様式美と言つても良いかもしねないわ。」

「いや、どこの様式美かは分からぬけど・・・本当にこれで出ないダメ!?

「お願い、キティ。」

いまいち、乗り気ではないキティに私の上目遣い攻撃を食らわせた! いつもは受けてばかりだが、たまにはこちから責めてやる!!

「・・・う。

・・・わ、分かったよ・・・分かりました!!

やれば良いんですね!?

「ありがとうキティ!!

やつぱり持つべき物は理解ある妻ね!!

「ね、姉様!?

つ、妻だなんて・・・その・・・嬉しいです。

といふか、抱きつかないでください!」

「いや?」

「い、嫌ではないんですけど……時と場所を選んで欲しいといふか。
・・一入つきりのときにして欲しいといふか。」

「可愛いわ・・・キティ。」

「ね、姉様。」

抱き合ひながら見つめ合つ私達。

「オイ、バカツブル。

ソロソロジャネエノカ?」

「・・・嗚呼・・・アリスがあんなに幸せそうに・・・オラも幸せ
だべ。」

「テメエモモドツテコイ、ボケ木偶。」

おっといけない!!

タイミングを逃してはせつかくの魔法具が無駄になつてしまつ。

「行くよ。キティ。」

「は、ハイ!

姉様!!

彼等、紅き翼が戦つてゐると、相手側は鬼神を召喚したらしい。
結構上位の者なのだ。

その鬼神曰掛けてナギやガチムチや眼鏡剣士が向かおうとするところに、颯爽と私達が躍り出た!!

ひとり大きな岩がどこからとも無く落ちてくる。
そして高くそびえた丘となる岩の頂上に私達が着地する。

「全世界の子供達!」

「よ、呼べよ、呼べ・・・!」

「悪の手先を潰すため！！」「

「あ、悪の秘密を暴くため・・・・」

「子供達の笑顔を守るために」

「わ、私達は馳せ参じた・・・・」

ふふふ。

さあ、見て驚け！！

見てわめけ！！

私達が！！

「戦場を駆ける麗しき白百合！..

キュア ワイト！！」

「せ、戦場を駆ける漆黒の黒百合！..

キュア ラック！！」

「「「一人合わせて！..」」

良し！！

決まるぞ、これは！！

「「「ブ キュア！！」」

私達の背後でチュドーンチュドーンと演出的な爆発が巻き起る。岩に組み込んでおいた簡素な爆弾がちゃんと動いてくれたようだ。キティの声がいまいち出てなかつた気がするが、こんなときのために拡声器代わりの魔法も開発済みである！！

戦場にとどろく私達の勇士！！

見ててくれたかい！！おつかさん！！

私は初代ブ キュアの白いほうの衣装をヨリヒラヒラを付けて可愛らしくしてみた一品。

顔がばれないように、バタフライマスクなんでものまで付けてる。バタフライマスクって蝶サイコーだよね。キティのも初代ブ キュアの黒いほうの衣装にヒラヒラを付けまくつて、ゴスロリ化した一品。

怖いくらいに決まった！！

しーーーーんと静まり返る戦場。

鬼神すらぽかんとしてるよう見える。

<ね、姉様。やたら静か過ぎる気がします。>

<ふふふ。いきなりの登場に皆感極まって声が出ないのよ。>

<い、いえ、周りの視線が敵味方問わずに痛い気がします。>

<何言つてるの？さつきの口上を聞いていたでしょ？

こんな可憐な2人を悪の手先だと勘違いするバカは居ないでしきうけど、念のため”子供達の笑顔を守る”とか”悪の手先は潰す”とか、分かりやすく正義の味方だつて分かるようにしたのよ？少なくとも味方からは好意的な視線ではあるはず。>

びしっとポーズを決めた状態のまま念話で会話する私たち。

「おい・・・なんだアリヤ？」

「私が知るわけ無いだろ。」

「俺様もいろいろな戦場を経験してきたものだが、あんなバカは始めて見る。」

「ハツ、ジャックに言われちやお終いだな。」

「おいら、ナギ。そりやどうこう意味だ?」

「言葉どおりの意味だつての。」

「喧嘩売つてんのか? 俺様としてはおめえをぶつ飛ばしてからでもかまわねえんだぜ?」

「そりやこいつのセリフだぜ、ジャック。

なんなら今からやるか?」

「ああ、望むとこだ。」

「お、おい!?

仲間割れしてた場合じやないだろ!?」

見覚えはあったが、名前を忘れていたガチムチ君はラカンといひナギと喧嘩をおひぱじめる。

<姉様・・・味方するぞ><るか、仲間割れの原因になつたみたいですけど?>

<・・・私のせいじゃないもん。>

<言いたくは無いけど、これは確實に姉様のせいだと・・・>

<・・・違うもん。>

<それについてこのポーズをし続けていいのですか?>

<誰かがツッコんでくれると思ってたから・・・タイミングが難しくなったよね。ツッコまれた時の口上も考えてたのに。>

<・・・他の人間も私達を無視して戦闘を再開してゐみたいですよ
?見なかつたことに対するつもりでしょつか?>

<・・・私のシナリオではここで、ノリのよさそなあのガチムチ
君やサウザンドマスターがツッコンでくれると思つてたの。
くええ、聞いてます。>

<そこで君達を助けるために遠くの星からやつてきたとかそんな感
じのことと言つて・・・「それはありがたい」みたいな?
そして一緒に戦場を駆け巡る内にいつの間にか親友と・・・戦友と
なつていたみたいな。>

<・・・だから、私は言つたのに。

普通にお礼しに行けば良いって。わざわざここまで大きい戦いが始
まるのを待たなくとも良かつたのに。>

<き、キティだつて結局は賛成したでしょ!?
くそ、それは!?

それは姉様がどうしてもつて私に頼んだからでしょ!?
責任転嫁はみつともないと思う!?
くみつともないって何!?

誰に頼まれたところで賛成した時点で責任は発生すると思ひけど、
何か反論は!?

<言つにことかいて、ふざけすぎ!..

姉様の親の顔が見たい!!

<どうぞどうぞ、好きなだけ見ればいいじゃない!?

そこで戦場にも関わらず味方とバカみたいにガチムチとやりあつて
るのが私の親ですう!!
くこの親にしてこの子ありつてわけね!!

姉様、可哀想・・・ふつ。

<わ、笑つたわね!?

笑うこた無いでしょ!?

<別に笑うつもりは無かつたもん・・・つい笑つちゃつただけで。

<なあたちが悪いわよ!!

・・・これは教育しなおさないとダメかしらね？
＜・・・望むところよ、姉様。＞

「手加減はしないわよ、キティ。」

「・・・当然ね。」

こうして初の姉妹喧嘩であり夫婦喧嘩が始まった。

私が炎の槍を100個繰り出せば、キティは氷の槍を200個繰り出す。

私が雷の暴風を打ち出せば、キティは闇の吹雪を打ち出す。
私がひとたび拳を振るえば、大気が裂け、周りのあらゆる物が弾け飛び。

キティがひとたび拳を振るえば、大地が裂け、周りのあらゆる物が沈み潰れる。

拳を打ち合えば、衝撃波が発生し、蹴りを打ち合えば轟音が響き渡る。

どちらかが叩きつけられれば、じわれが発生し、砂塵が巻き起こり。
また叩きつけられれば、大地を揺るがし、竜巻が巻き起こる。

ちょっと外れた千の雷が鬼神の大半を焼き殺し、ちょっと外れた燃える天空が森や大地を焼き焦がす。

お互に闇の魔法を使い、自分の魔法を自身に添加し、相手の魔法も添加し、それこそ音速の域で殴りあう私達はあたり一面を焦土に。地獄へと変えつつ、殴りあつた。

不毛なことをしていることに気がつき、お互いに頬を染めながら仲直りした時。

いつの間にか戦いが終わっていたことに私達は揃って首をかしげたのだった。

❀四目 はた迷惑な姉妹（後書き）

しばらくはギャグティストが続きます。

紅き翼編は終始、ギャグティストで行こうかなと思つていきましたが、やはりここはナギとアリカの物語を書こうーとなりました。
あまり期待せずにおまちくださいませ。

ちなみにエヴァちゃんの戦闘力は主人公に一歩届かないというレベル。

主人公は最強の戦闘力を持ちますが、それは単にひたすら地道に魔力をあげて来たことによる、魔力量が凄いというだけ。

どんな策があるうと数（物量）の暴力には誰だうと勝てませんからね。

魔力量が同じと云つ条件ならば、エヴァちゃんにも勝てるレベルです。

とは言え、全てを視認できるというある意味チートな魔眼がありますから難しいことには違ひありません。

9つ目 濃き面々（前書き）

意外と好評価なことに恐悦至極。
タイトルで損してるみたいな感想とかとても嬉しいです。
ぶっちゃけ、タイトルとか超できとーですからね。
その内、これと思いついたら変えるかも知れません。

第九回 濃き面々

といひ代わり。

現在、適当な建物の中に私達は紅き翼の面々と面会してたりします。

「それで、あんたらは結局何者なんだ?
さつきの戦闘を見るに、只者じゃない・・・」
ことだけは分かるけどよ。」

と、ナギが言えば周りのメンバーも「ううん」という感じで頷く。
聞いてなかつたのかな?

私達が一体何者だったのかつてことを。

「私はキュアホワイツだあつ!...?」
「それはいいです、もう。」

せつかくの自己紹介がキティのツツコミで阻止された。
とこりか、もう少し手加減してくれないと私いつか死んでしまうよ?
思いつきついでにパンチとか。
ほら、面白いくらいに吹き飛んだ私を見て皆「ドン引きしてゐるじゃない。」
ドン引きといつよりはあまりの綺麗な吹き飛び方に見ほれてるつて感じかしら?

それとも・・・飛ばされた先の壁を大破してしまった」とこりよる「
弁償しろよ。」的な視線?

「真祖の吸血鬼と呼ばれるエヴァンジエリンさんに殴られるだけじゃなく、壁にあれだけの速度で突っ込んでおいてなんら意に介さず

立ち上がるつて……どんだけですか、この人。
ラカンさんみたいですね。」

戦慄したような表情でこんなことを言つてるのは、シンシン髪が尖つてる少年。

確かタカミチ……だつたかな？

もう、原作知識がほとんど無くてね。

名前を思い出すのも一苦労。

「オイ。いくらなんでも俺様だつて、真祖の一撃を貰つてけりつと出来るほど化け物染みてるつもりはないぞ。

まあ出来るんだが。」

「できちやうんですか！？結局化け物じやないですか！？」

「ちなみに俺も可能だな。」

「ナギモ！？」

「私も出来ますよ。」

「アルさんも！？」

「ワシも可能じやな。」

「・・・よく考えたら、この場に居る人間は僕を除けばそれくらい出来て当たり前でしたね。」

「いや！今まで出来ると思われたら心外だぞ！？タカミチ君！？」

ふむ、タカミチと詠春はツツ「ミキキャラか。
苦労人のようだ。

「馬鹿ドモノアツマリダナ。」

「おい、チャチャゼロ。それに私も入つているんじゃないだろうな？」

「ふつ、アリスにかかるばその程度、お茶の子さいだべ。」

ちなみにこの場にはスパ君とチャチャゼロもいる。

2人には拡声器代わりの「魔法はもちろん、岩を飛ばしてもうつたりとかしてもらつたし。

私達の喧嘩の被害を味方側に行かないようしてくれたのも2人である。

危なかつたよね、正直。

敵どころか味方するべき勢力」と皆殺しにしちゃうといひだつたもの。

ちなみに、ナギとラカンの喧嘩も凄まじい物であつたが、その被害はアルゼクトに防がれていた。

あまりの馬鹿さ加減に、詠春がぶち切れて2人を止めるまで喧嘩は続いてたのだから、私達よりもなお性質が悪い。

私達は自主的に止めたよ？もちろん。

しかも喧嘩することによって、なおのこと絆が深まつた気がする。今度から定期的に喧嘩するのも良いかもしない。

後日、そんなことを言つたら、チャチャゼロから刺された。
ごめんなさい、調子に乗りました。

「それで眞面目な話、貴方達は誰ですか？」

そちらの少女は数年前に会つた覚えがあるようないような？

わざとらしく嫌な笑みを浮かべるのはアルビレオ・イマ。

ううむ、キティに聞いていたとおり、なんだか気に食わない男だ。気に食わないというか、油断できないというか？

あまり係わり合いになりたくない気もするよつな、こんな友人が1人はいて良いかもしないと思わせてくれるような？

というか、波長が合つそうな氣もする・・・よくな？

不思議な男性だ。というか、この人男性かしら？女性？

男性みたな立ち振る舞いだが、どうなんだろうか。そこんといひ。この人、本当は女性なんぢやないかな？

胸があるとか、生えていないと聞いても私は驚かない・・・驚けない自信があるね。

この男の問いに答えたのはキティである。

「ふん。貸しがあったから、返しに来たまでだ。」

キティも私とあまり変わらない印象を抱いたようだ。
どことなく不機嫌なのはこんな男に借りを作ったのが、気に食わないのかもしれない。

ふて腐れたように指輪を・・・魔法媒体を投げ渡す。
あの日に借りた物らしい。

言葉遣いが気になつたけど、私だけに敬語を使ってくれてるって口
トかな？

特別つて感じがして、こんなときになんだが顔がにやけてしまつ。

「どう、どうしたのですか？」

姉様。気持ち悪い笑みを浮かべて？

「は、はつきり言つたのね、キティ。」

気持ち悪いことはいくらなんでも酷いじゃないか。

ところが、バタフライマスクを着用してるので、よく分かるね？

「何年、姉様と過ごしてきたと思ってるんですか？
そんなことくらい見なくても分かりますよ。」

キ、キティ。

「ね、姉様。」

感極まつて見詰め合いつていると。

「オイ、バカツプル。

イイノカ？

シツカリ見ラレテルゾ。ケケケツ。」

紅き翼の諸君が私達をうらやんでいる感じに見ている。
タカミチ君と詠春さん、ナギは若干顔が赤くなっていた。

「ふふん、分かつてないわね？」

チャチャチャゼロ。見せ付けているのよ……私達のラブラブ具合をね！」

！

「ね、姉様……は、ハズかし……」

アルビレオ・イマー！

き、きさまあつ！？

何を撮つている！？そのカメラで何を撮つているんだ！？」「おや？」

分かつているのでしょうか？エヴァンジエリン。

これがかの闇の福音……人形使い、禍音の使徒、悪しき音信、不死の魔法使いと悪名高い極悪人だとは……。良い弱みを握れた物です。」

やたらとにこやかに良い笑みでそうのたまうのはアルビレオ・イマ。ほほう？

分かつているじゃないか。

「後で焼き増しをもらえるかしら？」

「一枚、100ドリクラマでお譲りしますよ？」

「な、何を言つてるのですか！？姉様！？」「

「もともとは私のキティよ？」

写真を撮らせて上げるだけでも感謝しなさいな。

まで頂戴。せめて10ドラクマね。」

「……むむむ。このカメラはかなりの高画質を誇る特殊な魔法力メラで、現像にかかるお金がかかるのですが……しかたありませんね。」

ではそれで。

焼きあがるのはまだひと口になりますが、どうします?」

「そうね……この住所に送つてもらえるかしら?」

「ふむ……いいよ。なるほど。」

麻帆良の住所を渡す。

どうせ後々ばれるだらうし、よじとしよう。住所ぐらい。

「ね、姉様! ?
さつきから何を……! ?」

「あり? 可愛い妹の写真をアルバムひとつおいつこいつてみつけてるのだけど?」

そんなに悪いことかしら?」

「うぐ……う、嬉しいのですが……その男……」

「まあまあ。いいじゃない。」

減る物じゃないし。」

「良いのか? アル。

どこの誰とも分からぬ輩じゃない?」

ゼクト君が私を警戒したような目で見て、あえて聞こえるよつとう言つた。

先ほどからずっと警戒してるゼクト君。

歴史上ではなんか知らないけど、この子の体を造物主が奪つていつ

たんだつけ？

というか、警戒しないで欲しいな。

「大丈夫でしょう。

この住所と、彼女の力量から見て・・・おそらくですが彼女は”金色天使”本人かと。」

「あ、あの”守護神”、”管理者”かのつ！？」

え？

何その一つ名？

金色天使はまだ良い。

昔の呼び名であるが、何の因果か今も呼ばれているのにはワケがある。

第二次世界大戦中のときに、その時の極東支部の長が調子こいて”戦争中に土地の権利書がなくなつたことにして、この際だから奪いとつちまわね！？”といつ、せこい考えの下、退去を命じてきたので丁度キティとの別れの件を引きずつていて、ナイープになつていたこともあり、その時の極東に集まる魔法使いどもを本氣で叩き潰したことがあった。

その時すでに魔族化していた私は魔力はもちろん、魔族の力も全開で連中をフルボッコにしたのである。

金色の翼と、金色の髪（髪の変色魔法がいつの間にか私の本気の魔力で弾け飛んでいたため）、金色の尻尾をくゆらせながら暴れまわつた結果、”金色天使”と呼ばれるに至つたわけだ。もちろん変装は忘れていない。

NARUTOに出てきた”うちはマダラ”的付けていいる仮面を作つて、それを装着。魔眼の力もフルスロットルで、まあ相手からしたら夢に出てくるくらいの悲惨な・・・凄惨な事件だつただろう。しかも力の差が分かるように敵さんは必ず、肺に刺さるように肋骨

を折り潰してやつたので、なおのことだらう。

「内臓に突き刺さるよう」殴つてやる……」とは我ながら、凄い殺し文句だった。

治療して、再度かかってくるが何度も同じ位置を執拗に責め続けた結果、心が折れた連中は涙ながらに謝罪をしたというわけである。

暴れまわつてすつきりした私はむしろお礼を言いたいぐらいだから、もちろん許した。

一応これから先は不干渉をお願いね。と言つておいたけれども。

問題は一つ田だ。

守護者？ 管理者？

なにそれ？

特に守つてるものなんて無いけど？

もちろん何かを管理することも無い。

「守護者とか管理者つて何？」

「・・・本当にこいつがそうなのか？」

私の疑問に、懷疑的な目線を向けるゼクト君。

さつきから嫌な態度だよね、このお子様。無理も無いけどさ。

「ええ、まず間違いないでしょ？」

守護者、管理者とは、世界樹のあるあの地・・・麻帆良の土地を守つている、管理している人としてどこかの誰かがつけた二つ名ですよ。畏敬の念をこめた・・・ね。

「・・・大層なことになつてゐるのね。」

まあ、私の暴れっぷりをみたらそう取る人が居ても無理はないかも

しない。

「とか誰がどう見ても、”世界樹の地を奪おうとする輩におしおきをした”という風に映る。

そんな意図でんで無かつたんだけどね。

むしろ土地なんてどうでも良かつたりした。

とはいえ魔力が他より潤沢な地であり、魔族にとって居心地が良い

のには違いないんだけどさ。

「とにかくその金色天使がなぜここに居るかつてコトだよな？
そして俺たちに力を貸そうとしてるのか？ってことも気になる。」

おや、ナギも意外と細かいようだ。

馬鹿っぽい感じだったからそんなこと意にも介さないタイプの人間
だと思ってた。

評価を改める必要があるかもね。いや、さすがに気にするか。

「まずは自己紹介から。

私の名はアリス・スプ・・・じやなかつた。
アリス・マクダウェル。そこにいるキティの家族だつてことは・・・
まあもう分かるよね。」

スプあたりで眉をひそめたのがゼクト君とアル。

危ない危ない。

うつかり本名を名乗っちゃうところでした。てへ。

背後で人形とキティがため息を付いてるが気にしない。

私は基本的にポジティブなのさー。

「明らかに偽名じやの。その仮面と言ひ・・・どうも分からん奴ら

じや。」

より警戒を強めた感じのゼクト君。

まったく、クールな坊やだぜ！

「偽名は彼の・・・アルビレオ・・・アル君つて呼ばせてもううね。アル君のイノチノシヘン対策。多分だけどそれって本名と対象に会うこと。それが条件だよね？」

「ええ、そうですよ。」

簡単に認めるアル君。

むむう、ここで軽く駆け引きなんかを期待してたんだが、拍子抜けだ。

「特にお天道様に顔向けできなってわけじゃないから心配しないで貰えると嬉しいな。」

目的を言つながら、キティが世話になつたみたいだからそのお礼。それが第一。」「

ここは本音で行くべきかな。

なんかセクト君が真偽をはかるウソ発見器的な魔法を使つてきてるし。

丁度いいや。利用させてもらひおつ。

あえてレジストしない。

「第一は私の目的・・・特に君達に害することじゃない。むしろ君達にとつてはなんら害は無く、益になるだろうことをしたいが為に、君達と一緒に英雄じっこで興じようかな?と思つてね。」

「・・・ウソは付いてないようじやな。」

「ふふ、英雄じっこと来ましたか。存外、言ひえて妙かもしれませ

んね。」

「一緒に戦うつて」「トか？俺様としてはかまわねえぜ。

強そうだしな。てか、一戦これからやりあわねえか？」

「そり勝手に決めて良いのか？・・・ガトウの胃がまた荒れそうだな。私は知らんぞ。」

「師匠も・・・大変ですね。」

皆一様に一応は賛成の意を示してくれたよう何よりである。

我ながら私達は凄まじく怪しいと思うのだが、それを簡単に受け入れる彼等はさすが英雄の器。と言つた所かもしねい。

最後に1人だけ私を見つめていたナギが一言。

「・・・まあ他人の気がしねえしな。むしろなんつーか・・・ほつとする。」

ついと/or>いう感じにこぼしていた。

い、意外と鋭い。

なんというか変なところで器の大きさを知らされる。

ラカンの”おい！？口説くにしてももう少しもともな言葉あんどう！？”という言葉に顔を赤面させながら”ち、ちつ、げーつよ！？馬鹿つ！！”とムキになるところは歳相応だが。

「・・・なかなか面白そつね。キティはどう思つ？」

「・・・浮氣はダメ、姉様。男なんてもつてのほかです。」

・・・少し間の抜けたキティの言葉について笑みのこぼれる私だった。

9つ目 濃き面々（後書き）

お気に入りの伸びが良くて嬉しい。

最初は原作のパワーのおかげだろ？と思つていたのですが、これつて僕の力も多少はあるのだろうか！？とちょっとだけ自身を持てて嬉しい今日この頃です。予想以上にギャグネタが思い浮かばない。結構早めにシリアス回、もといアリカ王女とナギの馴れ初めパートに突入するかもです。

10月 本契約してみた

私達が紅き翼入りしてから早一ヶ月。
結構馴染んできたかなと思う最近です。
簡単なホテルの部屋までかりちゃってね。
せつかく（？）の大戦中だし、万が一にでも死なないようパクテ
イオーもしちゃおうかなと思って、今日キティとのキスをしちゃつ
たりなんかします。

「ねえ・・・キティ。」

「なんですか様。」

「キスしない？」

「ふはっ！？」

い、いきなり何を言つてるんですかっ！？

噴出すほど突拍子もないことだったかな？

・・・突拍子もないことだね。

ちなみに今は朝ごはんの最中。

今日はなんだか料理が面倒だったのに、ツナ缶で『J飯』という質素な物である。

ツナつてそのままでも、1手間加えるだけでも味が変わるから良いよね。

ただ、ツナーーーもといマグロつて水銀の含有量が多いらしい・・・
妊婦さんがあまりに沢山摂るのはお腹の中の子供によろしくないと
かなんとか。

アリスちゃんのなんちゃつて豆知識です。

幼児にも良くないとか、別に大丈夫だとその辺は学者によつて意
見が分かれるらしい。

魚介類はその生態上、生物濃縮が行われやすく、水銀だと始め

として自然界では分解されにくい農薬や重金属類だと言つたものが蓄積されやすい傾向にある。

生物濃縮って言つのは・・・ミジンコやオキアミなどのプランクトンが水中の重金属などを吸収して、その吸収したミジンコを小魚が食べる。そうすると食べれば食べるほど小魚はプランクトンに含まれる重金属を中心とした体外に排出されにくく有害物質を溜め込むことになるよね？

その小魚がより大きな魚に食べられる。もちろん一度や二度じゃなく、生きてる限り小魚を食べるより大きな魚。マグロだと鯨とかかね。

そうした小魚を食べてマグロの体により凝縮されていく。そしてその魚を人間が食し、最終的に人間の体の中に溜め込まれていく。これを生物濃縮と言つたりする。

もちろん世界は広いわけで、濃縮されるといつてもビビたるものだから健康に大した被害はないとされてるけれど、妊婦さんはお腹の中の胎児が影響を受けやすいということで食物連鎖において上位に位置する魚介類は止めておいたほうがいいとされてるわけ。

陸上の生物でも同じくされているのだが、家畜として管理される物が殆どであり陸上の動物は問題ない・・・と思つて良い。ちなみに毒物なんかも濃縮される。

ヤドクガエルというカエルを知つているだらうか？

やたらと色の綺麗なカエルが多いヤドクガエルの仲間なのだけれど、このカエルの毒を原住民が矢に塗りつけたことからヤドクガエルと呼ばれ始めたらしい。

この毒はカエルの体から作られるのではなく、この生物濃縮で体に溜まつた毒だつたりする。

ヤドクガエルが普段食べる昆虫にこの毒が含まれているらしく、それを利用するように進化したのがこのカエル。

それが証拠に人工的に飼育されたヤドクガエルは毒性が弱いとされ

ている。

警戒色として毒々しいともいえる派手な力エルが多く、人工飼育下では毒性を大幅に下げることができる」とから愛好家が多いとか。ちなみに力エルの粘液には生物濃縮うんぬんよりの前に大なり小なり刺激物が含まれているため、力エルを触つたら手を洗つようにしてしよう。

目とか触つたら、激痛に見舞われることになるよ？

私もあるはキツかった。

畑とか耕してると、特に米とかは水田ができるからそこそここの間にかアマガエルとかが住み着くんだよね。

害虫とかを食べててくれるから基本放置なんだけど、収穫の時がまた面倒で面倒で。

邪魔くさいたらありやしない。

ぴょんぴょん飛び跳ねるから、適当に掴んで捨てたりしながら米やら何やらを収穫してたら、汗をかくじゃない？

力エルを触つた手で顔をぬぐっちゃったわけ。

つい、ね。

痛いのなんのって。

焦つて目をこすつたらより痛くなるわなんだで、酷い目にあつたわ。結局、水魔法で顔を丸洗いしました。

本当に・・・痛かつた。

「どうしたんです？姉様？遠い目をして。」

「いや、ちょっと知識と過去の過ちの反芻をね。」

いきなり押し黙つた私を見て怪訝な顔をするキティ。

畠仕事はキティにも手伝わせたのだが、不思議と動物達が彼女には近寄らないのだ。

本能で絶対的な強者だと・・・上位の生き物だと動物達は理解して

いたのかもしれない。

正直パニクるキティを見たかつたといつ思いもあつたから、残念至極極まりない。

ていうか、かなり話が飛んだわ。

「さて、話を戻すけど、ツナに一手間を加えるとしたらポン酢と砂糖を加えて「」飯と一緒に。ところのが一番だと思つたんだナビどうかしら?」

「あの・・・話を戻すなら、キスうんぬんでは?」

「・・・そ、そうだつたわね。」

わ、わざとボケたんだからねつ!?

そこなんとい勘違いしないでよ!?

「勘違いしないでよね!!

あんたのためじやないんだから!..」

「は?」

今のセリフもちょっとボケたつもりが、マジ顔では?と返された。これはこなきがキツイ。

「「」めんなさい。いい加減真面目に話しまじょ。」

「私は終始真面目でしたが。」

「・・・私にはそう見えなかつたわ。」

「・・・苦しいですね。」

「・・・わかつてゐ。」

とつあえず話を進めよう。

「前に話したとおり、危険がかなりあるみたいとは知ってるわよね？」

「ええ。」

「まあ死なない程度に田をつけられない程度に頑張るつもりだけど、

人間事故はつき物よ。

いくら私達が世界最強と言つて良いほどの姉妹とはいえね。いや、正確には兄妹で夫婦だけじゃ。

「人間じゃないんですけどね。」

「まあそんな些細なことはとりあえず適当に放つておいて。ぶつちやけ、普通にキスしたいと言うのは恥ずかしいから、本契約をダシにしてここで一歩踏み出そうかな……と思つて。嫌？」

ぶつちやけ過ぎたかも。

「い、いえ……その……そんなことは……ただ、ムードがあるついでありますか？

もう少しなんというか……初めてのキスは……良い感じでしたいな……という思いが。」

顔を赤らめてそんなことを言つ、キティ。

本当に可愛いいなもう！――

「それで……そのままの……愛を確かめ合いつていうか……あはんうふん……というか、なんというか。」

ふむ。確かにここりで肉体関係を持ち、よりカッコたる絆を築くことも大切かもしれない。

その辺はあせらずに行こつかな……とのんびり待っていたんだけ

ど、女性からしたら早く私を心も体も奪つてつてコトだらうか？それともそうしたことをして始めて夫婦の実感が沸くとか？

ぶつちやけ、前世では彼女もろくにいなかつたからその辺の乙女心とこゝものは分からぬ。

今でこそ女装をしつつ女言葉を使つてゐるがこれはあのアホ神様による呪いで癖づいただけであり、ぶつちやけ自分の趣味ではない。矯正する意味もあまり見出せないからこのままでいるだけである。もちろんキティがもつと男らしくい言葉を使えといえば一寸とかからず直すつもりであるが。

女装は自分の見た目が起因する。
男物の服が全く持つて似合わない。ありえない。ダサイといつて良い。

致命的なまでにチグハグなのだ。

キティと会つて、呪いが解けたことを確認するがてらその時代の男物の服を着てみたが、もちろん似合わない。

現代でもそうである。

いや、反物や着物だつた昔へぐらべて洋服になつてからなおの」と似合わなくなつたのだ。

中世的なものでようやく着れるといつたもの。

アリカ王女に似た自分がせめて20間近の容姿だつたらなんとか美青年としていたかもしれないが、この体は15歳の肉体。ぶつちやけ、背のこともあり美女といつよりも美少女といったほうが正しい外見である。

とどのつまり女性の顔ではなく女の子の顔であるがゆえにおのこのと男物が似合わないのである。

正直、甘く見てた。

流石のちぐはぐ具合にスパ君——もといカカシですら物申すほど

の似合わさなのだから。

最近、イケメンを見ると無性に顔を潰したくなるのは病気だらうか？

「要は始めてのファーストキスと一緒に始めてのやつこいつもじつてことね。

・・・じゃあ今からしましようか？」

「そ、そんなに急にっ！？」

「善は急げとも言ひし・・・霧雨氣なんど時間帯にせよ、作ろうと思えばいくらでも作れるでしょ？」

そういう行為は夜にする・・・みたいなイメージは確かにがあるので、待つ意味をあまり感じない。

といふわけでさっそく準備をしよう。

部屋はカーテンをかけて暗くして・・・簡単なお香が倉庫にあったはず。

弱い興奮効果もあつたから丁度いい。

「キティはシャワーに行つておいで。」

「ほ、本当にやるんですかっ！？」

「やうひつと思つたときにやらないと恥ずかしくて出来なさそうなんだもん。」「

平氣そうに見えて結構内心、テンパッてるんですけど、私も。

そもそもそういう経験が無いから。

こういう勢いって大事だよね。

今を逃したらまたの機会は数年先のことになりそうだ。

いやね、お互い600年以上も生きてるとそのうちでいつか見た
いな考えが定着してくるものなんですよ。また明日・・・今度の機
会に・・・なんてやつてたら10年後でした。みたいな？

ムードを大事にしたいと聞いた直後にこんなに急に進めるつてコト
が無神經でデリカシーに欠けるとは分かつてゐんだけど、そういう
こともあるからね。人外ともなると。

重ねて言つけど、なんだかんだでテンパッてるのだと、私も。

ところがお互いにお風呂に入つて、水も滴る良い男の娘と女の子がベッドの上で正座。

そして向かい合つてゐるという奇妙な状況になつていきました。どうしてこうなつた！？

田の前にはキスを今か今かと待ち構えて田を睨つてゐる少女。もといキティ。

ふるふる微かに震えながら、顔を真っ赤にして唇を突き出していくるその姿はまさに筆舌に尽くしがたし。

何！？この可愛い生き物！？

私は一体何と向かい合つてゐるのだろう！？と自問するくらいにこまかに可愛い。

とこりうか、本当に可愛い。

なんていうか、可愛いのは正義だつて言葉を聞いたことがあるけれど誰だそんなことを言つたやつは！？

可愛いは悪だらう！？

この瞬間のためならば喜んで犯罪を行つ覚悟が私にはある！…ちょつとくら人類皆殺しにする覚悟を持てる位には。

ここまで覚悟を持たせるに値するこの幸せな瞬間を生み出すような可愛い生き物はむしろ犯罪だらう！？

悪だらう！？

正直、全人類を隔離するべきだ。

こんな決戦兵器と人類を接触させてはならないと思う今現在。

といふか、誰だ！？

最近のガキンチョはませてるとか馬鹿にしたやつは！？

たかが粘膜接触、されど粘膜接触。

キスがここまでし難い物だとは死んで始めて理解させられた。文字

通りの意味で。

昨今の中学生は進んでいるところが、これを日常的に行えるとかどうこの戦士かと。

正直、中学生舐めました。

キス一つでこれだけもたつく私をヘタレと呼ぶか、初心と呼ぶか。人によって意見は分かれるところであろうが、自分からしようとつて自分から飛び跳んでいるのだからこれは間違いなく前者に違ない。

いや、してみよっと口を近づけようとすると口を近づけようとするのだが如何せん何かが私を押しとどめる。

なんだかうと自問自答してみても全く分からぬこのストッパー。この可愛い生物を自分の唇なんかで穢して良いのか？みたいな簡単な崇拜心が出てきているのかもしねり。

こんな感じのことを思い、躊躇し、一の足を踏んでいるにも関わらずプルプル震えながらただ唇を突き出して待っているキティ。

嗚呼、もうヤバイ。

こんなへたれ野郎を信じて待たせている」と自体申し訳ないのだが、何度も見ても見ほれる可愛さ。

とかなんとか良いつつ

結局のところ何が言いたいのかと言ひつと、私はテンパッているのである。

先ほどから何度も言ひつてゐるよ。

まあわかつて欲しい。

正直氣絶しそうなんです。

「・・・アリス・・・あんなに顔を真っ赤にさせて・・・オラ、こんなアリスがつゞきを見られるとは思ってなかつただ。」

「意氣地ノネエ野郎ダナ。男ラシク襲ツチマエヨ。」

・・・なんで君らがここにいる?

一 応追い出したつもりなんだか？

とりあえず、アホ人形ども追い出して、再度キティを見つめると彼女は目を開けていた。

• • •

なせなかよし

「嫌なの？姉様。」

「・・・嫌なわけが無い。」

「ただ、緊張で不思議と体が動かん。自分でも不思議なほどにね。」

「……面白ないでしょ。

「じゃあいよいよ。私からするか!」

はいへん

・限界を超えて顔が熱いっ！？

さつきのが限界だつたんぢやないのか！？

和の顔方一何年か一するのか
鎌を見ながれい

熱烈なキス……ディープな物であるが、それが一分ほど。

私の口脇を蹴躡したキテ、の舌は糸を引いてある
べき場所に戻る。

本契約のための陣による簡易的な興奮作用と快感作用も相まって酷く蟲惑的なひと時であつた。

正直、意識が飛び寸前でした。

キティも恍惚とした表情を浮かべている。

キティからしたためか、キティが主となつたらしく私の契約カードが中空に現れた。

今度は私の番だとばかりにキティは唇を突き出す。

先ほどと同じ状況に戻つたが、一度した以上もう問題ない。というにはいささか無理があつたがなんとかぎこちなくでも自分からすることが出来た。

自然と体が動き、キティを強く抱きしめながら深く重く、彼女に口付けをする。

それこそ口付けをもつて自身の気持ちを表現するように。

彼女の口腔を味わいながらぼーっとする頭で考えたことといえば、ただただキティこれからも一緒にいたいということだけだつた。今度は私が主としてのキティの契約カードが中空に発言したが、それを全く意に介さず私達はそのまま肌を重ね、夜まで過ごしたのだつた。

お互に尋常ならざる体力のせいか、夜まで続いた行為だったがそのまま晩御飯とシャワーを軽く浴びてその日はよく分からぬ充足感に包まれながら一緒に布団で寝入つた。

子供が出来たらいいんだけどなあとか思いつつ。
まあ出来ないだろうけど、それならそれで人造人間ホムンクルスつてどうやって作つたっけとか思いながら深いまどろみに身を任せた。

11つ目 パクティオーカード（前書き）

今回の話は僕の恋愛観的な物がふんだんに含まれています。

11つ目 パクティオーカード

「ふあああ、良く眠れた。」

「おはよひ〜」ぞこます、姉様。」

「あれ？」

「もう起きてたの？キティ。」

「姉様の寝顔つてあとけなくて可愛いですよね。」

「当然よ！」

「私、美少女だもん！」

「・・・ツツ「ミませんよ。」

「・・・別にボケでないし。」

いやまあ、ボケたんだけどね。

スルーされてしまった。

男でしょ！？とか自分で言つ「」と！？みたいなツツ「ミ」を期待してました。

いけずなんだから、キティつたら。

「まあいいや。

「」飯は・・・面倒だな。」

「食べないとダメだべよ、アリス。」

「おはよう、スパ君。」

というか人の寝室にノック無しで突っ込んでくるのはどうなんだろ
うか？

スパ君。

せつかくのキティとのラブラブ空間が！
と言つたら、キティに殴られた。

最近乱暴になってきたよね。お姉ちゃんは悲しいです。

「馬鹿なことばっかり囁つからでしょーーー？」

「馬鹿なこと？

一体全体なんのことだか？

私はいつでも真面目なつもぶつーーー？」

「・・・殴りますよ。」

「殴ったよ、の間違いじゃない？」

話の途中で殴るのはさすがにどうかと思うよ。うん。
いや、まあふざけた私が悪いのは分かつてるけれども。

「昨日出たカードの確認しようよ。キティ。」

「は、はい。・・・き、昨日の・・・カード、ですねー。」

「どうしたのキティ？

顔が赤いけど？

あ、最後の方の自分の醜態を思い出しても赤面してるのかなー！？
恥ずかしがってたけど、あのときのキティはそれはもう動画に撮り
たいほどのあいつーーー？」

「・・・殴ったよ。」

「・・・報告ありがとー。」

昨日のことでも照れてるキティもまた可愛い。

実際、どこかにカメラを仕込んでおけばと後悔したり。

まあまた夜を共にすればあのかわゆいキティが見れると思えばいい
か。

ふにゃふにゃで、がくがくと・・・こほん。

まあその辺は置いといて。

「魔法球の中で見よー。」

「だから。」
「どんなアーティファクトかも分からぬし、その辺じや危ないかも

「言わなくても分かってます！！」

「もう・・・照れていじけなくてもいいのに。」

可愛かつたよ？キティ。

「…別に。分かつてるもん。」

ふいとそつぽを向くキティ。

恥ずかしかり屋さんめ！

頃の文

「ふふふ、可愛いな、本当にキティは。」

私の頬で遊はなして 早く行こう 姫様

卷之三

というわけでタイオラマ魔法球。

アーティストとして

ちなみにこの魔法球は私が旧世界魔法世界を歩いてきて良い感じの景色を見つけたらそこをそのままぶち込んだ物であり、景色とい

本編只で「詩六」にかかる「善行」が記されてゐる。慶洋現「ある

取る祭に一緒に入つてきた動物の中にはすでに絶滅したものも少な

くは無い

ある種の動物の保護者ともなつてゐる。

こうした景色や動植物の姿を鑑賞するためのエリアが主立っているが、この魔法球にはもう一つ。入り口からいけるワープ陣から入る

ここで北海道ほどの面積のたな芝生がある

「まずは私のからいきます。」

「了解。」

というわけでキティがアーティストと唱えるとカードが消え、代わりにアーティファクトが出現した。こ、これはちょっと困る。なんというか凄い存在感を——というか、威圧感？ そんな感じの人形が出てきた。

一件、オーソドックな黒髪長髪の目を瞑つたメイド人形。という外見だが、彼女（？）の周りには3つの武器が浮遊している。

一つは彼女の体長とほぼ同じくらいの大剣。

二つ目はそれと同じくらいの長さを持つ、紅い槍。

最後に、彼女の背後に浮遊している・・・ビームガン？

ロボットアニメなんかでたまに見る荷電粒子砲を放つような砲台のようなものがある。
その砲台の横にオプションとしてつけられているガトリングガンらしきもの。

キティのアーティファクトは”遠近両用殺戮人形”といったところだろうか？

もちろん、剣や槍がそのままの武器つて事は無いだろう。

「キティ、効果とか分かる？」

「いえ、さっぱりです。」

まだよね。

こういうときは実践で試す、練習で試すってのが主なんだけど、こういうときこそ魔眼の出番である。

視認能力という魔眼で見れば、あれよあれよという間に視認完了つ

てわけですか！

こういうのも”見て確認”できる。実に便利な魔眼だ。
ちなみにこの魔眼には名前がある。

「天使眼」と呼ばれてるそうな。

これは金色天使という名と共に、どこぞの誰かが勝手につけて勝手にそう呼び始めたってだけのことで、いつの間にかこれが定着していった。

まあひねりも何も無いつまり名前だよ。

「ええと・・・ほうほう。これはまたエグいアーティファクトです」と。

見ていくと分かつてくるこの人形。

遠近両用殺戮人形と評したが、それよりもあくびいものである。

遠近両用虐殺人形と称した方がしつくりくるだろう。

「全部分かりましたか？」

「うん。わかつたよ。

これつて”概念”兵器だね。」

「概念兵器？」

「うん。」

まずこの人形が持つている剣だが、これは『勝利を掴む大剣』エクスカリバー”。

アーサー王という王様が持つていたと言われているいろんな意味で有名な剣。

たしかもともとの話では”王になれる剣”だったかな？

これはあくまでお話の中でのエクスカリバーであり、目の前のエクスカリバーは違うものようだ。

勝利を掴むというだけあって、これで切裂けないものは無い。

断言しよつ。無いのだ。

相手の攻撃の質、量、特殊能力に関わらず、とにかくこの剣は必ず勝つ。

この世界屈指のバグキャラと言われている「カソン」が全身の気を全て使った渾身の一撃ですら、普通に振るつたこの剣には勝てない。はずだ。

ラカソン君なら気合でなんとかなる!とかいつてなんとかしてしまうかもしけないけど、とにかく理論上ではこの剣に適うものはないとされる。

たとえ次元をぶつけようと未知の攻撃としても、この剣で受ければダメージを受けることはないだらつじ、迎え撃てば打ち勝つことができる。

そういう概念によつて作られた剣なのだ。

そして槍の方。これは『不可避の投槍』グーラングニル』。

北欧神話に出てくるオーティンが持つていたとされる槍。

名前の通り投げれば必ず当たるといつ、必中必当、百発百中の神槍である。

どんなに弱く投げようとも、どんなに悪い態勢で狙おうとも必ず当たる神の槍。

相手側からしたら悪魔の槍だらう。

ただ、さすがに頭を狙えば頭を貫くまでずーーーと飛び続けるといふことはなく、途中で何かに当たると一度手元に戻つてくるようである。

相手は必ずワンアクションを強要されるので、これはこれで凶悪。

3つ目の武器が『貫くもの』ブリューナク』

これは直線をただゆくだけのビームを放つ。

ただ、『貫くもの』といつぱりあるとおりに、いかな攻撃、防御手

段を用いても防ぐことは不可能。

ただただ射線上にあるものを焼き貫く脅威の熱線である。

ただ“貫くもの”という名が指示示す“もの”は相手の防御手段や攻撃のみを指しているようで、魔族や亜人、大型のモンスターのようなもともと体が頑丈な種族を相手にする場合には殺しきることは難しいようだ。なおかつ連射不可能。

そして最後の武器。

目も武器となつていて、この人形の目はロックオン機能があつて、ロックオンした相手に自身の攻撃を強制的にロックオンした対象に誘引させるというある意味常識破りな効果が付いていた。

これによってブリューナクがより凶悪になる。

ただ、目を開いてる間は常に多量の魔力を消費するようである。燃費が悪く、ロックオンするには一度だけでいいから視線を合わせなきや意味が無いというのが欠点か。

目線を合わせたらロックオンされるという効果が初対面の人間にわかるわけもない。

十二分の機能だけれどね。

そしてこの人形にはチャチャゼロのような意識は介在していないということ。

とはいっても自立行動は可能のようである。

もちろんキティの人形使いのスキルで操ることも可能だし、その際にはやたらと魔力伝導効率の良い魔法発動体になる。

まあキティや私のような魔族ともなるとそれこそ複雑な術式を持つ魔法でもなければ基本的に魔法発動体無しでも魔法は使えるんだけどね。

肉体そのものが魔法発動体みたいなものだし。

「ど、とんでもない人形ですね・・・。」

さすがのキティも驚きが隠せないみたいである。
驚いてるキティも可愛いのは当然の結果だね。

「驚いてるキティもまた”らぶりい”だね！」

「・・・また馬鹿なことを言つて。」

そういうことは頬を染めながら言つても説得力の欠片もないぞ！
キティよー！

「さて、次は私ね。
アテアツト。」

そうして出てきたのはなんか知らんが、装甲だった。
戦乙女って感じ？

それともガンムを擬人化した感じ？
そんな感じの装甲がふよふよと漂つている。
ちょっと許せないのが、胸の部分の装甲が大きめな女性に合わせた
形になつていることだ。

私は・・・いや、僕は一応男なんだが？

「姉様は男・・・ですよね？」

「そうだけども。というか、じやなきや昨日のアレはなんだつたの
よつて話でしょ？」

「う・・・そうですけど。」

昨日の行為をまた思い出したのか顔が真っ赤になるキティ。

「むむう・・・見た感じこのまま使うんじゃなくてやつぱり装着して使うみたいだけど・・・胸の部分がぽっかり空くんじゃないだろうか？」

それに体のラインがモロに出る構造だし。なんだコレは？嫌がらせかな？

股間部分とかあてつけなの？」

変則的な露出の多いスクール水着型？とでも言えば良いだろうか？それに装甲を後から付け足していくたという感じだ。

なんにせよ魔眼で見てみるか。
もしかしたら、このままで使つたり、他者の戦闘力増加の効果があるってことかもしれないし。

それにしたつて私には意味の無いものだが。

「うあ・・・。これはこれでまたある意味凶悪だ。」

「私の人形のような概念兵器とやらですか？」

「いや、これは普通の装甲。」

防御力とか攻撃力とかが跳ね上がるとか、魔法の補助に使えるとか魔力ならナギと同等、気ならラカン君と同等分が増えるとかそれはそれでかなりの性能を誇ってるけど、一番は装備した人間の体構造を変化させるつてこと。

「・・・つまり？」

「コレをつけるだけで英雄と同等の力を得るばかりか、女体化できるつてことだよ。」

「・・・は？」

「ううむ。

我ながら変なのを引き当ててしまつた。

「にょ、女体化・・・ですか？」

「そう。体形の最適化と言つても良いかも。この装甲にあわせて私の体が変化するつてこと。

装甲を外しても効果は持続して好きなタイミングで戻れるつて云つマニコアルリカバリー機能……とでも言おうか。そんな機能まである。これはかなり良い変装機具としても使えるかも。」

「……私にも使えますか！？」

「うあっ！？」

「どうしたの！？」

いきなり凄い形相で！？」

「こ、いや、別に何でもないんですけど！――

とにかく私にはめてもうしたら私もこの装甲の形に最適化されるつてこと！？」

ちゅ、ちゅつと！？

そんなに揺らされると頭がぐらぐらするんだけど！？」

さらに言えば両肩を掴んでるキティの手が凄い力で、ミシミシヒッてるから離して！――

肩が砕けちゃう！？

「お、落ち着いて！？」

こ、この装甲は元々、私が女だった場合……を想定して最適化された装甲みたいだから……そうね。

さつきは装甲にあわせて私の体が変化するつて言つたけど、すでに装甲が私に合わさってる……つてことだから……多分、この装甲は装備者が女だったら？という仮定を再現して変形すると想ひ。見る限りじや微妙にはつきりしないんだけどね。

装甲側が装備者にこの形を強要するんじゃなく、装備者にあわせて変形するからキティについた瞬間にキティの体形に合わせて変形するると……

「……なんだ、そうなんですか……」

すつしーいがつかり来てるキティ。

なるほど。幼児体系のキティことひで、田の前の「れはなひ」とした——否。

かなりの憧れだったたつてことか。

「大丈夫よ？ キティ。

キティは十一分に女の子らしいから。」

「……でも、姉様だつてもつと大きいほうが良いでしょ？」

自分の胸を見下げて俯くキティ。

本当にこの子はいじらしい。

多少なりとも女性としての憧れもあつたんだろうが、一番は私を喜ばせるためだつたのだろう。

その気持ちで十分だ。

確かに大きい方が良い……といつ気持ちが無いわけでもないが。

「私は気にしないって。

キティならどんな姿になつても愛せるから。」

「私がでつぱりと肥えても？」

顔がやけどで悲惨なことになつても？」

不安そうな顔でそう聞いてくる。

何を馬鹿なことを言つてるんだか。

「時々、思つる。

私つてその……その種の人にはたまらない容姿をしてるんじゃな
いかつて。」

「その種……口汚いこと？」

「う、うん。」

そういうえばキティのどじが好きとかはつきり言つてなかつた気がする。

そういう種の人間だからこそ私が彼女を好きになつた・・・自分を好きなのは容姿だけだと、不安になるのも仕方ないのかもしない。違つてことはおそらくキティもわかつてはいるのだろうが、態度ではなく言葉としてしっかりと聞きたいつてことだらう。

そういう不安はあつて当然だ。

「そうね。

太つたら氣持ち悪いと思つかもしれないし、やけどで酷いことになつたらドン引きすると思つわ。」

「つー？」

一気に顔が蒼白になるキティ。

そんなキティの頭を撫でながら、私は言葉を紡いだ。

「逆に聞くけど、もし私がそつなつたらキティはばいひするへ。

私を嫌いになる？」

「ならない！－！」

即答。しかも張り叫ぶほどの声量で。涙を流しながらキティは言つた。

「姉様は太つたら、ダイエットさせるし－－！
やけどで酷いことになつた姉様を見ても愛せるもの－－！
だ、だから－
わ、私のことも・・・」

「そ、私も同じ答えよ？
キティ。

分かつてゐるじゃない。」

深く、濃厚なキスをして、私は答えた。
決意表明の意思をもつて。

「私達みたいな常軌を逸した人外がそうなるとは思えないけど、もしキティが太つてもダイエットさせるだけだし……そもそも不健康の証だしね、肥満は。

やけどで酷いことになつてもドン引きするでしょうけど、好きと言つ氣持にはなんら変わりはないわ。」

「き、奇麗事……じゃ……」

「今わざわあなたも同じことを言つたでしょ、アリ。」

奇麗事と評するキティを見て苦笑する私。

もう一度口付けをして、再度氣持ちを込めて言へ。

「奇麗事でもなんでもない。

常識よ。

顔が良いつことで結婚するなら男女のアイドルは全てカッフル化して結婚してゐるわよ。

そうでしょ？」

「でも……」

容姿が崩れたら？

醜くなつたら嫌われるんじやないか？

これはキティだけではなくほかの人にも言えることだらう。
でも、私は。少なくとも私はこゝに言える。

「見た目が良いってだけで夫婦にいきなりなる男女なんて聞いたこと無いでしょ？」

見た目つてのは確かに重視されるけど、少なくともそれは最初だけ。

「・・・」

「いい？」

キティ。

”僕”は君の”全て”に惚れたんだ。
比喻じゃない。言葉どおりの意味で。」

「ひうっ！？」

一気に顔が真っ赤になるキティ。

「君の長所のいくつかがだめになつたところでそれも含めて愛する。
それだけ。顔なんて体型なんて最初だけ。
確かに気持ち悪く思うだろうけど、嫌いになることはない。
キティがキティである限り、ずっとこれは変わらない。
断言しよう。

変わらないんだ。奇麗事なんかじゃない。

心底からそう思つてるからそう言つている。

見て惚れたつて程度の動機で復讐の相手になるほど善人ではないよ、
僕は。」

「あう・・・あう・・・」

顔が真っ赤で何も言えない様子のキティ。

「これだけ言ったのに。

キティは何も言つてくれないの？」

「あの・・・あのつー..
「なあ」「?」

キティは大きく息を吸い込んで、はつきりと言に切った。

「私も・・・あ、貴方の事を・・・その
愛してゐに決まつてますーーー！」

「うん、知つてゐる。」

そうじつてニーチ「コリ微笑むとキティは、そのまま赤い顔をして熱い
キスをーーーそれこそ僕という存在をむさぼるよつて、一心不乱に
僕とのキスを交わし続けた。

時間にして20分ほど。

いくらなんでも長すぎると感じるのは贅沢なことなんだろう。きつ
と。

そのまま行為に至つたのは言つまでも無いことだ。

111回 パクティオーカード（後書き）

もう一つのゼロ魔の世界で魂生成の方も書き始めました。
そちらも良しなに。

元々はネギまとゼロ魔、どっちのファンファイクションを書くかで迷
っていたんですが、まあいいや…やつちまおつ?てなわけで書いち
まいました。

よろしくです。

一つの共通点は神様の設定と神様から貰う能力が同じといつだけで
すけどね。

12つ目 タカミチやつれる（前書き）

2011/7/01修正。

主人公のアーティファクト名をラテン語に。

とは言え確実に文法が間違っていますが、これが作者の限界。

125回 タカミチやつれる

私はとこつと早速、装甲を装着してみた。

ちなみに装甲の名は『夢現の体現鎧』ultra somnium
Vi torica』。

胸やらお尻やらがバインと突き出る。

正直、胸とか邪魔臭い。

顔を下に向けても足が見えんがな。

重い。とにかく重い。

動くと揺れるし、なんだか引っ張られる感じが好きじゃない。

先っぽも擦れそุดだから、このアーマー以外の服装の場合、ブライヤーとか必要なんじやないだろうか？

ブライヤー選びとか知らないよ？私。

型崩れとかもするらしいし。

良く知らないが。

「なんか・・・重くて邪魔ね。胸。」

結論から言つと、色々面倒そうだ。

胸で選ぶ男にはモテるんだろうけど、胸で見るような男からモテる
といつのと胸に関する手間暇がつりあわない気がする。
私が女ならば確実にいらん。

「姉様は今、全国のわざやかな女性達を敵にしましたよ。」

わざやかな・・・とはやっぱり胸のことなんだわ。どっちもいける私としてはあまりこだわりはない。

私が女性に求めるのは太ももとお尻であるからして……

ちなみにキティの太ももとお尻は大好物ですーー

解除すると、もと來ていた服になるのだが如何せん要所要所のサイズがあれになつたので服がちょっとキツくなる。
「スロリ衣装がちょっとといびつになつていた。

ちなみに私の普段の私服は基本的にはキティの好みである「スロリ黒系。

「さて、キティって確かに裁縫とか得意じゃなかつたかしら?」

「確かにそれは・・・趣味としてありますのが・・・やっぱり仕立て直しますか?」

「これで外出するのはちょっと遠慮したい。」

「・・・男に戻れば良いじゃないですか。」

「少し不機嫌なのはコンプレックスから?」

「別に。」

「まあまあ。」

ふて腐れるキティもまあ可愛い可愛い。
とりあえず背中から抱きついておいつ。
胸の大きさが分かるようだ。

「・・・くつかないで。」

見る見る不機嫌になるキティ。

分かり易いキティもまた良いーー

「はいはい。

やつてくれる?キティ。」

「どうしてまたそこまで・・・」

「変装として完璧になるじゃないの。

これで、どこに誰だろ?と私を男だと見破ることはない。

これって超楽しくない?

なんか、こいつら私を女だと完全に理解してやがるし…とか内心で嘲り笑いながら、堂々と女として振舞う。

これほど愉快なイタズラも無いと思つんだけど?」

「…・悪趣味ですね、姉様。

アルビレオ・イマに影響されましたか?」

「…・いや、多分…・・もともとこいつ面はあつたと思つ。」

アル君とはヤケに気が合つし。

好きにはなれないけどね。

「ね、お願い。」

「…・はあ、分かりました。

服を縫うのは楽しいですし、こいつの「」と一から作り直します。
サイズから測つていきますよ。」

「ふふ。さすがキティ。理解ある妻を持ってお姉ちゃんは大変嬉しいです!」

「…・・と、当然です。」

いつまで経つても、照れて田を背けるこの仕草は変わらない。

可愛いよ、キティ!

ちなみにアル君から貰つた、魔法カメラで撮るのも忘れない。

「しゃ、写真を撮らないで!」

「どうして?」

こんなに可愛いキティをフレームに収めないなんて、神が許しても私が許せないわ!!

「は、恥ずかしいからに決まってるでしょ!…」

「あうあつ！？」

恥ずかしがってるキティもまた良い！！

この私をノックアウト寸前まで追い込むなんて、キティも腕を上げたわね！！

もじもじして今姿を全国民に見せてあげたい！！
ロリコンだらうとからうと昇天するに違いないわ！！
てか、しないやつなんてこの世に存在する価値なし！！
物理的に私が昇天させたるわい！！

まあ、見せないけどね！！

今のキティを見る権利があるのは他の誰でもない！
この私であああああああああるっ！！

「姉様が狂つた！？」

「何言つてるの！！

私は常に狂つてる！！主にキティのらぶりいなどこりにーーー。
で、大真面目にキティの可愛さを語つているわ！！
もう、魂の髄までキティに骨抜きにされてる私をこんなにしてーー。
どうする気なの！？

つと・・・なんか股間がうずいて・・・これが女性の反応・・・な
んかむらむらしてきた。

キティを思い浮かべればーーー回20回は堅いーーー

私をこんなヘブン状態にして、私を失神させる氣なのねーーー！
キティ
なぐさーーーぐふるつーーー

キティにぶん殴られ、壁にめりこむ私。

「す、すばらしいストレートよ・・・ジロー。

貴方なら・・・世界を狙えるわ・・・ジョーッーーー

「ジョーって誰！？」

ていうか、目覚めた？

「ええ、目覚めたわ！！」

女同士の道！！

すなわち百合道——がふふつ！？

めり込んだ私に再度パンチを食らわせるキティ。

パンチと言うか、タカミチ君の師匠とやらの髭タバコさんが使つて
た居合い拳が飛んできた。

よりめり込む私。

「ふざけないで、姉様。」

「ふざけてない！」

大真面目にキティとレズの道へ・・・ふえげうつ！？

「そんな趣味ないです！！」

消え行く意識の中、キティのそんな叫びが聞こえた。

「てなことがあつたんだけど、どう思つ？

スパ君、チャチャゼロ。」

「人形二、ソンナコト聞クノハオマエクライダナ。ケケケ。
ティウカ、バカッフル過ギテ、ウザイクライダゼ。」

「アリスが幸せなようにやればいいと思うだ。

というか、その辺の部分はオラ達無機物には理解できないところだ
な。」

いや、その辺はどうでもいい。

「ヤ」じやなくて、キティの可愛さについてだよ。

キティの可愛をときたら天井知らずで・・・あまりにも可愛すぎで私もどうしたいのやら?って感じでね。」

「ノロケカヨ。」

うん、まあそなうなんだ。

ちなみに今は体を戻してある。

普通に胸邪魔。

「私のキティがいかに可愛いか?それを聞いてもらいたかったつてのが8割方の理由。で、君達に集まつてもらつたのは他でもない。」

「アアン?」

「あれは出来る?」

「アレ?」

アア、アレナラ今、木偶ガ最終調整ヲシテルトゴダゼ。」

「木偶でなくて、名前で呼んで欲しいんだべが・・・まあいいだ。アリスに頼まれて作ったコレだな?」

といって、スパ君が取り出したのは仮面ライダー変身セット。

仮面ライダーに変身できる魔法具だ。どの仮面ライダーかと言えば、仮面ライダー カブトである。

ベルトと、カブトムシ型のギア。それが揃っている。

プリキュアときたら仮面ライダーだらうつてことで、三人で共同開発をしていた。

キティはプリキュアの時はなんだかんだでノリノリだつたんだが、仮面ライダーにはあまり乗り気でなく、意外にも女の子なところが判明した。

そんなキティもイツツアブリティ!!

まあキティが可愛いなんてことは神も仏も知っている絶対不变の厳然たる事実だ。

「オマエツテ意外ト、アホダヨナ。」

「はい？」

「ナンデモネエヨ。」

何か言いたそうにしてるチャチャゼロ。

なんだかは分からんが、言いたいことがあるなら我慢せずに言つたほうがいいと思うよ？

我慢は体に毒だから。私なんてキティが可愛いと言つことを口に10回は200字詰め原稿用紙を一一一学会でキティの可愛さの秘密を一一一キティファンクラブを作りたいけどキティが私だけのキティで一一一以下略。

おっと、いかんいかん。

思考に没していた。

「それで、調整はどこまで進んでるの？」

「それなら大方済んでるだ。

もう実践データを取つても問題ないぐらいだよ？」

「ふむ。

だつたらタカミチ君あたりに付けて実践投入してみようか。

それともその辺の英雄願望がありそうな人を適当に見繕つて、投入してみる？

「何気に酷くないだか？」

「何言つてるのさ。

これが完成して量産できればかなりこちらは有利になる。力があるつてことはそれだけ不殺を貫けるつてこと。

敵味方を問わずね。

どうもアリカちゃん・・・と母親を呼ぶのもどうかと思つけど、ア

リカちゃんも戦争には心を痛めてる。

口にこゝを出してないけど、あれはナギたちに殺さないように戦を倒してくれって言い足そうな田だったよ。

そんなことをすれば味方が多く死ぬようになる。

彼らもより危険になる。

だからこそ、言えない。言えるはずが無い。そういう顔だ。正直、完全なる世界にそそのかされる程度で戦争するようなバカどもなんてのは死んだほうがむしろ世のため、人の為になりそつだけアリカちゃんのあの悲痛な面持ちを見ると・・・なんともね。

一応、母親だし、助けてあげたい。

そのためには私とキティの武よりも兵 자체を強化するほうが効果的。というか、私達じゃ力が強すぎて皆殺しよりも手加減するほうが難しいよ。

「確かにそうだべ。」

「苦労人ダナ、ケケケ。」

あまり苦労してないつもりだけね。

まあ、気を遣つてるのは事実だ。

「少なくとも味方の死ぬ数を大幅に減らせる。
そのためのテストパイロットにあたるんだ。むしろ望んでやつてくれるだろ?」

もちろん、実験と言つても言つて含めてそれで戦争に出る覚悟のあるものを選ぶ。

自分で出ると決めた以上、自己責任だし。」

「オマエガ付ケテ、外二出ルノジヤ駄目ナノカ?」

「私やキティだと地が強いから参考にならない。」

同じ理由で紅き翼の面々も不可。

・・・やっぱりタカミチ君も止めたほうがいいかもしけないね。

髭タバコさんも弟子がドーピングで強くなるのは望むところじやな

いだろ!」

結局。

タカミチ君に頼んで、実践を経験をさせてみた。
とりあえず、完全なる世界の拠点のひとつと思われるところにタカ
ミチ君をぶん投げてみる。

「さて、今日は私と敵拠点のひとつを潰しに来ました。
ここまでは髭タバコさんから聞いてるね？」

「は、はい。

ただ、師匠からはそこまでしか聞いてなくて・・・なんで僕まで呼
んだんですか？アリスさん。

アリスさんがいれば十分だと思つんですけど。」

まあもつともな疑問だ。

面倒だからスルーするけど。

「まあ、とりあえず。

このベルトをつけてくれる？」

「は、はあ？

ナンですかこれは？」

「簡単に言うと新型の魔法具かな。

装着者のパワーアップをはかるものだよ。」

タカミチ君は渋々ながら付けてベルトをつけた。

「昨日読んでおいてつて言つた資料にあつた魔法具なんだけど、使
用方法は分かる？」

「は、はい。一応。

あ、あのー？」

僕が付けて・・・戦うんですか？」

「いぐさくとりー。

察しのいい子はお姉さん好きだよ。

キティの一億分の一にも満たない好意だけど。

あ、タカミチ君にほんのちょっとの好意しか向けてないってことじやないよ？

キティを大好きすぎるってことだ。

キティに対する愛の大きさを数値化するならば私はブロリーのスーパー saiya-jin 3 状態の戦闘力を遥かに越えるから。」

「は、はあ？」

何言つてんだこいつって田で見てくるタカミチ君。
知らなかつたのかな？ ブロリーのことを。

「ソウジヤネエダロ。イキナリノノロケニ、惑ツテルンダロ？」

「チャチャゼロ、頼んだよ。

基本手を出さなくともいいから・・・死にそうになつたら助けてあげて。」

「ツマンネエナ。好きに殺ラセロコナ。」

「まあ、そのうちできるつて。」

「な、なんの話ですか？」

よし、装備したな。

すでに変身してるじゃないか。

ちょっと残念。

変身のエフェクトもちゃんとしてるか見ておきたかったのに。

「キヤストオフの仕方も分かるね？

それはここぞという時に使う様にね。」

「は、はい。」

「クロックアップもちゃんと分かつてる?」

「だ、大丈夫です！」

うし。これで確認は終わりだ。

さあ いつ てくるのだ、タカミチ君――

「？」

タカミチ君の腕を掴み、そのまま。

「行つてひつしゃこー！」

思いつきりぶん投げた。
抛点のほうへ。

「んじゃ、モニターも忘れずに」お願いね。

私、ちょっととその辺の町でショッピングして暇つぶししてくるから。

「良イゴ身分ダナ。」

「キティに服の材料に使う糸と布を買ってくるように頼まれてるの。

あとはレースと・・・なんだつけ？
型紙もいるんだつたかな？

「ハア、人形使イノ荒イ変態ダゼ。」

これのおかげで変身セツトは完成。

着込めば、それだけで瞬動、虚空瞬動が使用でき、魔力、気も結構な量を使える。

なおかつカブトにあつたキヤストオフ（周囲への散弾攻撃、キヤスト形態時は防御力アップ）機能とクロックアップ（超加速）機能もある。

それを量産した物を一部の部隊に持たせ、その部隊は仮面部隊と称された。

ちなみに。

このほかにも実験にはタカミチ君を使つようになつたせいか、タカミチ君は私を避けるようになつた。

そして私はそんなタカミチ君を強制連行。

紅き翼の面々はただ笑うばかり。

師匠のガトウを除いて。

「・・・タカミチにクソ度胸がついたのは良いんだが、最近やつれてるよう見えるのは俺だけか？」

と言つガトウ。

「最近は私のタクマでもが改造されそくなつてな。
どんどんマッドなサイエンティストになつてゐるアリスに実験と称され色々試されてるタカミチ君に同情するよ・・・ナギやラカンに絡まる俺のようだ。」

詠春は泣きながら語つたといつ。

12月 タカラモノやつれぬ（後書き）

次回はよつやくアリカ登場

13つ目 アリカちゃんとハイくん（前書き）

久しぶりの更新。

13つ目 アリカラチャントフロイとん

そんな日々を過ぐしつつ、戦争がヒートアップしていく中。一度は占拠されたグレート＝ブリッジを紅き翼の力によつて、奪還したりそのまま帝国へと牽制がてら攻め込んだり。いけるところまで侵攻。

帝国を押し込んでいく形になつた。

原作どおり、ナギは千の呪文の男と称えられたり、詠春にはサムライマスター、ガトウには――うんぬんとこの後世に残る戦いで名実ともに英雄となる。

私とキティはグレー＝ブリッジ奪還の挾撃を担当していたのでこの戦いには参加しておらず、特別目立つてはいない。まあ目立ちたくないしね。

ちなみにであるが、正式には私達の存在は知れ渡つてはいない。キティは一応賞金首になつてはいるし、私自身も万が一にでも素顔が見られるとまずいということであまり前に前には出ないのである。ついでに言つておくとこれがきっかけでファンクラブなども出来上がつた。

ナギ、ガトウ、詠春、アル君、ゼクト君のファンクラブである。やはり一番多いのはナギで次にアル君、その次にゼクト君。という感じである。

イケメンや可愛い系の男はこれだから・・・

私にもひつそりとだけれど出来たのだが、会員メンバーの殆どが男性といつ。

ジーザスっ――

まあ、女性にちやほやされたらキティに無駄なやきもちを焼かせてしまうだけだし、そういう意味でなら全く問題ないけどね。

く、悔し紛れの言葉じゃないぞっ――

本当だぞ！？

「ふむ。

オヌシがアリスとエヴァンジョンソンリンとやらか？」

そんなある日のこと。今日はアリカちゃんとの初対面はつはである。王宮に忍び込んでこちらから一方的には見たことがあるけどね。すでに紅き翼メンバーとは挨拶を済ませて、最後に私達に会いに来たという。

すでに見たことはあってもなんだかんだで直接会うのは今日が始めてであるため、いやせか緊張感が凄い。

この人が私の母親・・・になるのだ。

じかに見ると凄く綺麗である。

「は、はい。

えと・・・アリス・スーパーーマクダウエルと良います！！」

あぶねえ！

つい本名を口走るところだった。

「ふん。

人の部屋にアポ無しでイキナリ尋ねてきたと思えば、上から田線。気に食わん女だな。」

緊張でがちがちの私を見て、不機嫌そうに眉をしかめつつアリカを見据えるキティ。

少しやきもちを焼いてるのかな？

母親といえども初対面の人間、それも女性にがちがちになってる私を見て少し面白いかもしない。

そういうちょっとしたことでもヤキモチを焼いてくれるのがまた、キティの可愛いところである。

「それは失礼した。

「の口調はもはや癖なのじや。

あまり氣にしないで貰うと助かる。」

「ふん。」

皮肉を被せたアリカちゃんにキティは鼻を鳴らして会話を切る。

まあともとキティは氣にしてなこと思ひなだね。

600年近くも生きておこて今更、口調でどうのいつのまほどう
さい人間では無い。

単純にやきもきがたりのハツ当たり、だと理解へ。

嗚呼、今日も今日として可愛こキティ。

「うわあめですーー

「えと・・・あの、アリカちゃん・・・じゃ、じゃなへーーーーー
アリカさん何か御用でしょうか?」

やつべやつべ。

ついつい心中での呼称を使つてしまつた。

ラカン君がちよつと話しかけようとしただけ下衆呼ばわりされて
いたハズ。

これでは怒鳴られかねん。

「ちやん?

そのようにフランクに話しかけられるのは初めてじや。」

「し、失礼しました。」

そりや そうだ。

王族に対してもちゃんと付けは無いだらう。
いや、王族うんぬんの前に初対面の人に対する対応とこいつ」とでも
間違いである。

「いや、良い。

むしろそう呼んでくれ。

どにか心地良い。なんだろうな。
じつ・・・心が温くなる。」

無表情だった顔が満面の笑みを浮かべる。

うわ、これはクル！？

母親ながらに恐ろしい人だ！！

というか、キティが私の影で腰をツネつて——あだだだだつ！？

千切れるつ！？

千切れちやうよつ！？キティ！？

う、浮気じゃないつ！？

浮気じやないからあつ！？

「は、はあよろしいのですか？」

「敬語も要らぬ。

変わりにオヌシのことも名で呼ぶが、構わぬだらうへ。

「は、はい！

あ、アリカちゃん！—！」

「アリス。

よろしく頼むのじゃ。」

お互に笑顔で握手しあつ。

ブチリツと何がが千切れた音がするが気にしないことにした。

すつごい腰の辺りが痛いけど気にしないことにした。

したのである。

アリカちゃんが何か私の腰辺りを見て顔を青ざめていたが、どうしたのやらさっぱりである。サッパリサッパリ。

うん、サッパリ。

アリカちゃんとそのまま世間話？

私の生活を聞かれたので支障の出ない程度に話をして、アリカちゃんの身の上話 というよりも愚痴もじょじょに聞きつつ。

その日は終えた。

「あの人があの母親か・・・良い人だな。」

ナギよりも好きです！！

一見、無表情なのだが目の色で楽しんでいるのかが分かる。
なんというか、好きになってしまった。

母親は偉大である。

ネギがファザコンなら私はマザコンか。

知識や肉体的にはまだ母親ではないはずだが、ひとつなく僕を近く感じているであろう色がアリカちゃんにも見えたし、もしかしたら時間軸とは関係なく母と子というのは次元を超越して魂での繋がりがあるのかもしれないな。

とちょっと詩的なことを考えつつ。

1人会話の輪に入れず、ふて腐れてベッドに籠ったキティを慰める私であった。

い、一応言っておくけど浮気じゃないからねっ！？

「ガトウおじさん。

どうしたの？

頭を押さえて考え込んだじゃつて。」

「アリスか？おじさんは止めてくれないか。
これでもまだ29だ。」

今は戦争の合間の一休み期間。

もとい休暇中。

ちょっとした別荘。

難しそうな顔で考え込むガトウを見つけたので、声をかけた私はナギとアリカちゃんは買い物といつ名のデートへと出かけた。
まああの2人に面と向かつてそう言えば、否定するだろうが。

「・・・気にしてるのね。見た目。」

「・・・ほつといってくれ。」

いささか不機嫌になつたガトウから話を聞くと、コングレスル執政官のナンバー2までもが完全なる世界の手先だということが分かったという。

よくよく考えると完全なる世界も凄いよね。

帝国と連合国。

そのどちらもの国の重職の人間を洗脳を使わずに取り込んでいるのだからして。

一体、どんな説得をしたのやら？

フェイともがんばるなあ。

いや、今はまだテルティウム・アーウェルンクスつて名乗つてゐるの

かな？

「確証は無いから、外で喋つてくれるなよ？」

「あい了解。」

大変そうだね。ガトウ君は。

「今度は君付けか。」

「私はガトウ君よりも年上だからね。問題なし。」

「は？」

呆けた顔をするガトウ君。

「だからガトウ君よりも年上だつて。」

「いや、も、モウイチド言つてくれ？」

「年上。」

「そのちんまい成りでか？」

「姿かたちは関係ないでしきうに。」

「蝶の仮面からはみ出てるところを見たところでは・・・15ほど
の女の子にしか見えないんだが？」

「年上。」

しかも男です。

「・・・はあ。

「ちとらふけ顔で悩んでるつて言ひの・・・これだから嫌なんだ。
魔法世界は。

俺より歳食つてゐるくせに、それよりも遙かに歳食つてゐる輩が若々し
い姿でゴロゴロと転がつてやがる。」

ふむふむ。

なかなかのコンプレックスをお持つのようである。

ガトウ君は。

どんまい。ガトウ君！－！

と話していると。

遠くからチュードーンと大きな破裂音が鳴り響いた。

「なんだつ！－？」

「うわあ・・・燃えてるねえ。」

音の発信源は川を挟んだ先の港町のようだ。

紅い炎が揺らめいて、黒い煙がモクモクと吹き上がる。

その後、一時間ほどにアリカちゃんとナギが帰ってきた。
ナギたちの話に寄れば街中で誰かしらが不意を付いて攻撃してき
た。

反撃。

逃げたやつを追つて、完全なる世界の下つ端組織を襲撃。
壊滅。

「バカがあつ！－！」

「ごへばつ！－？」

ガトウに殴られるナギ。

「アホがあつ！－！」

「のつましつー？」

詠春に殴られるナギ。

帰ってきたナギがガトウと詠春に殴られたのは言つまでも無い。

「何すんだよつ！？

「証拠たって取つてきりやうたのにな」

「アホ言へた!!」

おう、常識つてのを併えろ!!

バカガキつ！！

怪我したらどうしてくれんだつーーー！」

一
そ
そ
そ

[۱]

「一歩、まだつながりません!?

姫さんが付いてくるって言つたんだぜっ！？

それに楽しそうだつたから問題ないだろッ！？

題おにぎりのねこ

またもやガトウに殴られて壁に激突するナギ。

としてる内に。

「ああああああ、あのの、あのあのつ！？
い、今そこでお姫様と会いましてつ！？
にこりと笑つて、ナギさんに礼を言つてくれ・・・つて・・・は、
始めて見ましたつ！？

あの人の笑つてるところ！』

慌てて部屋に入ってきたタカミチが慌ててそう言った。

それを聞いたナギは口元を浮かべてガツンと訪問を見せる

あの無表情姫を笑わせたってことで誇ってるんだろうが、私だって笑わせたのであるからして。

۱۵۰

「今日は私の部屋でしかかりとお話しをしなう。

ニホンノモード

つて・・・あた、あたたたたつ！？

髪の毛巻き込んでるつ！？

髪の毛ごと襟首持つて引きうつてるからッ！？

よ、ちよつと、はげぬか！？

「アーティストの心」

私もドヤ顔してたらしい。

ギルはオジオギされました

まかうだらうが、うつぐ？

次の日。

証拠を持つてマクギル元老議員に会いに行くところになり、会いに行くと。

「あんた。

マクギル議員じゃねえな？」

「何を言つているのだね？」

「とほけんなつ……」

と言つて、ナギは簡単な火魔法をマクギル議員に浴びせた。隨伴してきたラカンとガトウはいきなりのナギの奇行に慌てふためくが、私はもちろん微動だにしない。ちなみにキティはお留守番。そして少しテンション上がり中なのです。

これから生フェイトを見れると言うのだから当然よね。
あわよくばマスターキーも手に入れられるかもしれない。

ちなみに私としては物語にあまり介入して死ぬはずの無い人が死んだり、もしかしたらナギとアリカちゃんが結婚しなかつたりと、未來が変わるかもしれないということで一番の目的であるマスターキーを手に入れたら、真帆良に戻るつもりではある。

前者はともかく後者は非常にまずいのだ。

考えすぎではあると思うけどね。

いざそうなつたらここにいる私はどうなるのか、色々不明だがとにかく出来るだけ過干渉は避けるつもりではある。

今更だけどさ。

最低でもアリカちゃんの死刑イベント辺りまでは紅き翼と一緒に行動するつもりはあるけれどね。

火魔法による煙が晴れて、フェイトの姿が明らかにな——はつ？
あれ？
ん？

「驚いた。

良く分かつたね。

千の呪文の男。」「

「なつ！？」

だ、誰だッ！？」

ガトウがマクギル議員に扮装していたテルティウム（のちのフェイト。）を睨みつけてそう叫ぶ。

誰だと聞かれて答えるやつはいないと思つたがどや。

一応、完全なる世界つて秘密結社だし。

その幹部が自分の名前をべらべら喋る」とは無いだろ？

「たりめえだ。」「

ナギがテルティウムに対しての返事をする。
無視されたガトウはちょっとへこんでいた。ところの今関係ない
ね。うん。

「ふふふ。

やはりこりでなくてはまらない。
とはじえ・・・

テルティウム・・・テルたんと呼ぼう。
テルたんはこりから目を向けた。

“金色天使”までいるとは正直予想外だよ。
それに近い報告は受けていたけれど・・・ふむ。

君達はどうかと言えば僕たち側に付いてくれると思っていたのだ
けどね。」「

「どうしてそう思つのかしら?」

「なんとなく・・・かな。」「

「・・・まあ、それはともかく。

テルティウムさん?で間違いないかしら?」「

「・・・っ!?

さすがだね。僕の名前を知つてゐるとは。「

おおう!?

や、やっぱりこいつは後のフェイとんなのか。

「テルたんや。」

「て、テルたん?」

「テルたんは女だつたりするのかな?」

「そ、それはどういう意味だい?」

僕が女に見えないってことかな?」

だとすれば少し傷付くね。」「

いや、何が驚いたつてフェイとんが性転換していたのが驚きである。
なんでやねん!?

本来無いはずの胸のふくらみがやたらと立つ。

WHY!?

ううむ・・・まあ別にいつか。

細かいことは。

いや、細かく無いけどさ。

確かアーウェルンクスシリーズには女性もいた筈。
水のアーウェルンクスだったか?

士のアーヴィングクスであるフロイとんが女であったとしても、別に。どうでもいいか。

「何をぐだぐだ喋つてんだ。アリス！！」
「とつとと仕留めるぞつ！！」

「それは困るな。

誰か一人ならばともかく、ジャック・ラカンや千の呪文の男、敏腕魔法刑事と称されるガトウに金色天使までいられては勝てるはずがない。

とこうわけで、搦め手で行かせて貰おう。」「

「させると思つてんのかよつ！！」

「はつ！！」

政治家なんぞよつ、万倍やりやすいぜつ！！！」

ナギとラカンが襲い掛かるが、その前にテルたん搦め手が炸裂した。

「わ、わしだつ！！
ま、マクギルだ！！
反逆者が――」

テルたんが聲音を変えて連絡を取る。

「げつ！？」
「くそつ！？そつきたかつ！？」
「こちるうつ！？」

上から、ナギ、ガトウ、ラカンである。

「君達は少しやつすぎた。」

拮抗して無いと困るんだ。

というわけで、少しの間退場してもいい。」

テルたんから膨大な魔力。

そしてすぐに地面から吹き上がる石の槍が皆を襲う。

このときを待っていたっ！！

転移ゲートで逃げるテルたんを追って、私も影を使った転移をする。

「まさか、追つてこられるとはね。
さすがというべきか。

金色天使。」「

「テルたん。

頼みがあるんだけど。」「

「・・・君が？

完全なる世界の幹部の僕に？」「

「おういええい！」

「テンションがおかしいね。」「

「ほつといてちょうだい。」「

そう真顔で突っ込まれると少し恥ずかしい。

「私のお願ひってのは、マスター・キー……できればグランドマスター・キー。」

無理なうばマスター・キーを欲しい……あげるのが無理だと叫うな

ら一時的に貸してくれないかしら?」

「・・・君はどこまで僕達のことを知っているんだい?」

「まあまあ。

それも含めて貸してくれたら教えてあげる。」

「・・・ふむ。」

「まあ難しい問題だとは思うけど、そこを曲げてたの―――」

「構わないよ。」

「はい?」

「今、僕が持つてるので良いかい?」

とはいえたげることには出来そうにないけど。」

「良いの?」

これ使つて、テルたんを消しちゃうかもよ?」

「別にそれを使わなくとも君がやろうと思えば僕程度。やられてしまうだろ?」

それにこれは“まだ”使えないよ。」

「そう。

私としてはキーに組み込まれてる術式を利用したいだけだから問題

ないけど・・・まあありがとう。」

「それで、さつそく聞かせてくれるかい?」

僕はこう見えて忙しいんだ。」

キーを受け取り、さつそく本来の目的の魂を生成していく私。

おおう!?

これはグランドマスターキーか。

ここまでとは思わなかつたよ。

凄い速度で魂が生成されていくを感じる。

これなら10分くらいで住むかも。

「ええとね、私が君達を知つてるのは未来人だからだよ。」

本当はちゅうと違つたが、まあこれでも良いだろ。

「・・・ふやけているのかい？」

「これは取引だよ？」

取引でウソを言つ人間に見えるかしら？

「見えないね。」

「なら信じてもらつしかないわ。」

「・・・僕達の計画とその成否も知つてゐるの？」

「もちろん。」

「聞きたい？」

「・・・。」

「君達の計画は失敗するよ。」

「・・・やっぱ。」

それは君が関与するからかい？」

「違うわ。」

私がどうこうするまでも無く失敗する。」

「・・・ふふふ。」

「そうか、失敗か。」

少し虚ろな目をするテルたん。
しかし、それもすぐに消えた。

「ありがとう。」

「・・・失敗すると分かつていてもやるの？」

「・・・あ。」

人間ならばやる気がなくなるんだろう。
でも、むしろやる気が沸いてきたのはどうしてだろうね？
どうしてもやつてやると言つ気になる。

計画を果たすための人形だからかな？」

少し自嘲氣味に笑うテルたん。

だが、そのやる氣は人形だから。といつよりも——人間らしいからといったほうがしつくらるのは私の氣のせいだらうか？

「気が変わったよ。

そのキーは金色天使。

君にあげる。」

「いいの？ テルたん。」

「ああ。

それとテルたんって言つのは止めてくれないか？」

「・・・ふうん。

じゃあ、フュイとんね。」

「・・・いや、だから・・・」

「テルティウムは“三番田”って意味でしょ？
新しく名前を付けてあげる。

番号ではない名前。

フュイト・アーウールンクスって良いと思わない？」

「・・・はあ。

好きに呼ぶといこや。」

そのまま去り立つするフュイとの背中に私は名乗りを上げた。

「私はアリス・スプリングフィールド。

ついでに言うと男だつたりする――！」

「・・・最後に超ビ級のどつきを仕掛けてくれたね。いろんな意味で。」

「またね。フュイとん。」

「・・・またね。」

軽く手を振つて分かれる私達。

うむ！

フヨイとんとは『氣が合ひやうな』氣がするよーー。

次、逢える日を楽しみしてねーー。

13つ目 アリカちゅうとフロイどん（後書き）

性転換しちゃったのはなんとなくである…！
後悔はしないよ…？

ここから先の展開で迷い中。

アリカとの親愛を擱めて物語を進めていくか、淡白に進めていくか。
アリカとナギの恋愛をこと細やかにラブコメよろしく書こうと思つたのですが、面倒なのでそれはボツ。

なにより僕は主人公が一時的にでも変わると読む気が激減するタイプの人間なので、そういう人のためにもナギの一人称は書かん！！
(書く側としては別にいいんだけど)。なので希望が多数あれば書きます。)

で、話を戻しますが、主人公とアリカとの親愛を絡めるか、淡白に行くか。

コレによつて紅き翼編の話の長さが10話ほど変わりそうな気がします。

もちろん前者が長くなりますが、そうなると紅き翼編のテーマは家族愛になっちゃうかも？

とつとと真帆良編に行つて欲しい人は書かないほうが良いでしあうし…・悩みます。

メッセージなんかで意見をもらえるとありがたいです。
どっちが良いか。

挨拶とかいらないので、家族愛を擱めて描いて欲しいならば1を。
淡白に進めてさつさと学園編に行つてくれと言つならば2を。

番号のみを書いたメッセージを送つてくれれば構いません。

例えば

『こんにちわ。いつも読ませてもらつてます。

私は一番をお願いします。』

というメッセージを送るとしたら。

挨拶なんて抜かして

『一番で。』

もしくは

『1』だけでも構わないです。

感想を書きたい人は感想も書いていただいて構いません。

というわけでアンケート。

よろしくお願ひします。

また、たとえ家族愛を望まれても期待に沿えるかはまた別の問題です
www

14つ目 番田 あやめの改造ぶり（前書き）

前の話にて。

大戦期の土のアーウルンクスは一番田だといつ指摘を頂きました。
ま、間違えたわけじゃないんだからねつ！！
この作品ではそういう展開なだけなんだからつ！！

おほん。

修正しようとも思いましたが、そうなるとフェイとんが出てこなく
なるのでこのまま進めることにしました。
ご容赦くださいませ。

さてはて、おハロー。

アリストです。

前回のフェイとんの策でまんまと指名手配された紅き翼の面々。
彼等は逃亡生活真っ最中のご様子。

書類上では紅き翼に入つてなかつた私とキティはのんびりとホテル
でラブラブしている最中でござります。

戦いでは積極的に前へと出てもいなかつたし、出ないと言うよりは
ナギ達が強すぎて出る必要がなかつたと言うのが大きかつたんだけ
どーーーなにはともあれ私はアリカちゃんと似てるから都合が良か
つたって言うのもあり、キティは賞金首だからということで素顔を
さらしていなかつた目立たない私達にはあまり大きな問題ではない
のである。

そもそも普段つけていた蝶マスクを外せば良いだけなのだ。
分かる人には分かるだろうがーーー直接会つたことがあり、内に隠
してゐる魔力を確認できるほどの実力の持ち主に限る。
よつて普通に街を出歩いていてもばれない物である。
といふか、私達に関しては疑いがかかつてると言うレベルだしね。

「いいのですか？姉様。」「何があ？」

ソファの上でゴロゴロし、少年ジャンプを読みつつカールを食べる
私。

カール美味しいよ。

お酒のつまみとしても美味しいよーーーと言つても、私は呑んだこと
無いからチャチャゼロとその酒飲みに付き合わされるスペ君の話の
受け売りだけね。

ソファの目の前の机には三ツ矢サイダー。
もちろん力口リーゼ口なんかではない。
個人的には好きではないからね。

「ナギたちのことですよ。」

「ナギたちだからこそだよ。」

問題ないわ。」

連合国はもちろん、帝国からも追われることになったナギたち。
帝国は今まで戦争をしていた相手だし、あそこに逃げるのはまず無理。

適当に逃げ回っているところじゃないかな。

これによる影響は両国にかなりのものが出た。

今まで連合が押していたのは英雄であるナギたちの力による物が大きい。

そのナギたちの離反（というフェイくんによる誤報）によって、連合軍は士気が低下。

さらには元々は帝国のほうが力が強いと言つことも相まって、あれから三日しか経過していないにも関わらずすぐさま拮抗するようになつた両国。

もう少しあと頑張つて欲しいよね。だらしないんだから。

私達としてはもう戦争に関わる理由が限りなく無くなつてしまつた。
鍵で魂生成は完了したし、鍵自体も手に入れた。

これで私はたとえアーウェルンクスシリーズがすべて総出でかかつてきたとしても、傷一つなく勝てるようになつてしまつた。

フェイくんはマスターキーは“まだ”使えないと言つていたが、私はアスナ姫の力を必要とせずにリライトが使える。

私と鍵があればそれだけで使えてしまうからして、魔法世界の住人相手ならば問答無用で勝ててしまうほどの戦闘力を手に入れたので

ある。

「ふむ、アリカちゃんを助けに行こうかな。」

「あの女にも反逆者であるところ疑いが行くからですか？」

「うん。」

私達と違つてアリカちゃんが紅き翼と仲が良いといつのは周知の事実。

となればその仲間であると言ひ疑いがかかるのは当然のことだよね。

「

といつより、ちよつと三日ほどキティとラブでイチャチャな夜の乱れた生活をしていて、気づいたらアリカちゃんにも反逆者の疑いがかかるつていて、いつの間にか捕らえられていたと言つ。もう少し経てば大規模な裁判の下、無罪か有罪か。

下手をすればそのまま斬り捨てられかねない。
キティに夢中になりすぎちゃつた！ てへ！

「はあ、姉様。」

「な、何かな？」

「それを知つていながら、まだまあとお嘗の阿呆どモにあの女を捕られたのですか？」

「しょ、しょうがないじゃない！？」

最近、戦争戦争ばつかでろくにキティとそういう・・・『』によじによじ・・・をしてなかつたから・・・キティだつて喜んでたくせに。』

「う、五月蠅いです！！

人のせいにしちゃいけないんですよー！」

「『、ごめんなさい。』

死ぬような目に遭つても私がここに存在する以上、金髪幼女神が言う世界による修正力によつて死ぬことはまずない。（スパ君談）ここで彼女が死ねば私は生まれないことになる。しかし、一度存在した時間軸の歴史は変えられない。

これは“世界”の決まりである。

未来でネギと一緒に私が生まれる。これは決定事項なのだ。よつてその矛盾を修正するべくアリカ王女はある意味死ねない体なのだ。

が、フェイとんが女になつていたりと微妙に違つ部分がある。

となればだ。原作ではなかつたが、拷問を受けたりなんたりとする可能性が無きにしもあらずということも。

死ななければそれで良い。というくらいの修正力しか無い為だ。

極論を言えば、子供を産める体でありさえすれば良いということになる。

致命的ではないにせよ、原作が悪い方向に変わる可能性がある以上助けに行くのが無難だらう。

赤の他人ならばともかく母親兼友人のアリカちゃんのためだしね。

「あんな女。放つておけば良いでしょ！」

・・・全く。

と言いつつも私の向かい側のソファから腰を上げるキティ。そんなキティはやはり私の妻なのである。

なんだかんだで行く気満々じゃない？

「・・・ふふ。心配してゐくせに。」

「ね、姉様が行くからついていくだけで、私自身は特にどうとも思つてません！！

アリカのことなんて・・・どうでも良いんです！！！」

「またまたあ～照れちゃって、まあまあ。」

「照れないもん！！」

顔を紅くしてそんなことを言われてもね。

ちなみにであるが、アリカちゃんとキティは良い友達である。
なんだかんだで仲良くなつた。

2人とも高貴な出だから気が合つのかもしれない。

「というわけで、お留守番お願ひね。

スパ君、チャチャゼロ。」

「分かつただ。

気をつけていくだよ。」

「留守番力ヨ、ツマンネエナ。」

ただ救出するだけならキティとの一人だけで十分。
この2人まで連れて行つたら戦力過剰すぎる。

「というわけで、アリカちゃんが捕らえられると書いた『夜の迷宮』
に来てみました！！」

「誰に言つてるんです？」

姉様？」

「特に誰でもないわよ？

単なるノリ？かしら。」

「・・・のんきですね。」

別に悪くはないでしょ？

こんな辺鄙なところ、無理にでもテンションあげなきやせつてう
れませんって。

周りにはどこからどこもなくやつてきた魔獸たちの住処となつてゐるし。まあ襲い掛かってくるほど凶暴な種じやないみたいだけね。だつて、私達を見た瞬間に一目散に逃げ出すくらいだもの。臆病な子達が多いのでしょう。

それにも、やたらガタガタ震えていたのはなぜ？

「姉様の言つとおり、辺鄙な遺跡ですね。

正直、探すのが面倒です。

魔力も遺跡自体が遮断してしまつみたいで魔力探査が出来ませんし・

・・

場所をここにした理由は簡単に脱走できないようこつてところから。

似たような様相が続く、入り組んだ道。それに時折出てくる竜種の数々。

驚くことなれ。ここに出てくる殆どの魔獸が竜種なのだ。それも正面から向かえば一流の魔法使いが多少なりとも苦戦するレベルのものがである。

襲つてはこない臆病な竜種のようだが、これはいさか脱走を足踏みするには十分な理由である。

夜の迷宮とは良く言つた物よね。

旧世界のゲーム、“世界樹の迷宮”を思い出さないかしら。

あれの階層の終わりに出てくるボスクラスの敵が普通に出てきて、尚且つ道形が全く分からぬ。

これだけでどれほどの脅威か。

ゲームをやる人は分かるかと思つ。あまりやらない人でも想像は付くだろう。

さらに言えば、ここは現実であり回復系アイテム以外にも食料なんか必要になる。

そう考えれば捕まつたアリカちゃんとしてはいつ終わるともしね
迷宮を渡り歩こうなどとは間違つても思つまい。

強力な攻撃魔法で壁を無視してひたすら前へと突き進むというのも
可能だが、それはナギや私のような魔力が無駄にある人向けである。
アリカちゃんには向かないだろう。

調子のつて安全なところに帰るまでに魔力切れなんて起こしたらそ
こでお陀仏だし。

そもそも竜種は縄張りを持つので、縄張りを荒らせば一いつ体の
竜種にいつぺんに襲い掛かられないし。

といいつつも。

「どつせいーー！」

雷の暴風！ーー

無視して突き進むだけなんだけどね。

周りにいた竜種はすぐさま消えていく。

いまさらだけど、あの子達怯えていたりーーーするわけないよねーー？
私のような可憐な男の娘を怖がるなんてありえないよーー！ー！

「ね、姉様。

下手をしたらアリカまで巻き込みかねませんが。」

「・・・そうだったわね。」

田の前には半壊した壁が「んぐんぐん」と転がる。

「今ので死んじゃつたりしてないよね？」

「・・・アホですね。」

「・・・つるさいな。ちょっと失敗しちゃつただけじゃない。

今度からは一枚一枚、地道に壊して行くわよ。」

人間やめても失敗の一つや二つはあるものである。

「と思つたら……これか……」

「……ナギたちが先に助けたようですね。」

アリカちゃんたちがいたと思われる場所はもぬけの空。
誰もいなかつた。

虚しい。

「……どうするんですか?」

「……もう知らない。」

勝手にしたらいいよ。」

「いじけないで下さい。」

「だつてえ……もういないとか……無駄に魔獸たちの住処をあらしただけじゃないのよお……魔獸にも申し訳ないわ……さすがに。」

「おや?」

姉様……コレを。」

「うん?」

あら?これって……ふむ。

あれね。

人造人間の素体だわ。使用済みの。」

部屋を良く調べるとせりに一枚向ひに隠し部屋があり、そこは研究所と化していた。

周囲には培養槽がずらりと並んでいて、それらの中には一部が無い、もしくはほとんどの体の部位が無い“生体”が入っている。
死んでいるみたいだ。

「もしかしたら・・・アリカちゃんの血を使って人造人間を造るうとしたのかな？」

「王族の血を引いた存在が必要だつた・・・といふことですか？」

「アリカちゃんを殺した後の傀儡を用意するためか・・・それとも王族の血を引いた兵士でも作ろうとでも考えたのかなんなかコレだけじゃ予想が多すぎてコレと言うのは分からぬけどね・・・完全なる世界の目的からするとこそこそかずれ過ぎてる。

多分、元老議員の方が動いてるね。」

「完全なる世界の目的？」

「魔法世界の人々を救う。もとい世界を救う。のが、彼らの目的・・・

・だつたかな？」

「なるほど。

だからこそナギたちを罠にはめたと言つ」とですか。」「うん。

両国が拮抗していくれば第3勢力の完全なる世界の面々が動き易いというのと、救う前にはあまりに殺されるのも困るつて言つのがあるんだろうね。

帝国の人間の殆どが魔法世界人だから。」

「姉様から聞いた話はホント信じがたいですね。リライト・・・始まりの魔法使い・・・さらには魔法世界人の“樂園”への“転送”。今回の戦争が尚のこと面倒になつてきました。」

「まあ、そういうわざに付き合つてよ、キティ。どうせ暇じやない？」

命の危険が無い程度に楽しませてもらいましょ~。」

「まあそうですけど・・・」「

なんだかんだ言いつつも皆を助ける一番の理由は暇だからなのだー!不純な動悸でごめんなさい。

だってねえ・・・600年以上も生きてると善悪観念なんてほぼ飛

ぶよ？

もちろんアリカちゃんを助けるのはそれだけではなく、情ゆえにってのもあるけどね。

ついでにこの研究所のデータも持ち帰ろう。

将来的に私達の血を引いた子供を作ることが出来るかもしない。軽く試したんだけど専門外だったからちょっと行き詰つてたんだよね。

スパ君に聞けば分かつたとは思つけど・・・一人の子供になるんだし、ここはやはり自力でーーー

ふふふふへへへえへへ。

娘と息子を1人づつにしようかな？

それとも娘か息子を1人だけにして、百年くらいかけて育てようか？

2人もいたら教育費とかしつけとか大変そうだよね。

いや、教育費は土地代で十二分以上に足りるんだけどさ。

そもそも普段買うのは服と食べ物、週間雑誌、面白そうなゲームを数点くらいだし。

のくせして年収は普通に億越えだから（麻帆良の土地が特別高いと言つわけではなく、単純に敷地がめちゃめちゃ広いために）、お金はそれこそお尻を拭ける位にある。

食べ物も普通にスーパーで済ませるし・・・生活費は今まで一番多く使つた時でも月20万ほどだ。お金がありすぎるってのも困り者だよね。

キャビアとかも食べてみたけど、しょっぱいだけだった。

年代物のワインなんかは普通にキティが自分で作った100～600年ものが沢山ある。

時価にしたら1000万はくだらないんじゃないだろうか？

ダイラオマ魔法球つてこういう時便利だよね。

酒樽の収納スペースとして酒に適切な気温、湿度を整えた専用の魔法球を使って保存してるので保存の手間隙も一切無くただ日々を過

「こすだけで年代もののワインができる」と言ひ。しかも時間の進みも弄れるので・・・わふう。すごいことになりそう。

「姊
樣？」

どうしたの？

急に黒々たりして

思

おしゃべり

電子魔法でデータを抜き取つて、うして……ぴーぴーと。

「…ヤ…ヤとして…・…何を企んでるんですか？」
「ブリキュアとかもうやりませんよ？」

一
二
三
•
•
•
秘密

驚くわよ キテー！！

「兼」八二

「なぜっ!?」

超ハイスペックな娘を作りましょうか・・・それとも超可愛い男の

娘を作りましょーか?

でも、私達の血を引くわけだから可愛いのは当然で……強いのも当然だな。

二三

どちらは他に何がいい。そのことハ、二点、一に同性具有には

「姉様・・・まだですか？」

「あ、うん。

終わったよ。

「んじゅま、帰るうか。」

「・・・お手柔らかにお願いしますよ・・・本当に。」

「わかつてゐつてば。

大丈夫大丈夫。」

「不安です。」

ジト目を向けてくるキティ。

お姉ちゃんは悲しいです。

信じてくれないなんて!!

「ひどいっ!!

もう私達の愛は冷めてしまつたと嘆息のつー? 信じること。これすなわち愛なのにつー?」

「あ、い、いえつ!!

そ、そういうわけじゃないんです、姉様つー? き、嫌いになつちやつたのね・・・

「そ、そんなわけ・・・

「じゃあ、キスして。」

「は、はい・・・つて、へつ!?」

「で、できないのね・・・うう・・・キティ。私のことを・・・

「な、なみだ目で見つめられてもこんな場所で・・・

「なんてね。

冗談だけど。」

顔を真っ赤にして、あたふたと慌てるキティ。

嗚呼、可愛い。

ふくふく。たまにはからかうのも・・・

「・・・少し頭冷やそつか。」

「はつ？」

あ、ちょっと待って・・・その魔力量はちよつとしゃれにならないかなあって・・・『ごめ・・・がつぶつるうあんつ！？』

キティの鉄拳によつて星となつた私であつた。
ちなみにキスはした。

可愛かつた物で、帰り際にちょっと頂いたやいました。

「ふえつ！？」

「、こんな場所で・・・なんて・・・バカです、姉様は。」

思わず押し倒しちゃったのは余談です。

淡白に進める」としました。

アンケートが感想でしか集まらないもの……
ちょっと恥ずかしいです。

2、3ページほどでこの章は終わり（マンネリして微妙につまらなくなりつつあると思いますしね）、ネギとの再開を果たします。といつ予定です。

追伸

メタギアオンライン良いよ……！

久々にやつたらはまつたよ……！

今まで13と14の間を彷徨っていたけど、14安定どころか、レベルが15になったyo！

”Leopard Gecko” という名のキャラです。
見かけたらよろしく。

15つ目 終着へ向けて

はろはる。アリスです。
似たり寄つたりな始まり方だけど、勘弁してね。
出だしつて結構迷う物だから。

とか誰に話しかけるのやら、意味の無い挨拶をしつつ。
あれからちょいちょい色々なことがあったのだけど、それらを飛ば
して現在は完全なる世界との最終決戦。
ナギたちが頑張ってるさなか、私達は遠くにて遠見の魔法で鑑賞中
です。

「姉様はあれに加わらないのですか？」
「キティにはもう言つたでしょ？」

完全なる世界の目的を。」

「ええ・・・魔法世界人の樂園^{コズモエンドケレテイア}への転送。

ナギたちはそんな都合の良いものは人生じゃない・・・といふこと
で反発していることですよね？」

「簡単に言つとね。

まあ確かにそれも一つの価値観なんだけど。

私としては彼らの計画を応援してあげても良いくらいなの。」

「・・・といふと?」

人生辛苦をともなつてこそ良いものになる。

確かにそれはあるだろ?。

あるかもしれない。

でも、自分に都合の良い夢しか見れないと言つその樂園ならばそれ
を必要としない。

それを必要と考える人間ならばその夢の中で味わえるはずなのだ。

ならば現実であらうと夢であらうとそれを経験する」とは変わらないのだから夢の方が良いに決まっている。
決して死ぬことが無い。

幸せな未来が——成功が“約束”されているのだから。

どう考へても夢のほうが良いだろ？

まあ、とはいへ私はごめんだが。
キティとの関係も都合の良いものになってしまつのは我慢なら無い。
それ以外ならOKなんだけれどね。
いや、だからこそ夢を拒否してゐるのかな？

あれ？

改めて考へると良くなくなつてきた。

「姉様、私もそうです。

姉様との関係が都合の良いものになるのは我慢なりません。

拒否する理由などそれで十分でしょ？」

「うん・・・そうだよね。

ていうか、そうなると妨害しきりかなくちゃならないけど……まあ良いか。

所詮、赤の他人の些事だし。」

そもそもこの世界 자체が崩壊にせまつてゐるから止むを得ず、といふわけなのだ。

他の術を持たない私達にとつてみれば妨害する資格など無いだろ？
して、どうなるといつ話だ。

「つと、フロイとんが来たね。」
「・・・そのようですね。」

2人でのんびりと観戦をしていると、背後から魔法陣が出現。ズタぼろのフェイとんが転移してきた。

「やつほー。フェイとん。

「気分はどう?」

「ここは・・・」

「ここは君達のアジトから10キロは離れた場所かな。」

「・・・そとか。」

「フェイとんに渡しておいたお守りが作動したんだよ。消える寸前まで痛めつけられると私の元に来るよう。せつかくの友人を壊されるなんてたまたものじゃない。」

まあ、後から再生できるだらうじや。

「悪の秘密組織の幹部を捕まえて、友人とはね。」

「いやかな?」

「・・・別に。」

嬉しいよ。」

といつて笑うフェイとんは可愛かつた。

笑えたなら、もひとつ早くその顔を見せれば――『ふうつー?』

「浮気はダメ、絶対。」

「浮気じゃないし・・・いちいち本気で殴らないでくれる? キティ。痛みがないわけじゃないんだから。」

「可愛い女の子を見たらすぐに顔を紅くする姉様が悪い。」

「わ、悪いとは思うけど・・・あ、紅くなんてなつてたかしら?」

「なつてた。」

「・・・ごめんなさい。」

「・・・全く。」

しょ「うがないじゃないか。

私はキティとが始めてのキスで始めての彼女で妻なのだから。
そもそも女性と言つ物に耐性が弱いといつ部分をかんがみて欲しい
物である。

何度も言つけど、浮氣するつもつは微塵も灰燼もないといつことを
言つておぐ。

「ふふふ。

相変わらずだね、君達は。」

「ありがと。誉め言葉として受け取つておくわ。

・・・はい、これで体は“直つた”でしょ？」

いつぞやに貰つたグランドマスターキーの力を使って綺麗にフェイ
とんの体を直した。

「ハ、これは・・・ああ、そうか。

君にはグランドマスターキーをあげていたっけ。」

「そういえば、コレをくれたのはどうしてなの？」

計画が失敗すると聞かせた途端、これをくれる」とになつたのだけ
れども。

もともとはあげられないといったにも関わらずにだ。

「大した理由じゃないよ。」

「どうせ、フェイとんの性格からして後は見てるだけでしょ「う?

一度負けた以上、負けを認めないような三流とは違うだろ「う。」

ただ見てるだけなら暇つぶしがてら聞かせて欲しいな。」

と言ひと、一つため息を吐いて、フェイさんは口を開いた。

「……それもそうだね。
理由は本当にくだらない。

どうせキーがあつても負けるくらいなら、自分の力で踏ん張つてみ
たかった。

それだけさ。」

「……ふふふ。」

「滑稽に映つたかい？」

本当にフェイさんは好きだ。

「違うわ。

人間らしくて……可笑しかつたのよ。

今の貴方、とても素敵よ？」

「……あ、ありがとう。」

「生きてるって感じがする。

滑稽？

私からしたらとても立派なことだわ。

・・・私にはとても出来そうに無い。」

フェイとんつて原作で見てたときも思つてたんだけど、人形らしい
けど下手な人間よりも人間らしい。

今、少しだけ頬を紅くしているのもまた・・・ね。

私の交友でより人間らしくなつてきた気がする。
だからこの世界で一番目に好きなキャラだ。
もちろん一番にはなりえない。

一番はキティなので。

「それが僕にとつての生きがいだつたからだよ。

君だつてそれが生きがいだつたら・・・」

「・・・私の生きがいはキティといればそれだけで満たされるからね。

そんな壮大な目的を生きがいとする気持ちは分かりそうにないわね。

「

とか話していると。

ドガガガつと派手な音とともに造物主ライフメーカーが吹き飛んでいく。ナギがやつた様だ。

「・・・君の言つとおりだつたか。」「あら?

信じてなかつたの?」「いいや。

僕も結構頑張つたからね。

ナギの左腕をなんとか千切り取つたところでダウンさ。これも予測済みなのかな?」「

・・・おどりいた。

多少なりとも過去を変えるとは・・・この世界の住人には本来の歴史を変えることが出来ないはずだつたのだが。

私が関わつたからかな?

「・・・ふふ。

まさか。

それは貴方が頑張つた結果でしょ? 本来の歴史にあるはずが無いわ。」「

「・・・やうか。

それじゃ、僕はこれで。」

私の言葉を信じたか、流したのか。
表情を変えずに彼女は身を翻す。

「これから、どうするの?..」

「生き残りを回収してから、同志をまた集めるわ。
まずは主の復活からかな。」

「・・・たまには麻帆良にきてね。」

「一ヒーくらい」駆走するから。」

「近くに来た際は寄り寄せ貰つよ。」

また会おう。

金色天使・・・いや、アリス・スプリングフィールド。」

「ええ、フュイとん。」

体には氣をつけて。」

そのまま水のゲートでどこかへと飛んでいったフュイとん。
まずはテュナミスあたりとの合流だろうか?

「分かり合ってる風でお楽しみでしたね。」

お姉様。」

「そうでもない・・・ってキティ?」

涙目で頬をブクッと膨らませてプルプル震えるキティ。
なにやらリストみたいで可愛・・・じゃなくて。

「わ、私と言う物がありながら・・・他の女と仲良くおしゃべりば
っかり・・・私だって本当は姉様と一日中おしゃべりしていくいく

らいなのに……でも、ウザイと思われるだらうから自重してゐるに・・・ふぐ・・・ぐず・・・なおに。なのに・・・姉様つてば最近はちよくちよく念話であいつとばっかり話して・・・分かり合つた風に笑いあつて・・・ぐず・・・ふえ・・・ふえええええええんつ！！

わ、私を捨てちややだあつ！！

ねえさまああああああああああああああああああああああああ

「」

こ、この幼女。

な、泣きおつたつ！？

た、確かに最近はちよくちよく話してたけど・・・たまりに溜まつたストレスと、自分が捨てられたときの想像でもしたのだろうか？

「ちよ、ちよつと待ちなさい！！

そ、そんなわけないでしょつ！？」

「ふえええええええええんつ！！」

ああもう…！

私としたことが…！

この日のことで頭が一杯になつてしまつてたか…？

キティのこの状態に気づけないとは。

とにかく力強く抱きしめて、耳元でささやいた。

「私がキティを捨てるわけ無いでしょ？」

「ね、だから泣き止んで？」

「お願い。」

「ほ、本当？」

涙田で上田遣いでこうたずねてくるキティ。

「ごくり。

なんて可愛いんだ、キティはっ！！

といふか、いまさらだがキティは私が相手の場合は時々子供っぽくなるときがある。

今もそうだ。

自分を着飾ることなく私に自分を晒してくれてことこのじだらうが・・・そう思つと歯のこと愛しい。

全く、本当に可愛いんだから。
内面も仕草も見た目も。

「全く・・・いえ、オンナノヒトつてのは常にそういう不安を抱える物なのかもしないわね。

ごめんなさい。

そうね、今度からは家にいるときは常に抱き合つてるとかどう？
「べづ・・・そ、そうする。」

は？
え？

マジで？

ちょっとした冗談のつもりだったんだけど?
ま、まあ良いか。

常に抱き合いつつ過ごすのも・・・ふえへへへへへ。
ヤバイ。

幸せかもしれない。（注* 基本的に彼女達はバカップルです。）

周辺を包む魔力消失現象を尻目に抱き合つ2人だった。

決着から数日後。

オスティアの一段階目の崩落現象が始まる。

「本艦の周囲に強力な魔力消失現象。

このままでは・・・対抗呪紋塗装装甲もどれだけ持つか!??」

「泣き言はいらぬっ!!

あと数時間持たせるのだつーーー！」

アリカちゃんがそう怒鳴る。

「は、はつーーー！」

「最も的確に市民を救えるように最大効率で船を回せつーーー！

捨てて良い命は一つもないつーーー！

意地でも救い出せつーーー！」

世界を無に返す魔法陣。

それを無効化するためにアスナ姫のアンチマジックフィールド反魔力場を封印。

その代償が今の状況の原因である。

「キティ。」

「助けるのですか?」

「もちろん。

別に他の人間が死のうと生きようと構わないんだけど・・・アリカちゃんが助けたがってるからね。」

「・・・全く。

帰つたら、埋め合わせとしてデータをしてください。」

「もちろん。」

とこりか、普段からしてるんだから・・・交換条件にもならないよね。

「・・・ひみさいです。」

「妻だから旦那の手助けは当然つてところ？」

「ただで助けるのが恥ずかしいんでしょ？」

「変なところで照れやさんなんだから。」

「ち、違うもん！！」

「はいはい。」

「ち、違うんだからねつ！？」

「わかつたつてば。」

「それよりも通信するから静かにしててね？」

「ち、違うんですからねつ！？」

「はいはい・・・つと、アリカちゃん？
もしもし・・・聞こえますか？」

『お、おぬしらは？』

通信画面にアリカちゃんの顔が映る。

「私達も手伝うよ。」

『ならぬ。』

魔力消失現象のど真ん中ではおぬしたちとて無力な人間に過ぎん。
ナギたちにも言つたことであるが・・・』

「大丈夫だよ。」

私、一応ウエスペルタティア王国、王族の血筋だし。』

『な、なんじやとつ！？

ば、ばかなつ！？』

「まあまあ、とにかく私もこの反魔法場アンチマジックフィールドで動けるつてこと。キティはキティでもとの身体能力がバカ高いからね。とにかく私達に指示をお願い。」

『・・・分かった。』

無理はするでないぞ。

そして指示はクルトから聞いてくれ。』

「クルト君から？」

『妾も直接助けるからじや。』

『へ、陛下っ！？』

「おつけ。んじやま、クルト君よろしく。」

そうして助けることになつた結果、犠牲者は本当に少數になつた。のだが。

やはり少なからず死んだ人は出てしまったのである。

さらに数日後。

オスティアが消えたことによつてその原因を作つたとしてアリカちやんが捕まつたと言う。

もちろん、そんなことを許さない私としてはあちらにいるのは傀儡。
人造人間ホムンクルスだつたりする。

もちろん、ホムンクルスといえど生きているとこさか寝覚めが悪いので、中身はキティの人形。

すなわち、人造人間技術と人形作りの技術の合作肉人形。このときのために人造人間技術を盗んでおいたのである。

「助けてくれたことには感謝する。

じゃが・・・妾は死ななければなら——むぐ。」

アリカちゃんが“らしいこと”を言い出したが、人差し指で口を塞ぐ。

全く・・・」のバカ真面目な母親はこれだから・・・

「死ななければならぬい？」
バ力を言わないで。

死んで何になるのさ。

むしろ生きて何をかをするべきだよ。
死んでも何も生まない。

ナンセンス極まりないね。」

「・・・。」

「その通りだ。アリカ。

私としても・・・あれだ。

生きて欲しいと思わないでもないしな。

死ぬか生きるか。

どちらが辛いかといえばこの状況で生きると云つのは酷なのだろう
な。

だが、あえて云つ。

生きる。

オマエは生きるべきだ。

色々な意味でもな。

綺麗なままで生きていける人間など存在しないんだ。

泥にまみれても生き続ける。

それが人間と言う物だろう?」

私の言葉にキティも加わる。

少し顔が赤いのは云つまでも無い。

「・・・そうかもしだぬな。」

「何、私もいるし、姉様も付いている。
辛ければよりどころにでもすれば良い。
それくらいにはなれるしな。」

「キティも言うようになったのね。」

「う、うるさいです!!」

姉様！

茶化さないで下さい！！」

ナギが偽者アリカちゃんを助けるまで後一年。

適当にアリカちゃんと人助けをしながら時が熟すのを待つとしよう。

まずは・・・シルチス亞大陸にでも行って見ようかね？

16つ目 そろもんよー私は帰ってきた・・・故郷へ（前書き）

今回は一番短い話。

どうせなら前回に纏めればよかつたと思いつつ。

すばるんつ！

どがががんつ！！

とあちらこちらで轟音を鳴り響かせる紛争地域の一つ。

シルチス亞大陸。

そこで私達は人助け中である。

私とキティがアーティファクトを使つて全力で戦場をぶち壊し、上でドカバンドカバンと戦争をやりたがつてゐる連中を殺しまくり、適當な上をあてがつて徐々に徐々に安定させていこうと言つところである。

謀略、知略、策略とフル動員して戦場を駆け巡るうちに、そうした戦争をしようとする上の人間からは「血塗れ天使」^{ピングエラ・サアジジルス} Pingere sangue Angelus」と呼ばれ、戦場の被害者からは「戦争を終わらせる者」^{ベルム・クラウディア・ポビュリイ} Belum claudere populi」と称えられ、呼ばれるようにも。恥ずかしい2つ名がまた増えてしまった。

キティにはもともとの呼び名があり、原作とは違つて戦争で傷ついた人たちを慈しむ良き吸血鬼として闇の福音と呼ばれるようになつていく。

そしてアリカちゃんはアリカちゃんとナギたちに会いに行けばいいものを、そんな暇があるなら一人でも多くの人々を助けるのが私の責務だ！と言つて意地でも会おうとしない。

まあいいけどね。

効率から見ても合流するよりは別々に助けていったほうが良いし。

今日もやる」とは変わらない。

まずは兵士をすべて半殺しにして、その間にキティとアリカちゃんが死にそうな人たちを助けていく。

ちなみに兵士をわざわざ半殺しにするのは再度、紛争を起させるための力を削るためにある。

兵士に罪は無いと分かっていても「ればかりは仕方が無い。上を恨めと」言つ話である。

そもそもこの紛争 자체が「元老議員による自身の領土の確保」という意味合いが大きい。

今回の戦争で帝国と連合の両国が手を取り合い、表面的には同盟国となつた。

しかし元老議員はまだ世界をとることをあきらめていないのか周辺諸国の侵略を開始したのだ。

表面上は寄る辺も無く、盜賊へと身をやつすことしか出来ない廃したオスティアの元住人の捕獲。

ないしは殺害という名目で周辺諸国を闖歩し、適当な集落や村を「犯罪者の匿いの隠し有り」として占拠。

こうしてオスティアの國は滅びて尚、老害どもに利用されることになる。

ないしは不毛な戦争で失った豊かさを取り戻すべく、周辺諸国同士が少ない資源を巡つて戦争をし始める。

もちろんその戦火の代償はなんら罪の無い力の無い国民達の命であり、そうした国々を“守るため”に存在する兵士達の命でもある。作物を作るには時間と人手が必要だ。

しかしそれを待つていたら多くの民が餓死していく。

それを良しとしない追い詰められた人々は冷静な思考の出来ないまま、ただただ戦うばかり。

酷い状況へと化していく魔法世界である。

それをアリカちゃんが良しとするはずもない。

時には体の調子を崩しても人助けをするアリカちゃんを叱咤しつつ。

少しづつ、少しづつ私達は世界を癒していくのであった。

その世直し？の旅の途中で孤児を連れ添つているフェイとんとの挨拶もほどほどに。

あつといつ間に一年と言つて月日は経つて行く。

私としては・・・

なるほど。

キティは魂が出来てしまつた以上、アリカちゃん肉人形を回収したいといふことかな?

自分が作り出したものが無機物ならばともかく、意志を持つならば命と言つても過言ではない。

命を使い捨てにするようなことはしたくないのだろう。

それは私も同じだ。

この一年。頑張つてくれたことだしね。

人形には電子魔法で行動プログラムを打ち込んだだけだったはずなのだが、自立進化でもしたのかな。

なんにせよ、魂が宿つてしまつた以上見過^いすことはしない。

まあどうせナギが助け出すんだろうし、その後で返してもうえは良いか。

でも一応、見に行く」といろいろはしないとね。

本物のアリカちゃんならば世界の矛盾を修正する力によつて、確實に助かると断言できるが、偽アリカちゃんはアリカちゃんではない。間違つて噛み砕かれてしまう可能性が出てくる。

「では、処刑日には私達も行きましょうか。」

「私達?」

他にも誰かあるのか?」

「何を言つてるのさ、アリカちゃん。

ナギ達に決まつてゐるでしょ?」

「ナギたちが?」

「本氣で言つてるの?」

惚れた女を見捨てる分けないでしょ？あのナギが。

「ほ、ほ・・・ほれつ！？」

顔を真っ赤にして俯くアリカちゃん。
初心じやのう・・・ホホホ。

「というわけで久しぶりの再開と行きますか。」

「じゃ、じゃが妾はどんな顔で会えれば・・・」

「笑顔で良いでしょ？」

笑顔で。

「え、笑顔か・・・む、むつかしいのじゃ・・・」

何言ひてんの～」の鉄面皮仮面は。

最近では鉄面皮具合を忘れたかのよひに笑いまくるべせ。

「こつも姉様に向けるような笑顔をそのまま見せてやればいいだ
ろ？」

いや、惚れた男なのだからより可愛い笑顔が出てくるかも知れぬな
？」

「ほ、ほほ、惚れて等おらぬつー！」

「いい、いい。

そんなシンデレラは求めどらん。

時たま、悲しそうな顔して“・・・ナギ。”とか呟くほどには惚
れているのだろう？

といふが義務だなんだと金繰り捨てて、ひとつと念こに行けばよか
つたものを・・・

「ぎやあああつ！？」

び、びこでそれを聞いておったのじやつー！？」

「おや？

鎌かけただけだつたつもりだが……本当に眩いていたのか。
らぶらぶだな。

まあ私と姉様には劣るが。」

とかなんとかほのぼのとした日々を過ごしつつ。

処刑日近田。

告白をするナギ。

ところがそれは別人。

ゆえに肉人形は困惑していた。

少し頬を紅くしていたところを見ると魂の性別は女性なのねとか思
いながら私は笑いを堪えていた。

い、いやだつてね？

一世一代の告白を偽者にしかやつてるとか・・・ふくつ・・・

あはははははつ・・・

ダメだつ・・・

これは笑けるつ・・・

ふふふふふつ・・・

さすがのナギも緊張してるのがな！？

いつもなら偽者だと見分けられただろうつ・・・

あはははははつ・・・

もうだめ、死ぬ、笑い死ぬ。

「な、ナギ・・・」

ちなみにせつかくの告白なので意識だけはアリカちゃんを人形に憑依させてある。

女としてはこの告白を逃すのはちよつと可哀想だしね。

私にそんな気遣いはあるはずもなく、これを言い出したのがキティである。

「さて、これでめでたしめでたしつてところかな?
あ、キティ。

魂は回収したの?」

「しましたよ、姉様。

人形のほうはどうします?」

「爆発オチで良いんじゃない?」

「・・・さいですか。」

爆発させたあと、なにやら絶望感溢れる表情をしたナギの元にアリカちゃんを送り、種明かしをするとナギにぶん殴られた。
痛いじやない!?

いや、まあ怒るのも当然だけど。

その後は知つての通り。

こうして長い長い戦争は一先ずの決着が付いたのであつた。

そして時は流れ。

ネギ5歳。

そしてアリス5歳。

そう、私は故郷ウェールズに700年以上ぶりに帰ってきたのであつた。

年齢詐称薬によつて5歳児の姿で。

私は一度田の幼少期を過ごすことになる。

16つ目 そろもんよー私は帰ってきた・・・故郷へ（後書き）

主人公に付いた新たなる2つの名はラテン語表記。

ただ、確実に間違ってると思います。読み方もね。

ラテン語には性別と言う概念が存在し、これによつてちょいちょい名詞が変化するのです。

英語くらいだら?

と見くびつて真面目にラテン語の勉強をしようつと思つたら、予想以上に難しくて早々に挫折。

小説のネタ程度にそれを我慢してまで勉強しようとは思えず・・・

英語?

そんなチャチなモンじゃねえ。

もつと恐ろしいものの片鱗を感じたぜ・・・なにこれ怖いラテン語。

ふふふ。

私は帰ってきた！！

故郷であるウエールズに！！

とりあえずネギが生まれる前でも良いから適当に住居を作つておこうかなと思いつつ。

悪魔イベントの件も私が存在した時間軸には干渉出来ないとこういふらしいが、こうしてると別にできるんじやない？

と思えてくる。

いざとなつたら、キティがいるし。

と思っているんだ。

なんとまあ、驚いたことが起きてしまった。

“僕”が産まれる日。すなわち“僕”的誕生日。

“私”的体が“僕”に吸収されてしまったのだ。

スパ君によると同じ時間軸に同一の魂が存在すると言つ矛盾を世界が修正しようとした結果がこれだそうだ。

世界からすると「あれ？同一の人間が同じ時間軸に存在してる？変だなあ。まあいいや、体を一まとめにしちゃえば！」といったところだろう。

お茶目な世界である。

でも、これなら確実に悪魔の襲来事件をビリビリかできぬとこつ」とになるのでは？

と聞くと“出来る”とのこと。
出来なかつたんじやないの？
色々頭がこんがらがつてきた。

タイムワープ系はこうした矛盾が七面倒だから困る。

今は懐かしい金髪幼女神様の話を思い出してみると「一度存在した時間軸の歴史は変えられない」。と言つのは今のすでに700年生きた“私”のことであり、“僕”として産まれた今の時代の僕と融合した“融合後の私”とは違う。という屁理屈みたいなことなのだろう。

確かに“私”では無理だろう。
吸収されてしまうのだから。

と、小難しいことを言つてみたものの。
つまり体が若返って、歴史を変える機会を得たと思つて置けばいい
のである。
うん。

麻帆良でキティと夜の遊びに励んでいたのだが。
私がいきなり消えたことに驚き、泣くほど心配したキティがネカネ
姉さんの家にイキナリ入り込み、まだ赤子の僕を抱きしめたり・・・
というハプニングがあつたといつのは余談。

目が赤く腫れていたのはツッコまないのがエチケット。多分。
とりあえず年齢詐称薬を使う手間が省けたのでラッキーとでも思つ
ておこう。

それ以来、かなり強引にキティが私を引き取る形で現在はウェール
ズでキティとのんびり過ごしている。

ただ、人間だつたころの“僕”と融合したため、身体能力が弱体化
してしまつたようである。

鍛えなおすのが面倒という弊害が。大した弊害じやないけどね。
ゆつたりと鍛えなおす予定である。

少し鬱。体術のほうはセンスが無いんだよね。100年ほどかけてフェイとんに追いつくくらいのレベルだし。そりゃ一生懸命やれば多少は変わるとは思つたけど。

そんな日々を過いで、5歳になつた私。

ここからは本当の意味での未来を歩むことになる——とそれっぽく決めて言つた所で。

ネカネ姉さんとキティは近所のお友達という感じ。

いや、キティとしては「馴れ馴れしいのだあの女は……友達なんかではない……」と少し頬を赤めて言つてみると、友達なんだろう。

変なところでシンボレだ。

ちなみに五歳になるちょっと前くらいに起るはずだつた悪魔イベントはもちろん叩き潰させてもらつた。

前もつて張つていた結界魔法を発動させて召喚された瞬間に即、滅す。

召喚者はキティがくびり殺したのは言つまでも無い。

「姉様を狙うとは『ミムシ』もが……調子に乗るにもほどがあるたな。」

と怒り心頭の様子で狙つよつた上層部の方も突き止めて殺していた。

ちよつと甚振りすぎて暴れすぎたらしく、結果的に賞金額が上がつたのは仕方が無い。

せつかく紛争地帯での人助けで世間的に良く見られていたのに。キティ曰く血を浴びないように“遊ぶ”のが大変だったらしい。全て台無しである。

そこまでしなくても良かつたよ？

と言つと、「世間よりも・・・ね、姉様から良く見られるほうが万倍幸せです。」と嬉しいことを言つてくれる。

これまた恥ずかしいのか、もじもじしながら人差し指を付き合わせて言つもんだから可愛くて可愛くて。

殺されるかと思いました。萌え的な意味で。

「・・・もぐもぐ。さて、今田は何をしようかな。」

「今日は私どーテーの約束ですよ？」

「せうだっけ？

てこうかほほ毎日してない？・・・んぐ、もぐもぐ。」

「い、イヤですか？」

「まさか。天地がひっくり返つてもありえないわ。

安心して。ただ少し刺激がねえ・・・」ひつて田舎だから特に何も無いし。

むしろせっかくの一緒の時間がもつたといない？というか。

どうせならもつとラブラブできるような施設で・・・あ、そつか。

今日は遊園地で観覧車としやれ込みましょうか？

あ、でも時差で日本は今夜かな？遊園地やつてないわね。多分。」

「観覧車ですか。」

「そういえばまだ行つたこと無かつたわよね？

そうね・・・一言で言うならカツブルの聖地？私たちはカツブルというか夫婦だけど。ムードを作ることにかけては一番でゆえに王道な場所なの。・・・もぐもぐ。」

サンデーを読みつつチップスターを食べながら言う私。

どちらも日本の麻帆良にいるスパ君に送つてもらつたものだ。

残念ながらウエールズの片田舎たるここにはサンデーはもちろん、マガジンもチャンピオンもジャンプも置いてなかつた。

本当に残念。

ほほつ・・・桂馬も女装したか。結縁の時は結縁の時でよかつたけ
どやはり男の娘たるもの女装しなくては。桂馬も男の娘だと思つん
だよね。

そしてエルシイがんばった。

「さつきから何を言つてるんですか？姉様。」

「うん？

ああ、神のみが良いとこなの。・・・とりあえずテートに行きまし
ょうか。

今日は森で散歩？それとも湖でボート？

サンティーを閉じて、立ち上がる。

「どうりも・・・じゃダメですか？」

「んじゃどうちも行こうか。

今日はどんな服着ていいくの？」

「・・・今聞くのはどうなんですか？」

「ふふふ、それもそうね。それじゃ、家の少し先に行つたといひで
待ち合わせね？」

「はい、わかりました。」

同じ家にいるんだから、一緒にいけ？

誰だ、そんなデリカシーの無いことを言つヤツ! ほ

そんなんじゃモ・テ・な・い・NO!

チップスターをパリパリ食べつつ、待ち合わせポイントへ向かう。
それもどうなんだ？と思つかもしれないけどしょうがないでしょー！
ほつておくとシケつてしまふくなるんだからつー！

しばらく待つてみると、キティではない人が來た。

「どうしたの？ステラ。」

「どうしたの？じゃ無いでしょ。

・・・またあの悪者と一緒にいるの？」

「だからキティは悪者じゃないよ。」

「でも、賞金首だよ？」

「でもいいの。」

「う～、う～、そんなのわかんないよ！――！」

「そんなこと言われても・・・」

「バカッ！

アホッ！！

しんじやえつ！！

「そんな子供みたいなこと・・・って子供か。」

「子供扱いしないでつ！！」

さて、田の前にいる少女だがこの娘は幼馴染というヤツでステラと言つ、肩ほどの茶髪にクリツとしたお皿田が可愛らしい、将来は引く手数多である美少女である。

元々はアーニャのお母さん共々石化されるはずの娘だった。もちろん歴史は変わってるため、そんなことは無いのだが。

幼馴染のためかやけに距離感が近いのはともかく、キティに対しての悪感情は頂けない。

自分の妻を悪く言われて良い気分になる夫はない。
とはいって、相手は分別の付かない子供。

五歳児である。ここで怒るのは理不尽に過ぎぬというものだ。

そんな子供に悪にも正義にも色々あるとか、元老議員のドロドロした話をしてキティの弁護をするわけにもいかず。

キティ自身は気にしてないようだが、私としては好ましい人間一人

がいがみ合つてゐると言つ構図は好ましくない。

どうにかできればと思うのだが、キティとしては意外にもわりと優しく寛大な対応で応対していた。600年も生きれば幼児の1人や2人は気になくても当然だと思うがどうもそれとは違うっぽい。少し違和感を感じるのだが、それが何なのかはいまいち良く分からぬ。

と、考え事をするとステラはまだ何か話しかけていたらしく、結果的に無視した私が睨まれるという状況に。

あほおつ！－と言つて立ち去つていった。

子供とはかくも元気なものか。

いや、私も子供なんだけど。

「おまたせしました。姉様。」

「あ、うん。

今日も可愛いや、キティ。

・・・でも、キティが可愛くない日なんて無いわね。良く考えたら。

「ね、姉様。」

少し頬を染めてこちらを熱っぽく見つめてくるキティ。
身長が低いので見下ろされる形になるのが新鮮。

「どうかしましたか？」

「ん？ああ。

ステラとちょっと話してね。」

「待ち合わせ早々に他の女の話ですか。」

「あ、いや、・・・ごめんなさい。」

「冗談ですよ。」

幼児に嫉妬するほど子供ではありませんし・・・あの娘が私に絡む

のは悪者うんぬんよりも姉様を私に取られたのが気に食わないので
しうね。」

「・・・そ、その発想は無かつた。」

「・・・おバカですね、姉さまはやつぱり。」

なるほど。

やきもちから彼女はキティに絡んでいた。と？

「そうなると彼女は私を好きだつてことになるよね？」

「そうなりますね。」

「不思議ね。・・・こんな女の子然とした男を好きになるなんて。
姉様はカッコいい男の娘ですから。中身の魅力が女の子を寄せ付
けてるのかも知れないです。」

「あら？

分かつてるじゃない。さすが私の伴侶。」

「・・・冗談ですよ？」

「・・・酷いじゃない。私の伴侶。」

「真面目な話、何かきつかけでもあつたのでしう。心当たりは?
犬に襲われていたのを助けた・・・くらい?
あとは結構一緒にいるとか、虜めから守つたとか・・・」

「十分ですね。」

「これくらいで?」

「小さな時はそのくらいでも十分でしょ?」

「まあ・・・そうかもね。」

なんにせよその気持ちにはいたえることは出来ないんだけど。

「それじゃ、デートを開始です。」

「そうだね。・・・子供の体であることが残念だけど。」

「・・・私もまあ、そうです。」

「えつちなキティが見れないってのは少し残念。

腰碎けで頬をほんのりと朱に染めたキティの艶やかさときたらこれ

また――

「ア」はあつ！？

いいとこ!!

人間にもどつた今となつては魔族化しないんだから、下手したら死ぬよつ！？

「わ、わかつてます！

だから肋骨数本程度に抑えました！！

二十一
猶以林

今日も平和な日常の一コマであった。

17つ目 近況報告（後書き）

このまま一度目の幼少期もといメルティアナ魔法学校での話を書いていくか、時間を飛ばして原作に行くか。

悩み中。幼少期編をやるにしても短いと思います。Maybe.
アリスの立場を生徒か副担任かでも悩み中。

それと新しくオリジナルを勢いで書いてみました。
良ければよしなに。

うひむ・・・ネタが思い浮かばない。

次回は魔法世界へ・・・となるかも知れない。

さて、あれから一年経ち。メルディアナ魔法学校へと入学する年となり、トライウマ事件も失せた今となつてはネギもすこやかに育つていった。

そんなある日のこと。

修行、子供の時。と言えば。

昔、断念した修行法があった。

漫画「ドラゴンボール」で、主人公孫悟空がナメック星に向かう宇宙船の内部でやつていた修行法。

自分に対し必殺技を放つて、それを撃墜するという修行法。

それを今やつてみようという気になった。

昔やつたときはまるでダメな結果になつたが今の力があればそれも容易い、はず。

「今日は私の力も上がつてるしね。これくらいの魔法がいいかな？
萌える天空！！あ、間違えた。燃える天空を自分に向けて撃つ！！」

というわけで詠唱を開始する。わざわざ詠唱をするのはたまにするのもいいかなあと思つただけ。

「リストル・マステル・マギステル！

契約に従い我に従え

炎の霸王！！

来たれ浄化の炎

燃え盛る大剣！！

ほどばしれよソドムを焼きし火と硫黄
罪ありし者を死の塵に！！」

魔力のありつたけを込める。修行にならないからね。

『燃える天空!!』
ウーラニア フロゴーシス

空に向かつて撃ち放ち、転移で燃える天空の軌道に割り込む。

「 もう、 どうせ それ なれど こいつ ……」

・・・あ、これまでくない?」

眼前に迫る燃える天空。それはちよつとやそつとで防衛できるなん
ていうチャチなものではない。

だ。

攻撃と防御。得意な方というのは分かれるのが概ねの人間だろう。全く同じくらいという人は珍しいのではないだろうか？そしてそんな私は攻撃の方が俄然得意である。となるとどうなるかお分かりだろつか？

自身の防御力を遥かに超える莫大な攻撃力が目の前に。

うん。
死ねる。

燃え盛り、地面に墜落する私。

くそ。やはりサイヤ人の真似は出来ないのかつ！！

いや、防御力が攻撃力よりも勝つていれば可能なのだが・・・そう

考えるとこの特訓は防御力を鍛える特訓なのかも?と今更ながらに気づく私。

体の半分以上を炭化させながら、そんなことにようやく気づけた私であった。

ぶつちやけ、金髪幼女神からの真祖にせまる再生力を貰つてなかつたら人間に戻つた私はこれで死んでいた。

サイヤ人の真似事が死因とか。ははは、いや、笑えないわね。

家に帰るとキティから呆れた目で見られたのは『愛嬌』。

メルディアナ魔法学校。

ここに通うとまあ見えてくる見えてくる。

私を疎ましそうに見てくる大人が多いこと多いこと。

しかし、オステイア出身の人でもいるのだろうか?

私を好意的に見てくれる人が意外と多い。

アリカちゃんは災厄の女王と言つことで世間一般からはあまり良く思われてはいない。

そのためそのツケが私にも回つてきているのである。世界的な犯罪者である王女と英雄の子供というのでそういう人たちアクリションこそ起こさないものの、私を汚らわしい・・・貴族で言うところの妾腹の子を見るような目で見てくる。

唯一好感を持つていてる人たちは眞実を知つていて、メディアに踊らされないだけの信頼を持つていて、すなわちオステイア出身で実際にアリカ王女を見た人くらいであろう。

村ならばナギを慕つて集まつた人が多いため、そのナギの子供といふことで滅多にそんな視線にはさらされなかつたのだが・・・学校、

通わなければ良かつたかも知れない。

別にそうした有象無象の視線が気になると言つわけではなく、キティがちょっと殺してくる。とおつかいに行く気軽さで殺しに行きそうになるのを止めるのが結構疲れるのだ。

さすがにそれはまずいだろう。倫理的な意味ではなく証拠隠滅が面倒という意味で。

キティの犯罪歴が増えると困る。いずれクルト君が上り詰めたあたりにキティの賞金首を取り下げるのだからして。難易度が上がってしまうではないか。

ちなみにネギへの視線はだれかれと言わずに好意的。英雄と瓜二つだモノね。

中には私に直接「オマエは本当に英雄の子か?」的なことを回りくどく聞いてくる輩も居たりして、辟易とする毎日である。ちなみにその方には軽くおしおきをさせてもらつた。むちむんばれないように。

一生水虫が治らない呪いとか無い?と麻帆良で留守番をしているスパ君に電話で聞いてみると、さすが高性能な力カシ。

知っていたのでさつそく試してみた。

ちなみにであるが水虫の菌は爪や股間に寄生するそのので、そつちの方にも呪いをかけてやつた。

下手にぼつこぼつこにしちゃうよりも辛いおしおきであらわ。

甘んじて受けるがいい。くつくつくつ。

それからその教師は授業中に股間や足や手をぼりぼり搔く不潔な教師として学校の噂になつたといつ。

その後は知りません。

ちなみにこの呪いによる水虫は結構な確立で“伝染”する。

伝染の場合は呪いとしてではなく普通の水虫よりも少し弱い水虫で
すぐに治るが、その分伝染し易いという設定で呪いをかけた。

彼がしばらくしてクビになつたのは言わずもがな。彼のその後は誰
も知らない。

普通は触れてもそんなに簡単に移らないものらしいけどね。
それが搔いた手で触る、もしくは彼が触つたものを他の誰かが触る
と伝染。というわけで一時期水虫が学校で流行つたりもした。
テヘ、やりすぎちゃった。

正直、すまんかったと思つてます。

ちなみにキティや私、ネギ、ステラ、アーニャは私が体に纏うタイ
プの除菌魔法を開発していくので伝染はしてません。

才能の無駄遣いとは言わないでね？

そんなんある日のこと。

日本のように運動会があるようで、その運動会の日。

「今日は2人とも頑張つてね?
応援してるから。」

ネカネねーが私とネギを送り出す。

「大丈夫、お姉ちゃん!
僕頑張つてくるよー!」
「私も頑張るね。」

子供っぽく声のトーンを多少上げて応対。

ちなみにだけど、私は基本的に子供っぽく振舞つてる。
割と自然と出来るのは歳かしらね？肉体的に。

「姉さ・・・じゃなかつた。アリスはともかく坊やは勝て。アリスの弟の癖に負けたら私がじきじきに鍛えなおしてやる。」

「エヴァちゃん。応援をするにしてもそういう言い方だと、ネギが怯えちゃうわよ？」

「ふん、ネカネは甘いのだ。」

キティももちろん応援に来てる。

アリスはともかくって言い方だとなんか私だけエロヒイキされてるみたいだよね。

ほら、ネギはなんでアリスだけ?と少し不満そうな顔をしてる。小さな頃つて兄弟間は特に顎頬に敏感だからね~。するいが口癖になりがちではないだろ?か?

「ず、ずるいよ!

どうしてアリスは良いの!?

いつつもねうだよ!-エヴァンジョンジョンもんはアリスばっかり顎頬して・・・

「はつ。私に顎頬して欲しければ良い男になるんだな。

まあ、なつたとしても姉様・・・じゃなかつた。アリス以外に顎頬するつもりは無いが。」

「結局意味がないじゃないか!-!-

「そう、がなるな。坊や。もし一位を取れたなら日本のお菓子を分けてやるからな。」

「え、ほ、ほんとつ!-?」

「ああ、本当だ。」

と言つて、微笑みながらネギの頭をなでるキティを見るとやはり子供が欲しいなと思えてくる。

さて、どうしようか。理論的には可能なのだが私の・・・液が今は

手に入らないんだよね。

ちなみに人造人間の材料は血液、唾液、精液、膣液などで作る。エロいとか言わないでね。し、仕方ないじゃないつ……そういうものなんだからっ！！

要は私がそういうことが出来るようになつて、キティの・・・あ、あれに出して色々混ざり合つたものをそのまま使えば良いということになる。

ちなみにこれらの材料のどれか一つではなく、全て使つたほうがより魂的にも血筋的にも近しい人造人間が仕上がり易いことが分かつている。

もちろん6歳ボディでは不可能なことであるが。

「アリス、僕、アリスにも負けないからねっ！！」

「ん？ああ、もちろん私だって負けるつもりはないわよ？」

かといって勝つつもりもないけどね。

適当に2、3位くらいを取れれば十分。

あまり本気を出したら大人げが無さ過ぎる。

もちろん魔法学校の運動会なので魔法ありきである。

肉体的には年相応でも、魔力や気が使える魔法学校の運動会なら教師だろうと私には勝てないだろっし。

といつが、お菓子でずいぶんやる気を出すよねえ。

子供らしくて可愛い。

いや、子供か。

日本のお菓子が美味しいのもあるんだろうナビね。
こっちのお菓子は不味いし。

「おつと時間ね。

ネギ、行くわよ。いつてきます。」

「あ、うん。ネカネ姉ちゃん。いつてくるね。」

「いつてらつしゃい。」

「いつてらつしゃい、姉さ・・・アリス。」

二人に見送られて運動会に行くと、ステラとアーニャがやつてくる。

「ネギ、負けたら承知しないんだからね！」

とアーニャ。

「お、応援してあげるから勝ちなさいよ！..！」

とステラ。

この2人はまあ似ている。

ツンデレ気味という意味で。

ちょっとと一位を取ろうかな?という気になつた私は悪くないと思つわ。

結局のところ一位で落ち着き、一位はネギに譲つた。
ネギと一緒に走らなければ一位のつもりではあつたけどね。
キティにタオルで汗拭いてもらいながら、私はポカリを飲む。
アクエリースかポカリかで言えば、私はポカリ派なのだ。

「姉様、格好よかったです。」

「姉様つて言つちゃダメじやない。」

「あう・・・」

「ふふふ。」

2人きりのときはともかく明らかに年上であり、悪の魔法使いたる

キティが私の事を姉様と呼ぶのはあまり好ましくない。いつそのこと開き直つても構わないとは思うけどね。

平和な日々を満喫する私であった。
そんなある日のこと。

「それで？どうして襲ってきたのかしら？」

目の前にはズタボロの雑巾と化した学校職員。

最近私に対する視線が嫌が応にもうつとうしくなってきたのは知つていたが、ここまで直接的な手を取つてくるとは思いもよらなんだ。いや、多少は予想できただれども。

回想すると・・・いや、回想するまでも無いんだけどね。

災厄の子は死ぬべきだ！とか英雄の子は1人だけでよいとか叫びながら襲い掛かってきたのである。もちろん返り討ちである。

弱体化したとは言え、目の前のど三品にやられるほど弱くは無い。あれ？理由も聞くまでも無くない？

勝手に1人で暴走したといったところかしら？
とはいへ困ったわね。力を見せるつもりは無かつたのだけど。

うつむ、どうしよう？

記憶をイジつて捨てておけばいいか？それとも殺しちゃう？人気の無いところだから良かつたものの、万が一にでも人の目のあるところで彼みたいな人間に暴走されると困っちゃうな。

私は現在、魔法の才能が無い普通の少女を装つていて。

彼等本国の人間としては処刑にしたはずの女王の血縁者が生きてい

る」とはよろしくない。

なおかつその血縁者が英雄の血も受け継いでいるとなれば尚のこと世に出る可能性がある。英雄の膨大な魔力を備えてる可能性が高いからだ。

そうなれば必然的に有名になる可能性が大きくなり、その分魔法世界人に私の姿、名前が広まる。となれば後は言わずもがな。それと同じような理由でネギも狙われたわけだしね。

まあネギの場合は容姿がナギよりなので少し優先順位が低いけれども。

とにかく。

力量がばれるような行いは避けるべき。

かといって全くのオチこぼれは逆に注目を引くだらうからと適度に手を抜く程度に収めているのだが・・・その計画を破綻させてくれる可能性がここで出てきた。

いつそのこと悪魔事件を起こすだけ起こして私は死んだことにしちゃえば良かつたかもしれない。

少々考えなしだったかしらね？

「とりあえず、あなたは死んでおいてね。」

「ひいっ！？た、助けがひゅっ！？」

サギタマギ力で頭を貫く。

森に捨てておけば獸が食べて証拠も残りづらくなるだらう。転移で飛ばす。服は剥いで、持ち物も焼却処分である。

悪いけど田の前の彼を殺さないでいる理由は無い。

むしろ一度あつたことは「一度あるとも言ひつゝ、記憶をイジるだけではまた同じことが起こりかねない。

人格を変えると回りの人間に間違ひなくばれるだらうし、一番手っ取り早いのはやはり殺すということである。

まあ正当防衛だしアチラが恨む筋合にはあるまい。

まあ私の力を見せなければ良いというだけの話。

人目の付くところを行くときはキティに随伴してもらえばそれで解決する問題だし、それで良しとしましょうか。

時々そんなちよつと物騒な日々も過ごしつつ。

19つ目 DOGENZA（前書き）

なぜこんな話になつたんだろうか？

最近は新しく作ったオリジナルとかでこいつを無視して、久々の投稿だからか！？ w w

なんにせよ後半は意図してやつたものじゃないんじやあ。

ぐつもーにーんつ！

唐突でどうかと思つけど、現在私たちはヘラス帝国のテオドラ陛下もといテオちゃんのところに遊びに来ています。遊びに、というよりはお仕事の依頼で来たんだけどね。

「姉様、ちよろちよろされると困ります。」

「まあまあ、そういうわづ。」

戦争が終わって、約16年近く。

戦争の傷跡は全て潰え、というと語弊があるが戦争で受けた傷は着実に癒えて殆ど見られなくなっていた。

なおかつ戦争で各国が躍起になつていていた軍用技術の発展が、民間にも十二分に還元され始めたようで、戦争前と後では町並みが結構変わっていた。

このヘラス帝国も例外ではない。

それが新鮮で、飲食店のメニューや服飾屋など軍とは一軒無関係なものから、魔法使い仕様の遊園地なども大分様変わりしているようである。

これで落ち着いていこうというのが土台無理な話だらう。

昔も今も人々の生活様式の変わりを田で見て、感じて、ウキウキワクワクするのにはやはり趣味と言つてもいいかもしねない。

「は、恥ずかしいなあ もう！」

「恥ずかしがつてるキティも可愛いよーー！」

「つーばかな」と言つてないで、早くテオドラのところに行きますよーー！」

別に恥ずかしがる必要なんて無いと思つけどな。傍から見たら、遠路はるばる子供だけで旅行してきた姉妹が、始めて見る街に田を奪われて、いふと言う微笑ましい光景でしかないはずなのに。

ちなみに特別年齢詐称薬は使つてない。

私は五歳児然とした姿で、黒髪に。その程度である。

「田舎者丸出しながら恥ずかしいんです！」

「別に田舎者なんだから良いと思うのだけど……まあいいわ。

あ、見て見て！ キティ！

ナギ団子だつて！ ！ 勝手に名前を借りて商売とか、訴えられないのかしらね！ ？

「その厚顔無恥さに痺れる憧れのう。といつわけでもないけど……」「姉様、年相応の振る舞いですけど、私からしたら違和感が……。どうにかなりませんか？」

「どうにかつて……言われても……良いよ。そこまで言ひなら自重するから。」

「あ、いえ、違和感があるだけで、恥ずかしがつての私をからかうための演技とかじやなかつたなら別に。……可愛いですし。」

「わ、私をなんだと思ってるのかな？」

からかうためだけに演技とか。

そんな性悪だと思われてるなんて。

そんなこと一々割とするかもしれない。といふかしたことあったね。うん。

「唯一無二の愛しい人……です。」

「さうはづつー！」

ふ、不意打ちドストレーントが私のハートにすつとやらこくつ……

単なる冗談の掛け合いでの中に本気を混ぜ込んでくる。

なおかつ顔を真っ赤にしながらそんなことをのたまつキティつ！－！

あはあつ！？

か、かわ、かわいいつ！－！

「ま、まつたぐ・・・私を幸福死させらる氣かしら？

可愛さが天元突破。マジ自重。」

「か、可愛くないもん！－！」

「げはあつ！－！」

も、もん－－－だとつ！－？

普段ならともかく、すでにグロッキー状態のこの私にこの「もん」は－－死あるのみ。

「ふつ、計画通り。」

「なつ！－？」

き、キティ、お、恐ろしき子。

このまでを狙つていたのね！－？」

顔を真っ赤にしつつ、ニヤリとしたキティ。

いつのまにこんな高等テクニックを！－！

まあ、計画通りといいつつも顔が真っ赤なところもまたエクセレンツなんだけど！－！

「こ、こほん。とにかく、早く行きましょう。

観光なら後にしないと・・・約束の時間を過ぎてしまりますよ。」

「はいはい。

口づぬさい妻だわ。」

「だ、だらしない夫を引っ張るのも妻の役目です。」

「ふふ、わうね。」

そのままヘルラス帝国の首都、ヘルラスを歩いているとむむむー・
なにやら人ごみがーー！
喧嘩のようである。

どれだけ、と野次馬根性丸出しで覗いて見るとそこには——テオ
ちんがいらっしゃった。

なんでやねん。

「姉様……話しかけますか？」

「いや、スルーしましょ。知り合いだと思われたくない。」

どうやらお店にクレームをつけているようである。

それを見て他の人たちが何ぞや？とばかりにザワザワ。

どうも、飲食店に文句を言つてこられるようで食事に虫が入っていたとか。

まあそれはクレームを付けるだろうが、もつらしゃり方と言つのを
学んで欲しい。

本来ならこんなに野次馬を集めるとは無い。

彼女は軽く変装をしてるのでヘルラス帝国王女だということは分から
ないし、護衛らしき人もいない。

特別目立つ要素はないのである。

強いて言えば、変装して尚靈まないその可愛さであつ。いや、キ
ティには劣るが。それだって野次馬をつくるほどの理由には無い。
さて、なぜそんな「まあ目立つだらうけど普通にクレームを言つだ
けのお客さん」的な彼女がここまで野次馬を集めてしまったのか?
そつ。なぜに店員さん約10名を往来で土下座させる必要があるの
だろうか。

かわいそうに。

まさしく公開処刑である。
まあ虫の混入を許したといつことで些か行き過ぎでも、妥当な結果
とも言えるかもしだれないが。
と、言つよりだ。

どうも彼らの話を聞いていると途中でテオちんだといつことがばれ
たらしく、彼女の怒りを静めてもらいたいがために率先して土下座
をしているようだ。そりやそうだろう。王女の不評を買つたとなれば
——というか王女に差し出した料理に飲食店にあるまじきミス
をしてしまつたとなればこの店は最早潰れるしかない。
下手をすれば打ち首獄門　　ということもありえる。いや、さす
がに無いだらうけど。

帰ろうとするテオちんを引き止めて、わざわざ土下座をして誠心誠
意謝つてゐる。と状況を把握したところで。

テオちんも天下の往来で土下座させてるとなると恥ずかしいのか、
顔を上げておくれ！と顔を真つ赤にして叫んでいるのだが、いかん
せん店員達はそんな！とか恐れ多い！…とかで聞く耳を持たない。

「どうあえず、先に王宮の方へ行きましょうか。」

キティが嘆息してそう提案する。

「そうね。キティの言つとおりだわ。

王宮のほうで待たせてもらいましょう。・・・めんどりやつだし。

とスルーするよ的なことを言つてしまつたことがフラグになつたの
か。

テオちんがオロオロするがてらこちらに視線が合わさる。

テオさんは10年来の親友に会つたときのような良い笑顔を浮かべ

て「ひらり」とくる。

「エヴァアッ！－！来ておつたのか－！」

色々と積もる話もあるのじゃがとりあえず、助けてくれ－－」

「エヴァア？」

「誰ですか？」

それ？私はフレデリカ・フォラッセンと言つしがない貴族ですよ。私は忙しいのでこれにて。」

「だ、誰じゃ！？それは－－露骨に避けるの、つー－？」

とぼけたキティに突つ込むテオちゃん。

私がそんなテオちんに説明してあげた。

「説明しよう。

フレデリカ・フォラッセンとは田の前の一見、神が作ったと思われるほどの美と可愛さが内包された、他の追随を許さない可憐な少女であるが、それは世を忍ぶ仮の名。

その実体はスライム的な何かである－－

触手的なプレイも出来るよ－－！」

「ひ、卑猥じや－－！」

卑猥な生き物がここにある！？」

「ね、姉様つ－－！」

「「」はぶつ－？」

顔を赤くしたキティに殴られた。

痛いです。

といふか触手プレイも良いかも。

キティを－－－ぐへへへ。がはぶつ！？

邪な波動を感じしたのか、キティがまたもや殴りかかってきた。ごめんなさい。冗談です。4割8分くらい。

あ、今ふとジビツと来たのだが、ゴーストスイーパー的な意味での
横島忠夫の横島の由来は邪から来るのかもしれない。

だからこそみんなに助平なのか、横島君は！－

キティの割かし本気パンチで死に掛けてる私を一警して、キティは話を続ける。

「どうあえず、私に土下座をせて悦に入る変態の知り合にはおらん。」

「別に妾がさせてるわけではないんじゃつ－－

いやつらが勝手に－－ひいつ－？」

いつの間にかテオちゃんが移動していたことに気づいた店員10名は頭を下げて土下座した姿勢のままこちらにサササッと寄つて来た。

ついとばかりに可愛らしい悲鳴をあげるテオちゃん。

なんかすつこいショールな画だ。

土下座したままこちらに走り寄つて？ たので普通にキモイ。

私も不覚ながら悲鳴をあげかけた。

「い、今のはDOGENZA歩方・・・か。ここつら・・・まさか。

と戦慄した表情をとつてるキティ。

バトル漫画で言つといひの身のこなしを見て「いやつら・・・悔れん－」的な空氣を出してくるキティには申し訳ないのだが、目の前のアレを見てとなるとむしろ滑稽に思つる。

「ね、姉様、もしかしてですが・・・ここつらDOGENZA忍法を使う甲賀の忍かもしだせません。」

「くふつ－」

「ひそり耳打ちをしてくるキティ。」

噴出しかけた私は悪くないと思う。

なんだよ、DOGEZA 忍法って。なんだよ、DOGEZA を使う甲賀の忍って。

そんな忍見たくないよ。というかただただ嘲笑物だよー！キティが至極真面目にそんなことを言つてるのもまた笑いを加速させる。

NARUTO の世界にだつていなーいよー！
とこりか、出オチ過ぎるーー！
どうやつて戦うんだよー！

「彼等はその見事なまでの土下座技術・・・先ほど見せたDOGEZA 歩方を始めとして、ジャンピングDOGEZA、スライディングDOGEZA、バク転DOGEZA、回転昇竜DOGEZA、爆散DOGEZA、ガチムチDOGEZA と多くの技で相手を居たたまれなくするということにおいては一流の技術を持つらしいです。」

むしろーー見てみたんだけど。

なんだよ、爆散DOGEZAって。

死んで詫びますってこと? でも爆散しながらDOGEZAって無理じゃないの?

それにガチムチDOGEZAってなんなのーー！

あれ?

あれなの?

DOGEZA と同時に服がはじけ飛ぶとか?

「もともとは東方の武家の一つにあつたDOGEZA 流が広まり、現代では10ほどの流派に派生し、発展しているようです。中には土下座の際の頭を下げる動作を極めて、それを攻撃に転化したツワモノもいるとか。達人・・・いえ、DOGEZA 流では達人ではなく職人と言つそうですからーーーDOGEZA 職人によつて

行われるその一撃は生身でありながら、竜すりを一撃で屠るやうです。」

「生身つて氣や魔力の強化無し? 何? その超ガチムチ野郎は。

ラカン君だつて出来ないよ? 多分。

「なぜ、そんなことを知ってるのよ。」

「・・・昔、珍妙なボケ老人から鉄扇術を習つた際に酒の肴として聞かせて貰つた話です。ついでに軽く齧つてたらしく、DOGEN A歩方も見せてもらいました。・・・そのときはテオドリや今の姉様と同じようなリアクションでしたよ。私も。普通にじん引きでした。」

「なるほど・・・ね。」

「・・・その時は半信半疑だつたのですけど・・・信じざるを得ないようです。姉様も分かるでしょう?」

「・・・分かつてしまふわね。残念ながら。」

達人と言つのは見ただけで武術たる物が武術であるかどうかが分かる。

もちろん、現在の私は貧弱極まりないのだが、今までの経験もとい記憶が消えるわけでもなし。

とりあえず目利きだけならば普通の達人と遜色はない。その私の眼力が囁いているのである。

「これは完成された実践的な武術」だと。

正直、今の身のこなしを見るに瞬動レベルでのDOGEN A歩方とやらが可能なはずなのである。

「・・・すつごく見てみたいのだが。

「なんというか、知的好奇心が沸いてきて止まらないの。負けた氣がするのはなぜかしらね。」

「・・・私も同感です。」

そんな話をしてる間、テオさんはただただオロオロしてDOGEN Aをしてる店員達に申し訳なさそうにしていた。

ちなみに、であるが。

テオさんが虫が入っていると勘違いした料理だが、もともとそういう料理だと言う。盛られた料理の天辺に油でカリッと上げたチャグロオオサソリという種類を飾り付ける——と言つても食べられる上に美味しいらしいが——いわば彼等の一族で伝わる伝統的な料理であり、むしろ悪いのはテオちんだつたということである。

が、ヘラスには食虫文化が殆ど定着しておらず、食虫と言つことにについては日本人並みの忌避感を持つために致し方ないと見える。むしろそんなヘラスで昆虫料理を出した彼らの下調べ不足と言える。とりあえず、困っているテオさんを下げて、彼らを宥め、老婆心がてらこんどは連合国で販売してはどうか?と提案したところ、彼等は私たちにお礼を言つてそのまま連合国へ向かつた。
連合国は旧世界の各国から色々な人種が集まつてくるので昆虫料理などはむしろポピュラーなほうなのである。

ちなみにテオさんは自分が悪い（彼らも悪いと言えば悪いのだが）ということ改めてその料理を食べたところ、凄く美味しかつたとのこと。

連合国へ送ったのは失敗じゃな。と苦笑していた。

ちなみにお礼だとつひとで私たちも「相伴に預かつたところ、実際に美味しかつた。

サソリとか美味でございました。

ちなみに私たちに虫に対する忌避感は無い。

自分の体の体積の100分の1があれば良い程度の小動物に何を恐れることがあるというのか、むしろこれからしばらくはサソリがご飯のおかずになるだろう。

連合国へ移動する際に食材などは易く買ire取らせもらつたので、その中にはサソリもいる。

1匹だけペットとして買つことににして、残りは食べることに。

ちなみにだが、昆虫食と言つのは栄養価も高いことをご存知だらうか？

概ねの昆虫は丸ごと食べるため、哺乳類で言つところのビタミンなどが豊富な内臓の類も全て摂取できるからである。

なおかつ余分な脂肪などは外骨格に含まれるキチン質が吸收、排出してくれるというのだから優れもの。

中々優れた食材といえるだろう。

ついでに言えば繁殖サイクルが短いので、食べられる大きさになるまでに時間がかかるないと言つ生産性の良さもある。

などなど、いつぞやの時にスパ君から教えて貰つた豆知識を反芻しつつ。

私たちはテオちゃんの住むヘラス帝王国へ来たのだった。

19つ目 DOGEZA（後書き）

関係ないですが、体温が一度落ちると新陳代謝が10%以上落ちるため、脂肪や糖の消費が一度落ちるだけで減るそうです。免疫力も30近く落ちるとか。凄い数値ですよね。

そのため、冷え性の人は太り易いらしいです。

ちなみに癌細胞なども低体温時に活発化するらしいとのこと。

体温を上げるためにちゃんとした塩分摂取や食事が大事だとか。皆さん、健康には気をつけてくださいね。

20つ目 ご主人様にやん（前書き）

地味に続きを待っていたと言つ感想を頂き、有頂天になつた私はさ
つそく続きを投稿するのであつた。

「ヒカル、お主は誰じゃ？」

とテオちゃんの疑問の声。

「こは王宮、テオちゃんの私室である。

「私を『存じない・・・』と？」

「むしろ、なぜ『存知だと思つたの』じゃ！？」

「この魔法少女的な何かを知らないとは、キサマ、もぐりであるなつ！」

「むしろ帝国皇后に平氣でタメ口なお主の方がもぐりじゃないかのうつ！？てか、魔法少女って何じゃつ！？」

「お邪魔女ドレミか魔法少女リリカルなのは、魔法少女まどか マギカ。さあどれでしよう！？」

「姉様、プリキュアは入らないのか？」

「プリキュアは——ギリギリアウトじゃないかしら。なんというか、魔法と言うよりは氣を使う普通のバトル漫画的な？少女漫画風ドラゴンボール的な？初代の必殺技のプリキュアマークルスクリューとか、もう合体したかめはめ波じゃないの。もしくはベジットが使うファイナルかめはめ波？バトルも、魔法を使うと言つよりは肉弾戦がままあるし。殴り合えるアレを魔法少女とは私は認めない。」「そうでしょうか？私としてはあれも魔法少女の範疇に入れても良いと思いますよ？」

ほら、魔法少女まどか マギカのほむらとか爆弾調合しちゃつたりしてますし。まだかなんて普通に引けないですか。引けるような筋肉の付き方なんてしてないのに——どこのアマゾネスだと思います。それなら比べたら可愛い方だと思いますよ。」「それこそ魔法的な何かで補助してるのでしょう？」

でないと一般人が爆弾調合とか無理でしょうに。例え知識があろう二材料の二三の器具の二三的な意味だ。呂ウ^{レウ}電法の品^{ヒン}二^ニから玄^{クニ}二

くのにそれほど力が必要ないってことじゃないの?」

「だからこそ、プリキュアも魔法的なにかで肉弾戦が出来るんじ
やないんですか。

「魔法使いが魔力で肉体を強化するようなものです。」
よって魔法少女の範疇に入れても良いと思います。

「え――でもなあ。なんかプリキコ

ではプリキュアってのは――――

ハセガワ・アーティスト・コレクション

何を話しだるつ！何をつ！！

今はそれこり盡をしてもゐるのではないか――」

テキスト編集ツール

「ん？ あ、うむ。

アリスとエヴァがいつぞやに戦場でそれの、いすぶれへとまつんじやつたかの？

あれを見て多少興味が沸いたので、旧世界からDVDをレンタルして見たのじゃ。

子供向けながら作画がしっかりしていて……同時に放送されたらしい某サンデーコミックスのアニメの作画に比べたら、天と地ほどの差があったのう。ソレは純粋なバトル漫画じゃと言つのに……あのザルガのしょぼさと来たら……妾の方で予算をひねり出して、リメイクし、帝国全国に放映したいほどの哀れさじやつたぞ。」「て、テオちん。そういうことは、あ、あまり言つたらダメだよ、

そういひのば。

「う、うむ、分かつてはあるのだが、あれは物申すしか——って
だからそんな話ではなくつ——！」

h?

姉様？「

おや、やつと氣づいたか。
氣づくの遅いぞお、テオちゃんや。

「その・・・すまんの。

一つお主の名前を聞いても構わんかの？」

「私の名はルルーシュ・ヴィ・ブルタニアーンー！
ギアスの名の下に命ずるー！」

テオちゃんよ！ その尊大口調キャラをやめたまえつーー！

「きや、キャラじやないわあああああーー！」

といふか、真面目に答えいつーー！」

「あうつーー！」

顔を真っ赤にしたテオさんにチヨップされた。
意外と図星？

そして、すぐに押し黙ると私をじーっと見て、口を開いた。

「もしかして思うが、妾の記憶に違ひ無ければエヴァが姉様と呼ぶ
人間は1人しか知らぬ。

が、お主はどう見ても・・・あれじゃ。どつかの馬鹿たちの子供
にしか見えぬ。

魔力の質やその分かれている特徴的な眉毛。黒髪は・・・魔法で染
めてるようじやのう。

というかそもそも、今回呼んだのはアリス・“マクダウェル”とH
ヴァンジエリンのみ。

はて・・・これはどういうことかのう?

お主は——アリス・“スプリングフィールド”で間違いない・・・
と考えて良いのか?」

何か、間違つていて欲しいと重つ感じの意志が見て取れるセリフである。

「間違いないよ？」

「・・・はあ。あれじゃ、とつあえずそこからいりこつたことなか聞いてよいか？」

「説明長こよ？」

「かくかくしかじかで済ませておくれ。」

「かくかくしかじか。」

「なるほど。そういうことか。って分かるかつ……ど回答……。」

「て、テオちんが言つたのにっ！？」

「マジでやるとほ思つたらんかったわつ……。」[冗談に決まつとひびつ
！？]

「もういいよ、意地でもそれで済ませるからー。」

「かくかくしかじか！？」

「だから通じんといひつけ！……って通じたつー。」

テオちんは一瞬、顔を顰めたあとに、得心の得た顔をした。

ふつー！

実は。

こんなこともあらうかとつー！

スペ君から“かくかくしかじか”の言葉のみで相手に対しても自身の意図した記憶を見せることが出来る魔法を教えてもらつていたのであるー！

「なんといつ無駄な才能。なんといひ都合主義か。」

「讃め言葉として受け取つておへよ。」

「・・・アホっぽいですね。2人とも。」

さてはて。

そんなことはさておき。

テオちゃんから話を聞くと、テオちゃんの頼みとは些か面倒なことだった。

簡潔に結論から述べるならば、王宮に勤める騎士の教育をして欲しい。とのこと。

どうも先の戦争で使える人間のほとんどは死に果ててしまつたらしく、現在では下の者に教育できるほどの腕利きの人間があまり居ないらしい。

まあそれはそうだろう。

新兵に訓練を行うレベルの兵ともなると大抵は部隊長、もしくは副隊長と言つた指揮に関わる役職に付くことが多い。

これは兵の力量や戦法を普段の訓練から理解してゐる教官の立場に居る彼等だからこそより相応しい役職とも言える。

だがしかし、戦争では腕や足を切るよりも先に頭を潰す。すなわち指揮系統を司る隊長職と言うのはまず真っ先に狙われる役職であり・・・そのために死に易いとも言えた。

非公式なれど中立のアリアドネー騎士団総長や連合の元老院議員リカード、テオさんは仲が良いので、戦争にはなりづらくはある。あるにはあるが、なつたときの場合を考えるのが国といつものであり・・・政治なのである。

はてさて。何が言いたいかと言えば、単純な話、このままだと國の守りの要である兵士が貧弱なのは有事の際に不味いよ！早くなんとかしないと！！でも早くするための良い教官が居ないよ！？

どうしよう！？現存の兵が教官レベルまでに仕上がるのに、どこからか教官を引っ張るとそのまま自力で頑張らせるのではもちろん、かかる時間が大幅に違う。後者は万が一に備えるともちろんダメ！となればどこからか暇そうで教官が出来るだけの人間が必要である！！でも、戦争が終わり、物価が高まつてゐる戦争後では安定した職を、ないしは高給職を求めるのが普通。そのために能力のある人

材がプレー太郎であるはずも無く！！（今現在は徐々に物価が戦争前に戻り始める。が、まだまだ時間はかかる。）

嗚呼、どうしよう！！と思つていた矢先に暇そうで強さでは文句がない、むしろ英雄達を普通に倒せそうなくらいの力量を持つ真祖の吸血鬼とそれと一緒にいる奇人、バタフライ仮面。

彼等に頼もうじゃないか。というわけで、今回の話。

白羽の矢が私たちに刺さったと言つわけである。

「どうじゃ？

アリス、エヴァ。十二分に礼はある。

頼まれてはくれぬかのう？」

「ええ～でもなあ、私たちのラブランタイムが減るつてことじゃない？

それに兵士さんも私たちみたいなちびっ子にあーだこーだ言われるのは好かないと思うけど？」

「私も姉様の意見に同感だ。・・・らぶらぶはともかく。

そもそも国の「こたごたくら」い国で解決して見せる。

仮に戦争が再開されても、それは貴様らがその程度だつたと言つだけの話。

弱者は淘汰される。これは自然界はもちろん、人間社会でも言える事だ。」

「じゃからこ、こうして頼つておるのじやろつ？

弱者が自身の身を守るために強者の力を借りてはいかん、といふルールはどこにもありはせぬ。さらに言えば、もちろんのことただではない。」

「金ならば要らんぞ？

私や姉様はすでに土地持ちだ。

マホラが焦土にでも化さん限り、私たちは金では動かん。

そもそも私たちに金解決できる類の物欲は薄いからな。・・・姉様と一緒に居られることが一番の望みなのだから。それを阻害される

よつな頼みなど・・・「

後半はボソッと言つたようだけど、私にはちゃんと聞こえますよ…

「ハハハハハ。わたくしのよつなしとは分かつておるわ。

ゆえに考えた。

いや正直言えはアリアが子供はなしてるとは思れなかつたから
のう。少々報酬選びに失敗したかと肝を冷やしたが・・・おう、来
たか。こちらへ。」

ノックと同時にメイドさんがやつてきた。

関係ないけど、キテイはアイト服着せてーーーご主人様と呟はせるのもーーーおっといけない、鼻血が出てきてしまつた。

と云ふが、報酬がハンディメイドの一点物の可愛らしさメイド服だつてう今のは一つの感情で、ソレに付いてしまっておる。

今まで漫畫で何度かメイエ服は見てきたが、今更メイエ服は見てられない。

近くの服屋に売つて無いだろうか？

それとも非売品? だとしたらそれを報酬に・・・嗚呼、でも、キ元イとの時間が――いやしかし、訓練中も常に一緒に居れば・・・

「ほれ、何を呆けておる。メイドを見とらんで、こつちを見んかい。

「ね、姉様っ！！

その辺のメイドに手をつけるなんてのは許しませんよー！」

ぐりんと凄い勢いでこちらを睨んできたキティがちょっと怖い。
が、無駄な心配で、ハーーーー！

「キティにメイド服を着させてね」「つけで、『主人様、今日はキティが夜のご奉仕をさせてもらいますニヤン！』とか言われた
ら——ごはつ——！」

「ね、姉様っ！？な、何を言つてゐるんですかつ——？」

顔を真っ赤にして俯くキティ。

私は私で想像しただけだというのに、想像上のキティの可愛さだけで、つい吐血してしまった。

やばい、マジで可愛い。

凄い、見たい。

見たいよ、見た過ぎるつ——！

というか、むしろ襲いたい。

夜のご奉仕だつて！？

望むところだよつ——！

「お主等……ちょっとキモイぞ。」

おつと鼻息が荒くなつていたのかも。

テオちんが軽く引いていた。

そしてキティもキティでトリップしていた。「姉様のためなら——あ、でも——そのまま襲われたら何と言えば——『主人様、優しくしてニヤン？いや、でもそれではありきたり過ぎて——』などと言つていた。

ごほん。

気を取り直して。

「で、報酬つて何なの？」

「つむ。

「れじや。」

と言つてテオちゃんから差し出されたのは一見何の変哲も無くメイド服。

このタイミングでメイド服とな。

彼女は妖怪さとりか？

ちなみにせとりとは心が読めるとかいつ妖怪の名前らしい。

良くなは知らん。

「まあお主等が夜の・・・あれじや、その、のう？
そういう行為はして居るとは知つておったのでな？」

と言つて、テオさんは真つ赤である。

「なるほど。主従プレイ用に、と？」

「つ、うむ。なんといつてもこれは一種の魔法具での？
俗に言つ・・・よ、夜の魔法がかかつてあるのじや。

女性が着たならば絶頂に至り易く、締め付けが・・・と言つた品で、
男性ならば精力増強、長さ堅さが・・・と言つた具合で・・・」

「男性にも使えるのにメイド服とは何事か、とシソ「こんだらダメな
のかな？」

「ひ、うむ、まあとにかく。

おじびり夫婦ならば夜の心強いお供だ。夫婦仲が冷めてきたのなら、
一度これを使って若い頃を思い出せりやう・・・と夫婦のため
のものなのじやが、今回。

おぞらしくお主達ことつて「これは再興の一品となると思つやっ。

「それはどうしてだ？」

とキティが聞く。

「アリスは子供に戻った、と言つたな？」

となればエヴァ。あつちの方も長じへし無沙汰であるつへ。」

「うぐ。」

ああ、やつぱり。

キティもちょっと欲求不満氣味なのかな。

解消させてあげたいとは思うけど・・・子供の体じゅねえ。

「別にそんなもの必要はない。私は姉様の愛だけで十一分に満足だからな。」

「とはいえ、多少は性欲を持て余すこともあるじゅうつへ。だが、そんな問題もこれを使えば片付くのじゅ。」

「な、なんだとつー?」

え、何?どうこいつ!?

キティの食いつきも全然違つ。

「あ、勘違いしないで下さい、姉様!! 別に、その、だから・・・」

「わかつてゐつてば。夜のアレをしたあとの多幸感が癖になつたんでしょう?」

むしろ五年以上も我慢させて悪かつたわね。」

「あ、いえ・・・その・・・姉様は悪くありませんし。」

真祖は吸血鬼ゆえに性欲と言つるのは普通の人間に比べてかなり弱い。そんなキティがここまで望んでる様子を見せるのは夜の行為を通じて抱き合つたり、なんだとすることでお互いに一緒にいるということをより強く実感できるからだねつ。

ただ気持ちいいだけのソレと愛し合つもの回十のソレでは動機も結果もまるで違うものに変わると血のことに他ならない。

「それで、その言ごと回しから察するに、私が今すぐやつした行為が出来るようになつたことなのね?」

ところ私の言葉に一矢りとこゝの擬音語が似合つよつた笑みを浮かべ、口を開くテオちゃん。

顔が真っ赤なのがカッコが付かない。ところのは言わないで上げるのが花である。

「つむ。

あの服には色々な需要に対応するために小さな少女、もしくは少年に着させると一部の強制的な二次成長を促すという効果もある。さらによれの驚くべきところはそれをしてなんら後遺症、ないしは副作用が無いところとじや。

依頼はもちろん、新兵全てを鍛え上げてくれるには構わぬが、最悪教官にあたるものを——そじやのう。5人ほどでいい。育成してくれればあとほんのりでひとつにかしそう。」

ところの言葉がトドメになつた。

わつそく前払いとしてメイド服を貰い、まずは私が着用。二次成長を引き起こした後に、キティに着させ、『主人様プレイをしたことば』までも無い。

あはー！

やつぱつキティは可愛い。

20つ目 ご主人様にゃん（後書き）

この物語の主人公ってリア充過ぎる。
キティみたいな可愛い嫁さんとか。もう主人公、爆発すれば良いのに。

21つ目 ハスナバツ（前書き）

騎士団を鍛える話が終わったら（約分、あと1、2話。長くても3ほど）お待ちかね（待ってるのでしょうか？）マホラ編です。

21つ目 ヘラスナイツ

てなわけで。

ヘラス帝国の騎士団。

ヘラスナイツを鍛え上げることになつた私たち。騎士団のネーミングセンスにそこはかとなくセンスを感じない」ともないこともないような氣もするかもしないような気がする。そんなことはどうでも良くて、とりあえずの騎士団を鍛える方針としては、まずは一ヶ月間ほど騎士団全体をばつちりかつちりと鍛える。

これは鍛えるのが目的ではなく、優れた人材を探すためのものである。

そしてどんどんどんどん厳しくしていき、ふるいにかけていく。近接系を3人。

遠距離系の魔法砲台としての魔法使いを2人。こんな感じで合計5人を選別、抜粋。

その後に5人にのみさらに鍛える特別メニューを「えるわけである。

そんな素晴らしい騎士団強化計画の記念すべき一日目。

さつそくキティがぶち切れた。

その内容は以下である。

「さあ、貴様ら、この私たちが鍛えてやるんだ。存分に強くなつて良いからな。」

との、キティの言。

早朝。兵全員を集めてまずの一言である。

彼らからしたらおぼこい娘が2人。

騎士の姿に似つかわしくない姿で——具体的に言つならばゴスロリ。ちなみに私はメイド服である。言つまでも昨日の物———いきなりの上から目線過ぎる一言。

はてさて。

その状況で悪い気分にならない人が居るだろうか？
いや。意外といった。

とはいって、キティが賞金首でその実力を知つてゐるから・・・といふわけではない。

エヴァンジエリン・A・K・マクダウェルと言えば賞金首で有名で、写真も出回つてゐるが、それはあくまでも幻術で自分の姿を変えたものである。

ゆえに今、キティを尊敬の眼差しで見つてゐるのは恐らく、戦争終結後。続く内乱の中で傷つく人々を私とアリカちゃんと助けたキティとしての尊敬の眼差しを受けてゐるのである。

しかして、それを知らない人ももちろん沢山居るわけで。
それを除いても確かに数人は居る。

しかしてその数人は“ちっちゃな子供が大人ぶつてる”といつその背伸びが微笑ましいとか、軍の上層部が決定したのだからそれなりの実力はあるのだろう。というキティのいきなりの発言と姿に惑わされないだけの頭がある人間のみである。

特に後者はすばらしい。というか、後者の人物を見つけ出すためのキティのイキナリの言葉だつたりもするわけだ。
会場には軽く魔法による興奮剤も散布している。

これはどんな状況でも冷静な思考をもてるようだ。ということで、撒いた物だがその状況下でも冷静に状況を判断すると言つのは将来的に教官　　引いては部隊長になり易い立場の人間としてはかなり重要なこと。

なんてい。テオちゃんたら。オーバーなんだから。割と良いのがいるじゃないのさ。

ええと・・・あの兵士はマリック君と、エニシア・・・って読むのか?これ?あとはジャッカル君にルーク、文香^{ふみか}へえ、日本人もいるのか。旧世界で日本人は珍しいな。ふむふむ。ほかにも数人いるけれど、こんなところかな。

兵士の顔写真書類にメモをしておく。

「さて、まずは貴様ら。走れ。ひたすら走れ。死ぬまで走れ。いいな。」

とキティが言うが、色々と説明が足りてないよ。

「お嬢様。それではしさか説明が足りないかと思われます。」

なお、現在は昨日とは打って変わつて、キティがご主人様、私が従者である。主従プレイってクセになりそう。

「あ、ハイ。そ、そうですね、姉様。」

真っ赤な顔でそう答えるキティ。
恥ずかしいならしなきや良いのに。

今この状況は真っ赤な顔で「私はっかり・・・姉様するい。私も姉様にご奉仕されたいですニヤン」というキティの言葉によつて作られた状況であるゆえ。

おっとやばい。またもや吐血しそうになつたわ。

「ご主人様、呼び捨てで下せつて結構なのですよ?ついでに敬語も不要です。」

「——え、あ、ハイ・・・じゃなくて。」ほん。う、うむ。分か
つていい。・・・」、「ご主人様か・・・えへへ。」

咳払いして尊大口調に直すキティ。

まあ敬語調のキティもさることながら、今のキティも新鮮で良いかも知れない。

後半の言葉には突っ込むまい。

むしろご満悦のようで何よりである。

「おいおい、ちみつこいクソガキが俺たちを鍛えるつて聞こえたんだが・・・気のせいいか?

それにそつちのメイド服を着たガキも・・・変な眉毛だな。おい。

と、ここで乱入してくる馬鹿がやつてきた。ガタイの良い・・・名前は——まあいいか。身のこなし的に大したことなさそつだし。ゴリオさんとでも呼ばう——じゃなくて!!
変な眉毛とは何事か!!

身体的特徴を馬鹿にしちゃいけ——つてつー!?
ま、まずいぞ!?

いや、もちろんこれは予想済みである。

こうした力量を測れず、状況的常識も理解できない（軍と言つ公的機関がなんら実力の無い人間を引っ張つてくるはずが無い。というか、普通に彼らを鍛える以上、私たちは上位と言う立場になつているわけで、それに対しての言葉遣いとかがもうダメ）馬鹿がつつかつてくることは織り込み済みである。

むしろそれすら利用し、そうした輩には噛ませ犬役。すなわち、手つ取り早く私たちの実力を理解してもらうためのサンドバック役として使うつもりだった。のだが。
しかも彼は——

「あつ、ちょつ！…」

つい声が出てしまつた私。
彼が押し黙つてゐるキティの肩に触れた。
ま、まづつ！？

瞬間、轟音。

爆音。

あたり一面が吹き飛んだ。

「じつばーんっ！…」とド派手な音が鳴り響く。

「こ」の私に気安く触れるなよ。下郎。そもそも姉様の眉毛はすつご
く可愛いつ！…・・・つて、ね、姉様つ！？」

「いつたあ～。痛いよ、キティ。」

ゴリオさんはキティが殺す前に割つて入つた私が守つた。それでも
私の背後で余波によつて死に掛けているわけであるが。
いやあ、やばかった。

私とのラブラブを邪魔されたことだけならばともかく、私の周りには
は氣の良い人が多くて忘れがちだが人間をあまり好かないキティに
とつて、氣安く触る相手は普通に殴られる。なおかつ私を馬鹿にす
るとまでなると…・・・殺すほどまでの理由であるというわけではな
いが、かといって殺さないであげる理由があるわけでも無い。

ゆえに蚊を潰すようにキティはゴリオさんを殺そうとしたのである。
私としてもキティに――人の嫁をクソガキ呼ばわりし、小汚い手
で氣安くキティの柔肌に触れたあの野郎は打ち殺してやりたいこと
この上ないわけであるが、私たちの今の立場からすると殺さないで
あげる理由が無いというわけではない。

彼にも同僚、仲間、友人、家族がいるだろうし、これから先、彼らとは少なくとも半年ほどは一緒にいる予定なのである。

ちょっとしたことで殺されるから気をつけなくては——みたいなビクビクしながらこちらの顔色を伺いながら——彼らを鍛えるなんてのは精神衛生上、嫌だ。下手をすれば彼らが軍自体、辞めてしまいかねないだろう。

それは本末転倒というものである。

「ね、姉様……だ、大丈夫ですかっ！？」

すぐに駆け寄つて私の腕を手に取るキティ。顔は真っ青。心配してくれてるのがわかる。

「大丈夫だよ、キティ。コノくらいなら普段からツツ」「ミとして受けてる……と言つか、普通に骨とか折られてるんですけどね？」「いつもとはワケが違いますっ！！」

これは……殺すための一撃で……そ、それを姉様に……

「大丈夫だつて言つてるじゃない？」

「ま、万が一つのことだつてあつたじゃないですかっ！」

「いや、だから……そのくらいじゃ……」

「姉様っ！」

「は、はひっ！？」

「私も気をつけますから、一度とこんなことをしないで下さい。」

「いや、でも……」

「姉様、万が一にでもあれで死んでたら私はどうなつてたと思います？」

えと……それは……ねえ？

「きつと姉様を追うべく私も死んでました。罪悪感を抱きながら。

号泣しながらこの首を掻き切っていたでしょ。姉様はそんな私を見たいのですか？」

「・・・見たくないです。」

「なら、止めてください。」

「はい。」

はっ！？

これって普通に丸め込められたっ！？

「・・・姉様は私にとつて何よりも大切な宝物なんですから・・・もつと自分を大切にしてください。」

「き、キティ・・・い、言うよくなつたじゃないの。」

「」、これくらいは朝飯前です！！

顔を真っ赤にしながら、そっぽを向くキティであった。

もちろん私にとつての宝物はキティである。自分の身以上に大切な大切な宝物。

おそらく私の命とキティの命、どちらかしかーーーという展開になつたら私は迷わずキティを選ぶだろう。しかし、私は死なない。なぜならばキティは私を選ぶだろうから。

お互にお互いの命を守りあうのである。

なんか違うな？まあいいや。

閑話休題。

「・・・さて、キサマの処遇だが、姉様に免じて命だけは助けてやる。

姉様に感謝し、土下座し、咽び泣きながら姉様に礼を尽くすが良い。

「」

「キティ、彼、気絶してるから聞こえてないと想つよ？」

「・・・こほん。た、狸寝入りしてるから大丈夫です！…！」
「いや、無いよ。」

さすがにそれは無理があると思つ。

「もひつー！

姉様はどっちの味方ですかつ！…！」

「キティ以外にはありえないわね。」

「でしようつ！

なら話を合わせてくださいよつー…こんな大衆の面前で私に恥をかかせたーー大衆の面前？

もちろんのこと一部始終は他兵士さんたちに見られている。
当初の目的は無事果たせたから問題は無いのだが、恥ずかしがり屋のキティにとっては…・・・そつはいかないんだろうなあ。と思いつつ。

兵士のヒソヒソ声が聞こえる。

「百合？百合なの？」

「姉様だつて・・・どういう関係？」

「小さい方つてアリカ様に似てないか？」

「全く見えなかつたんだけど・・・え、なんでマックスは倒れてんの？」

「マックス…・・良くなきてたな」

「幼女が2人も・・・くんかくんか」

「黒髪美少女と金髪美少女が教官だなんてーーーむしろ俺が教えたい。あれなことを。」

「見せつけかよ・・・オレのとこの嫁さんなんて・・・とつとと死んで保険金寄越せとか言つてくるのに」
「元気だせつて。きつと新手のシンデレラだよ。」

「馬鹿な」とを言つた。顔を赤くしながら保険金寄越せつて言われてもちつとも萌えない・・・むしろひげばぐさて逆に怖い。俺いつか殺されるのかな・・・あいつは。」

「宝物……ら、ラブラブ過る……」

「あらふおーの私に対する挑戦と受け取つたわ。..。呪い殺してや

卷之三

色々な人がいるようである。

それと幼女が二、三歳とか黒髪美少女とか言い、ひなちゃんに殺しておけ。うん。

トモを出でて、急いで野郎に追跡され、さうして

「あ、あれは……あれは、いかに……」

今見たことは全て忘れなさいよおオオおオオおおおッ！！」「

キティが真っ赤になつて兵士達を吹き飛ばしたのは言つまでも——あることだらう。

多分

ちなみに非殺傷設定なので死人は出なかつたとさ。 チヤンチヤン。

21つ目 ヘラスナナイツ（後書き）

未だにアリスをどの立ち位置にしようか迷っています。生徒か教師か。それともひたすらアルもといクウェルサンダースと一緒にキティをからかうか。

生徒と教師は他のファンファイクションで使い古されてるので、違うものにしたいんですよね。あ、これを書いてたらふと思いついた！ いけるかもしれないっ！！

ということであまり期待しないで待ってくださいーー！

ほおおおおおおおおつ！！

アイディアがどんどん閃いてくるぞおおおおつ！！

226回 カーニバルホーク(前書き)

今回はカーナーブ度低いよー。

一四三。

ヘラスナイツを鍛え始めて一四三。

彼等は戦々恐々とした様子で——しかしどこか微笑ましいものを、人によつては疎ましいものを見るような目（仲の良い私達に嫉妬する意味合いの）で——集まつていた。

昨日は単に走らせた後に、実践を模した隊規模の対決をさせてみたりと、現状の力量を見るのに費やした。

ちなみに走らせたのは根性を見るという目的もある。

人間、肉体は育つてもそれを動かすエンジン。始動力となる精神は中々育たないため、それが飛びぬけてるヤツは初期から引き抜いておこうと言つ心算である。

そして今日も走らせる。が、今日は実践訓練を先にしてその後に走らせた。

前日との違いは単に追い詰めた状態と万全の状態の動きの違いを見るためである。

もちろんのことその差が低く、あつたとしても根性で埋められるかどうかを見極めるのが肝。まあ無理だらうけれども。

三四三。

同上。

四四三。

同上

五日目。

以下略。

そしてこの後、さりに一ヶ月ほどかけて同じことを繰り返した。なお、実践訓練は終わったら反省会をさせて、私たちもそれに口出しをする。実践前にはなんら言つことはしない。これは自主性と協調性を育むためである。

さて、ここらで大体良いのには田をつけた。

最初にあげた五人はもちろんのこと、ほかにも数百人。合計、1000人近く居る中で才能を感じるのが約10人に1人という割合はかなりの嬉しい誤算である。

さて、ここからさらにふるいをかける作業を始める。

35日目。

「よし、貴様ら。いい加減基礎は身についてきた。まあ、まだまだ荒いがな。とはいえた。

お互に切磋琢磨し、お互に技を褒め称え、お互に絆をより強固なものにした。

私たちのアドバイスもあって、貴様らは——そうだな。そこそこ

の兵士レベルにはなった。たとえ戦争になつても生き残れるだろう。

「

というキティの讃め言葉に兵士達は沸き立つ。

「だが。生き残れるだけで勝てはしない——すなわち。何が言いたいか、わかるな?

喜んでいられるのも今のうちだ。

これからさらに厳しくしていくんだからな。」

と言つ言葉にて、ざわめきはぴたりと収まった。

そつ。もちろんのこと彼女の性格的にこのくらいの生易しい特訓（とはいへ、普通の新兵用の訓練よりもはるかに厳しいものだつたが。）で終わるはずは無い。

ちなみに私も現在は弱体化（特に体に染み付けるしかない類である武術など）してるので。現在は成長に害が無い程度に修行をつけてもらつてゐるのだが、それでも非常にしんどい。

さて、彼等いつぱしの大の人達にキティが容赦してあげるかと言えば——もちらんそんなことはなく。

これから始まるのはキティによる修行と言つ名の断罪ショードだった。誰が罪を犯したと言つわけでもないのだけれど。

40日目。

「ほらほら——！」

どうした、どうしたあつ——！

足を止めるとな死ぬぞつ——！」

と言つてキティは兵士達を追いたて、ひたすらに当たるか当たらないか程度の位置に魔法をぶつ放す。

午前の近接タイプ兵士の訓練はどんな手を使ってでもいいから格上のキティから逃げ切れ！ということである。

私は私で典型的な後衛魔法使いタイプの子達に対して魔法の講義を行つてゐる。

肉体に起因する技術的な物は振り出しになつてしまつたとはいへ、知識だけならば700年くらいの物がある上に、私の師匠はあの神様印の「スーパー力カシコ」のスペ君である。

世界で私以上に魔法が使えるとしたらそれは造物主くらいだらう。そんな私は今日も黒板に向かい、椅子に登つて背伸びをして魔法の講義をするのである。

「え、魔法で浮けばいい？ 幻術で背を伸ばせばいい？」

馬鹿を言つなよっ！

私がこうして一生懸命プルプル震えて頑張つてる姿に――

「応用があんなに・・・ためになります。」

「きょ、今日も可愛いわね。アリス先生は。」

「あ、あんなに懸命に背を伸ばして・・・や、やばい。鼻血が。」

「よ、幼女が・・・幼女が頑張つてる姿がこれほど萌えるとは・・・

「あ、あれは幼女・・・そして俺は紳士・・・イエスー・ロリー・タ！ ノータッチッ！ だがしかし・・・あのプルプル震える太ももを驚づかみにしたいつ！！」

「おいおい！ 太ももじやねえだろ！ ？ 揉むなら胸じやねえか。」

「いや、あんた達、何言つてるのよ。というか、先生には胸無いじゃないの。」

「ばかっ！ その胸が無い。けどほのかに柔らかい、薄つすらと胸筋の上から乗つかる脂肪のふにふに感がタマランのだろ？ 」

「私にはあんた達がたまらないほどにキモイわ。」

「・・・魔法変換効率が上がると魔力の消費が抑えられるのは道理・・・ですが、それをこのような方法でなんて・・・」

「先生、なんで浮かないんだろう？ 飛べるはずなのに。」というか、どうして誰もつっこまないのかしら。そのことに。これが空気を読むつてこと！ ？ くつー！ 空気を読めると書いてKYOUの私にとつてこれほど辛いことは無いわっ！ ！」

「見た目で判断すると痛い目を見るつてのは先生のためにあるような言葉よね。」

「あの震えてる彼女の愛らしさがあらふおーの私にはとても禍々し

いものに見える！憎いつ！あんなものに騙される男も、私を捨てた男もつ！全でが憎いのよおおおおおつ！」

ふつふつふつ。計画通り。

こうして私の人気が上がりてくると——あ、もちろん色々ダメな人にはツツコマないよ　　キティがこちらをちらりと見る。そして少しこちらを睨み、生徒達に対して刺すような視線を投げかける。

『私の姉様に色田を使うヤツは性別問わず消すつー!』と言わんばかりである。田でそつ言つている。

私が魔法を使わない理由は魔法に頼つてばかりではそうした便利さになれて、便利さを享受するだけの堕落した人間になつてしまふから。などという立派な理由は無く。

51

ふへへへへえへ。嫉妬するキティも可愛いよおおおおおつ！！
というか、嫉妬するキティを見るためだけに椅子を用意し、書きづ
らいのにも関わらず背伸びして黒板に文字を書いているのである。
この程度の労力！

嬢姫するキテイを見るためならなん苦ではないのだ！！

「と思つたら、キティにそのことがはれてふく飛はされました。」
「ごめんなさい。ちよつとした出来心だったんですね。

50 日

さすが私とキティ。

才能がなかなかうとあらうとかなりの成長をしていくへラスナイツの面々。

ここでキティの訓練に進捗が見られた。

非殺傷設定の魔法、当たつても精神的なダメージもとい痛みを錯覚するだけの設定であつたがそれをかいぐぐり、キティからボロボロでも時間内一杯逃げ出した一人が出てきたのである。

その人が凄いのかと言われば、些か疑問の残る余地がある。

もともとキティの訓練は近接系兵士約700人を同時に相手取るものであり、その700人が決められた時間内、決められた範囲をキティの手加減した攻撃から逃げたり立ち向かつたり隠れたりとそれならばらばらに動き、時には一致団結したり、罠を作つたりと。とにかく逃げ切れば良いので、キティの実力をもつてしても一人くらいは逃すヤツが出てきても不思議は無いと思つていた。ゆえに特別おどろくことではなかつたのだが、選別する前に逃げ切るヤツが偶然とは言え出てくるのは予想以上に早かつた。

ちなみに名前は・・・マ・マーク? マルキ? アース? アックス? とにかくそんな感じの名前で、とりあえずいつぞやのゴリオさんだった。と言えば誰かは分かるだろう。

まぐれとはいえキティから逃げおおせるのは無理だろう。

それなりの才能があつたということに他ならない結果だつた。

もちろんキティとしても私としても面白くないので、次の訓練にはゴリオを優先的にぶつとぼすとキティは言つていた。

うむ、南無。

62日目。

さて、このくらいからそろそろ個人レッスン。

当初のエリート選別、エリートにさらなる教育を。英才教育作戦を始めることにする。

甚だ不本意ではあるのだがゴリオさんも選別メンバーである。

キティの柔肌をキサマの小汚い手で汚したことと許したわけではな

い・・・といふか、訓練の名目で苛めてやるつじやないか。
殺しはしない。殺しはしないが苛めて苛めて抜いてやるづ。キ
ティも多分近い思いを抱いてるだりづ。

9月1日。

予想外なことにゴリオさんがやたら前向きすぎてつまらなくなってきた。

当初の予定通り、優秀どじるはかなり選抜されて今では約6人。キティは接近系。私は後衛系を担当することは変わらず。しかしてゴリオさんだけは接近系でありながらキティの訓練後にさらに私の訓練も追加である。

ところがどっこい。

何を勘違いしたのかゴリオさんは普通に「あれ？この2人から田を付けられてる俺って優秀なの？！」という勘違いを起こし、それゆえ私達のありもしない期待に応える為に懸命に耐え抜いた。

私たちの特訓とも呼べぬ特訓を耐え抜いたのである。

結果。なんだか知らないが気づいたら兵士一番の実力者となつていた。

なぜこいつなつたし。

明らかに理不尽な理由（ちよつとそこ邪魔、とか）で殴つても「あはははああああああああつ！！きたああああああああつ！！最近はお嬢方に殴られても鼻血しか出ませんよつ！！最初の頃は骨の1、2本は軽く貰われてたのにつ！！俺つて強くなつてますよねつ！！」と言つゝきなりのギリギリセーフ？でM的な発言をかましてくれるゴリオさん。

余談だが、未だに名前は知らない。

あまりの前向きたと勢いに飲まれついと「うん。が、頑張ったよね。ゴリオさんは。」とぼやきつつ、頭をなでてやると「ありやしたつ

「……」と呟んで自室に帰つていくのである。

ちなみに頭をなでてやつたのはなんというか、今では恒例行事となつてしまつたことで最初はゴリオさんに屈辱を味合わせるためと言う嫌味極まりない動機で始めたことだつたのだ。

怒りうにも相手は上司ゆえに屈辱に甘んじるしかない。というシチュエーションで苛め抜くつもりだつたのに。

むしろ私に書が降つて沸いてきた。

彼ばかりが、ずるい！私たちだつて頑張つてます。彼と同じ訓練をすればナデナデしてくれますかつ！…といついつの間にか出来ていた私のファンクラブの連中に押し寄られ、しかし面倒だつた私はもちろんのこと、「ゴリオと同じ訓練をしたものがそついた生意気なことを言えつ！」と言つた。

言つてしまつた。

もちろんさすがにナデナデくらいでゴリオと同じ、訓練とは名ばかりのただ辛いだけの肉体的精神的修行風いじめをやりたがるやつはいないと思つたのだ。

しかして違つた。

彼等は修羅だつたのだ。

結果は言わずもがな。

ファンクラブであつた約100人は全員ゴリオと同じ訓練を耐え切り、私にナデナデされたとぞ。

その情熱をほかに向ければ・・・と思わないでもないような。しかし結果的には万々歳である。

128日目。

どうしていいか、やることなすことが裏田に伝わるのだからつか。と思いつけ。

今日もナデナデしてやることになつた。

どいつも自身よりも明らか年下なのに、そんな私に下に見られる感じがたまらなく“感じる”そうだ。

変態が多いな・・・とぼんやりと考えながら今日も彼等に訓練を課すのである。

一八〇日田。

そろそろ半年が経つ。

予定ではそろそろ教官クラスを仕上げなくてはいけない。のだが。ぶっちゃけ選ぶ必要が無くなつた。

100を越える人数が原作で言つところの・・・カゲタロウクラスになつたからである。

ラカン君の強さ指標で表すなら2000前後である。

近接職は普通に瞬動は使えるし、虚空瞬動も可能。気の強化も下手な冒険者なら足元にも及ばない。中級呪文ならば普通に戦闘に組み込める。下級呪文ならば無詠唱も可能。

後衛職は上の下程度の呪文である雷の暴風クラスなら連発が可能。広範囲殲滅呪文の千の雷などだつて多少時間はかかるほど普通に扱える。中級ならば連射である。無詠唱でバカス力打ててしまう。あ、もちろん遅延詠唱、無詠唱、さらには最低限の近接術も覚えさせた。

正直、兵士としては個々の戦闘力が化け物染みたことになつてしまつたが後悔は無い。
まさしく魔改造と呼べるだらつ。

さて、最後に。

この特訓の成果。
最大の成果であるが。

無詠唱、遅延詠唱ならば中級まで可能。上級も先頭に組み込むという点では問題が無く、なおかつ虚空瞬動、瞬動、剣槍弓と三種の武器を十一分に扱い、拳打においては達人の一歩手前クラスにまでたどり着き、頭脳に置いては並みの軍事を上まることになった最高傑作の名を言つておこひつ。

甚だ。

甚だ不本意かつ忌々しいことなのではあるが。

眼前。

兵士を鍛え上げ、厳しい訓練を卒業するという一種の卒業式的な物が行われている。

その壇上で。

一番優れた成績を残したとして表彰されている者がいる。

この国では重要なポジションに居るヘルス帝国第3皇女テオちゃんに表彰状を渡されたその人物は頬を軽く染めつつも誇らしげに微笑んでいる。

「以上、ゆえに妾は貴君を称えることにする。」

というテオちゃんの言葉に続く人物の名はマックス・オルウェイン。ご存知、前向き馬鹿のゴリオさんであった。

もう一度言おう。
なぜこうなったし。

226回 キーニングコホさん（後書き）

はあああああつーー！

キティにやんとのラブライブが少ないつーー！

キティにやんともつとラブライブさせたいよつーー！

わつとピンク色に染めたいよーー！

わつと太ももを書きたいよーー！

・・・じほん。

次回は新章。

もといマホラ編。

ふふふ、ちょっとありきたつのよつて見えておさらく他の皆様が書く物には無い、僕が始めて書く展開だと思います。少しの似てる部分はありますね。

23つ目 謀略（前書き）

キリが良かつたんで区切つわやいました。
短いです。

次回はマホラで会いましょう！――

「アリス・スプリングフィールドはいるか？」

ヘラスナイツの一件から五年後。私は十歳となつてしまらぐ。ウェールズのアリス家にて、数人の男達が唐突にやつってきた。もちろん礼儀を弁えないバカどもにキティがご機嫌斜めになるのを宥めつつ。

「私ですか？」
「貴殿に逮捕状が出ている。
大人しく連行されてもらおう。」
「はい、りょーかいです。」

さて、なぜ逮捕状がうんぬんという話になつたか。それを語るに涙。

感動的なストーリーが背景にある。わけもなく。

簡単に言えば、もう腐りすぎてるんだからいつそのこと元老議員と
いう役職自体なくしちゃ わない？

というクルト君主導の下。

元老議員を完膚なきまでに叩きのめす。

それの手伝いを私達がすることとなつたのである。

この5年。余程後ろめたかったのか、自身達がアリカちゃんに擦り付けた罪。それを私を通して見る元老議員の老害やそれと一緒にいるものたちは非常に多岐に上つて色々な役職に付いており、結構な数をキティが殺したのにも関わらずいまだに彼らが潰えないのもうんざりしてきた。あれやこれと気の良いことを言って新職員なんか取り込み、あれからむしろ老害の息がかかつた人間は増えたとも

言える。

などなどと言いつつも、皆はまず「いつ思つだろ?」。「なぜ殺されるのに未だこちりに面壁を売るの?」と。彼らが関わってくるのは「アリス・スプリングフィールドが母親の一件で我らに反旗を翻す」かもしれないという恐怖ゆえに。といったところらしい。

アリカちゃんが生きていたといつ生き証拠である私。その私がアリカちゃん関連で動くと色々な意味で厄介。彼らの罪がばれる可能性も全くの無関係者がやるよりも、動きよつては元老議員という役職の存続すら危うい。

そもそも、そのことがばれれば関係者全ての死刑は免れず。キティが怖くともどうせ死あるのみならばどつにかこうにかして私達を殺す。そう考えてるようなのである。

特に力を付ける前の幼児の時に。

全く、こちらとしては向こうに対する害意はそんなにあるわけでもないといつ。

むしろアリカちゃんを社会的に殺してくれれば王女などという人間の思惑渦巻くストレス満点環境から開放されるため、アリカちゃんの子として母が気楽に過ごせる環境にしてくれたのは感謝するべきところだ。

そんな私たちの思惑を知つてか知らずか。

私が賞金首であるキティと一緒にいるというのも相まって、彼等は尚のこと焦つて懸命に私達を殺そつとするのである。

いい加減私もウザクなってきたのでどうしよう?

と思った私達はクルト君と組んで、徹底的に彼らの不正を暴いて役職自体を無くすくらいに世間の評判を悪くしようと立つた。

クルト君はアリカちゃんの一件も含めて、今までに不正を集めてき

た。

小さなものから大きなものまで。

しかしそれでも未だ彼らの役職を潰すには一歩足らない。それほどに元老議員の権力は根深く、強固に世界に結びついていっているということがわかる。

そこで。

さらなる後押し。最後に一つ大きな不正^{つみ}。私たちに対する——すなわち、戦争締結後は普通に良い意味で有名になつた私達^{免罪}も彼らを訴える肥やしにして、完膚なきまでに叩き潰す——と言つた所なのである。

私にいたつてはあの英雄と犯罪者にしたてあげられた悲劇の王女の娘（息子だけね）という付加価値もある。

親子二代に渡つて元老議員の身勝手に巻き込まれる。

しかもそれは最古から連綿と受け継がれた王族の血筋。

その旦那、父親はかの英雄サウザンドマスター。

そんな重要人物^{キーパーソン}を食い物にしたと公表すればさしもの元老議員も潰せるだろうとのクルト君の言。

そのための第一段階が私の逮捕。
もとい「オゴジヨ化」である。

免罪でやむを得ずオゴジヨ化され、苦渋の日々を送る、世が世なら一国のお姫様となるはずだった私。いや、王子様だけれども。

ふふふふ！

世間を沸かしてあげるよー！

この私がーー！

ぐだぐだ小難しいことを言いつつも、結局のところ世間を巻き込んだ

だドッキリをしたかつたから。

それがクルト君に協力した私の一番の動機だつたりするわけである。

23つ目 謀略（後書き）

まさかの主人公がオゴジヨ化してマホラ学園に！といつ話。ちなみに主人公は体術においては100年かけてフェイとんに追いつく程度でしかない——もとい才能が無いやつですが、魔法においては

エキスパート。造物主ばりのチート性能です。

オゴジヨ化も一種の魔法である以上、普通にオゴジヨ化なんて解けます。

オゴジヨ化においてキティと主人公の立ち居地の設定がひらめきまくったんですが、ストーリーのはうはどうじようかと迷い中。立ち居地的に昨日の時点では面白そつだつたんですけど、一晩経つと——微妙かなあと。

いつそのこと彼女達の立ち居地を言つてしまふと、キティは力を隠してネギのライバルと成り、魔法少女となります！

そしてそんなキティに付き従う謎のオゴジヨ！

そんな彼女達を警戒するネギパートイ！！

彼らの運命はどうなるつ！？

さて、いかがでしょうか？

24つ目 お帰り（前書き）

よしー展開が決まった！！

私が十歳となつてから一年後。

某日、麻帆良学園。

私たちの家の前である。

「さて、久々に帰ってきたわね。マホラに。」

「チャチャチャゼロはちゃんと留守番できているでしょ？ 木偶にんーースパ君に迷惑をかけ同士でなければいいのですが。茶々丸、どうだ？ ここが私たちのあ、あ、ああ、愛の巣だ。」

現在、私の姿は特別オゴジョと言つわけではない。

故郷ウエールズで私の逮捕はかなりの大騒ぎとなつたらしいが、まあそうした詳しい部分はまたの機会として。

ちなみにウエールズに住む人たちにとつて私とキティは犯罪者として牢獄に入れられてる——という認識のはずである。

ただネギのことは多少なりとも詳しく言つておかなければなるまい。私の一件以来、ネギは色々思うところがあつたらしく、やたらと魔法や勉強を頑張るようになつた。

そして12歳。

メルディアナ魔法学校卒業。

本来の歴史ならばネギは9歳。数えで10歳でメルディアナ魔法学校を卒業するはずだったのだが。悪魔事件が無かつたこととなり、父親であるサウザンドマスターへの憧れも弱かつたせいか特段に頭が良いというわけではなかつた。とはいっても、そもそも頭の出来からして天才型なのでそれでもかなりの知識と魔法の腕ではあつたが。（魔法に置いては原作以上だらう。キティが軽く鍛えていたので。）

おやいぐもつ一週間もすればネギもマホラにへるゝことなる。

「リリがアリスとマスターの愛の巣ですか。」

「あ、愛の巣とか言つたは、はづかしいだらうつー?」

「……いや、マスターがそう言つたのですが……」

「や、そうだったか?ま、まあいいんだつ!そんなことない……といふか忘れるつー!」

そして気になつた人もいるだらう。

私たちの間を歩いてる12歳くらいの子供は茶々丸。

クローン技術で培養した茶々丸である。

身長は私の現在身長と同じ130センチほど。

機械であつた茶々丸のロリボディ茶々丸を想像してもらえれば良い。

ちなみにこの茶々丸はクローンのみで作られたやんとした生身であり、非常に可愛らしい私とキティとの間の実子といつても良い存在である。

ロボット娘という属性を消してしまつてよかつたのだらうか?とやはり過ぎた気がしないでもないことが、まあそこは気にしないこととする。

だつて、私にロボットを愛する氣はないのだし。

ロボットならばやはりロボットらしい格好よさとこつ物があるもので、アンドロイドなど言つのはもつてのほかである。

腕や足などの体の一部が機械であるといつのはカッコいいと思つたね。

そんな私の厨一願望はさておき。

茶々丸が父親とも母親とも呼んでくれないのはどうしてなのか。

おそらくだが、魔法世界のクローン技術は魔法科学によるものが半分以上を占めており、その中の魔法的因素が茶々丸自体の認識に齟

酷を与えてるのだと思われる。

詳しい話はいずれ。というか、自分自身専門じゃないのでいまいち分かつていなかつたりする。父親と母親と呼ばせたかったのだが、どの道幼女にしか見えない私達がそう呼ばれるのはちょっとアレだつたので諦めて、キティはマスター（戦いの師匠的な意味で）、私はアリズと呼ばることにしたのである。

そもそも茶々丸の培養に関しては想定外なことが多すぎた。まず茶々丸の容姿は私とキティが混ざるものであるはずなのにそはならず、本来のネギそのままの茶々丸の容姿。DNAにちゃんと仕事をしろと物申したいが申す手段が無いので断念した。本来の物語に対する修正力？と思つては見たものの、そんな話は聞いたことが無いし、それならばそもそも茶々丸を生み出すことは成功しないはず。おそらく設定のどこかを間違えて、偶然茶々丸の容姿となつたとみて間違はない。

下手をすれば性別すら違えていたと思うともう少し設定を詰めてから培養器を作動させれば良かつたと思いつつ。

次に培養期間を間違えてしまつたこと。間違えたと言うよりは予想以上の培養速度を見せてくれた。

赤ちゃんから育てたくて、胎児の段階で培養槽から出すつもりだったのにふと田を離した隙に育ちすぎてしまつたのである。

赤ちゃんを育てたかったのに、と落胆。ボタン一つで単価にして19万8000円で作れるとはいえる。

一応、一つの命として——産まれる場所が子宮とガラス水槽の中という違いはありにせよ——この世に産んだ以上、そのまま廃棄処分と言つのはさすがの私でも躊躇された。

どこぞのレベル5進化作戦をするわけでもあるまいし。そんなことをすればどこぞの幻想殺しに説教されながら殴られるという稀有名体験をする羽目に・・・なるわけもないが。単純に一人目を作つても処理に困つてしまつ。なにはともあれ。

そんなこんなで茶々丸は一年と言つ期間でもつてもう1-2歳児並みの肉体を持っているのである。

ちなみに知能が高いのはアリカちゃんの処刑の時に使つた身代わりクローンの魂をしようしているからで—— 閑話休題。

要するに、だ。

茶々丸が幼女になつて、生身になつたよ！——ってことである。

ちなみに現在は闇の魔法を使うための土台作りの修行中。
私とキティの血を継いでいるがために普通にチート性能だつたりする。

「お帰りだ、アリス。」

「ケケケ、ヨウヤク帰ツテ来ヤガツタナ。色ボケ夫婦ガ。殺シマクツテキタカ？」

うむ、久しぶりのスパ君の似非なまり言葉に、チャチャヤゼロの言葉遣いの悪さ。

とはいえ念話で会話してたので久しぶりと言つのは間違いかかもしれない。

なぜ久しづりと言つてしまつたのか？

ノリだらうか？

ノリだらうな。

あまり深く考えずにいこう。

「イロボケとは酷いじやない。

まだボケる歳じゃな——いや、ボケる歳ね。そういえば。というかボケるどころか死んでもおかしくない年齢じやない！？」

「今更過ぎますね。姉様。」

「ソウイウノガ、ボケテルツテンド。」

「」」」」のを引き出すチャチャゼロの応対こそが悪いのに、私が悪くなつてる！？」

なんという體かっ！？」

「・・・シツコマネエゾ。」

「つつこんでよつー？」

1人でボケて、誰も何も言わなかつたらすべつてるみたいじゃないかつ！？」

「人それを滑つてると言つのです・・・姉様。」

「わ、私滑つてたつて言つうのつー？そ、そんな馬鹿なつー？」

超スピードとかチャチなもんじゃねえーもつと恐ろしいものの片鱗を——

「まあ姉様のつまらないボケはさておき。」

「つ、つまらないつていつたつ！」

「つまらないつて言つたつー！キティがつまらないつてつー！」

お姉ちゃん悲しいーーー！

キティだけでも乗つてよつーーー！

「スパ君、紅茶を頼めるか？」

「来て早々それだか、エヴァ。まあいいだよ。ほれ、アリスも子供みたいに喰いてないでこっちでお茶を飲むべさ。それとそっちの子が話に聞いていた茶々丸　　だか？よろしく頼むだよ。」

「はい。そちらがマスターの従者であるチャチャゼロ様とアリスの親代わりのスーパー力カシコ様ですね？」

「様付けなんていらねえだ。気軽にスパ君とでも呼んでくれて構わねえだよ。」

「俺様モ呼ビ捨テデ構ワネエゾ。」

「ではスパ君とチャチャーーーは私と被るのでそこを除いたゼロと

お呼びします。」「

み、みんなが私をエターナルブリザードにする…!
きよ、驚愕するしかない…!
それに喚いてるだつ…? ？

「わけの分からんことを言つてないで、姉様も据わつてお茶を飲み
ましょう。」

「俺ハ茶ヨリ酒ガ良インダケドナ。」

「喚いてない、アリス、喚いてないもん。」

「はいはい、分かつだからお茶でも飲んで落ちつくだ。」

「何つ…? その駄々をこねる子供を相手にする感じの態度と田はつ
! ?

その生暖かい目で私を見るなつ…! その生暖かい目が私を熱く焦が
すつ…! ！

「姉様…・・いい加減黙つて飲んでください。照れ隠しされぐら
いにして。」

「つ…? な、なんのことかしらキティ? 」

「久々にSPA君たちに直接会えたから。照れてるのでしょうか? 」

その照れ隠しがてら無駄にテンションが高いと言つたところですか?
私以上に生きておきながらーーー可愛いんですから。」

どやああああ顔で笑み、じちらを見つめるキティ。

ば、ばば、ばれてーら。

ついついそっぽを向く私。

顔、赤いだらうなあ。

「アリスは何時まで経つても可愛いだな。」

「ケケケ、良イ歳コイテ恥ズカシガリ屋力ヨ。 可愛イナ、 嬢チャン

「△△？」

「なるほど。マスターはそんなアリスだからこそ惚れたんですね。」

「ああ、その通りだ。　じゃなくてつ！！」

おい、茶々丸っ！！そ、そんなはつきり惚れた腫れたとか言つんじやないつ！！」

「どうしてですか？」

「は、恥ずかし——じゃなくて、それが『テリカシー』といつものなんだ！！覚えて置けつ！いいなつ！！」

「・・・？」

よく分かりませんがマスターが言つのであれば。」

そんな日常の一コマだった。

25つ目 とある生徒の心境模様（前書き）

他ネギま作品で人気のあの人気が登場。魔改造されてたり、原作時期よりも早くに魔法側に引き込まれたりしますが今作では今のところどうにもするつもりはありません。あくまでも一般人の目線からツッコんで頂きますww

25つ目 とある生徒の心境模様

私はここマホラ学園に通う中学一年の一般的な生徒だ。

ネット上では知る人ぞ知るトップアイドル、などといつ少し一般的とはいえない肩書きを持っていたりもするが、まあ常識の範疇。

今、目の前で起こった出来事とは比べるまでも無く。私はあれである。非一般的な光景を見せ付けられたのだった。

「キティ、ねえ。ねえつてば。」

「なんだ、うるさいな。用があるんですか？姉様？」

「そんなに怒らないでよ。ちょっととしたイタズラ心じゃないの。」

「あ、あれがちょっとした……ですか？」

「うん。あれくらいでそこまで怒るとは大人げがな——ひいつ！？」

「人が寝てる間にパンツの中身をスライムまみれにしたことか——

——あれくらい、と？」

「だ、だつてだつて……粘液的なものにまみれたキティを見たかつたと言うか……もちろん始めは入れて起きた時の反応を楽しむつもりだつたんだけど……入れただけでも敏感に反応するキティが可愛くてね？つい、調子に乗っちゃって……」

「調子に乗つて……失神させるほどにスライムを操つて私の体をまさぐつたと？」

「はい・・・そうです。」

「どうか、それだけじゃないですよね？」

私が楽しみにしていた“タマゴ屋”的プリンも食べましたよね！？
それも勝手につ！！

「や、それは・・・ちよおおおおおつとお腹が空いてただけでね？
つについ、つといひ。手が伸びてしまつたと言いますか？このいけ
ないお手手が勝手にプリンのフタを開けて、開けた以上は食べなけ
ればプリンを作ってくれた機械に申し訳ないだらう？つてな感じで
―――とこいつか、一週間も前の話でもつそれは謝つ―――

「ば、ばかああああつ！！」

「ひやうつー？」

今日は晴れやかな快晴。

学校が終わつたら久々にコスプレの材料の布でも買いに行こうかな。
と思ひきや。

目の前から独り言の激しい少女　いや、独り言というか彼女は
肩に乗つてるイタチ？オジジョ？ソレに対して話し掛けている様だ。
そしてなんだ、あのゴスロリは。

やたらと綺麗な金髪に端正な顔立ち。

馬鹿かつ！と突つ込みたくなるほどの美貌だ。

なんとなくリア充の匂いもそこはかとなく香つてくる。
死ねば良いのに。とか思いつつ。

「それにしてもゴスロリか。・・・羨ましくなんて無いからな。」

ゴスロリは私にとっては珍しいものでもないが、一般にソレを着て
出かけるような服ではない。

よくもまあ白昼堂々と着れる物だ。目立つのが苦手な私としては些
か以上に抵抗がある。

ちょっと憧れたりもするが。

羨ましいといつほじではないと言つて置いてひ。

「あのプリンは機械で大量に生産されるものじゃなくて、一日50個の限定生産のプリンなんですよっ！？」

「そ、そんなの知らないもん。」

「し、知らないじゃないでしょうつーー！」

「アーリーさん、ござあつ！――」

タマゴ屋のプリンは確かに美味しい。

和モ一度食へたことあつたこにな
あつて以來一度も食べぬ二二が無し

あれ以来一度も食へれたことが無い
彼ですが、再度ある二つのプリソを手に

彼女が再度あそびのヘリシを手に入れることが出来れば卒業する頃にはついに黒黙かちこむばかり。

されは商業する場はない。でも無理がもしれない。

さすがにあの歳で忘年会の一発芸の練習だ、などといつゝはある

まい。

つーか、腹話術の練習をするにしても時と場所を選べって話である。

おたおじ、おおむ、= =

ままたて何!?

「ルニバ、同居の妻の夢」

「だから姉様がいつまで経ってもそういう無神経なことをするから

— — —

ガミガミと言ふ少女とオジジ。

あれだ。私は彼女達と向かって立つ形で歩いているのだが、そろそろ通り過ぎると、いつの間にかドーナツオーバージョ的身体が喋っているような気がしないことも——いや、あつまつぱつぱつ。

まさか。

ありえないっての。

そもそも喋るために必要な舌や声帯がオコジョには無いはずだ。
仮に人間並みの知能があったとしてもそれらが無いのだから生物学的に不可能なわけである。

「いかんいかん。厨一病になつてたまるか。」

すでに卒業済みである。

ぼーっと姉妹が言い合つのを見ながら姉妹の横を通り過ぎる。

と。

「そ、そこの君つ！？すぐに、逃げるんだッ！？」

目の前にはT-レックス。ティラノサウルスと呼ばれるジュラ期にて食物連鎖の頂点に立つ、王者が君臨していた。そして崩御した。もとい倒れこんできた。

嗚呼、これは死んだ。

頭のどこかでそんなことを考えつつも、今更だけどこの学園色々おかしいだろっ！科学部でなぜこうまでオーバーテクノロジー的な口ボツトを作れるんだ！？そもそも安全管理くらいしっかりしてから試験運用をしろっ！！人死にが出てからじゃ遅いだろうがっ！！！という本当に今更ながらのツッコミもしつつ、死の衝撃に耐えるべく目を堅く瞑った。軽く引きつった悲鳴が出てきた気がしないでもない。

つてわけなのだが。

「ん？」
あれ？」

衝撃がこない。

おやおやおやおや目を開けてみると、そこには——非常識の権化とも言つべき物が存在していた。

「・・・ツッコンで欲しいのだろうか？」

そんな言葉がつこと出るほどに非常識だった。

状況を説明するだけなら一文で説明が付く。

「オコジョの尻尾が伸びて・・・トレックスを巻き止めた・・・うむ。新種のオコジョなんだらうな。」

いやいや、待て待て！
待てえいっ！！

「あ、ありえん。いや、普通に考えて、おい、待て、あ、あれだ。
ツッコむべき所が多すぎてツッコめない。
まずあれだ。ネコ目イタチ科のオコジョがなぜに日本にいる?
いや、日本にもオコジョは一種だつたか？」

存在するけども、完全肉食の気性の荒い生き物で人間に慣れるなん
てのはそれこそ魔法少女とかそんな感じのアニメのマスクツトキヤ
ラとしてでもない限り・・・そもそも法律上飼育できないはずだし
——というかなぜに真っ白？冬毛？今夏なのに。

そして尻尾はどうした！？

尻尾が超進化して——つか、あれだけの体積があの小さな体のど
こに！？

仮にあの尻尾が内蔵されてたとしても、一体どれほどの筋力がある
のか明らかに10トン以上はありそうな物を受け止めてるけど千切

れないのかなとか、仮に受け止めたとしても受け止めた際の力はあの少女の肩にかかる訳で・・・少女の肩は大丈夫なのかとかもツッコムべきところ・・・なはずだがなんか普通に涼しい顔をしてらっしゃるのは何故なのかとかなぜなにばかり。

極めつけは――」

目の前の不思議 否。超絶凄いオゴジヨを連れた少女と研究者らしく白衣を着た生徒。おそらく高等区の生徒。は、特に何か言い合つわけでもなく。そのやりあいにびっくり仰天した。

「す、すまなかつた！？
怪我は無いかい！？」

「ばか者が。

氣をつける。死人を出すつもりか。」

「はーはーはーはー！大げさだなあ。でも確かに万一にでも死ぬ可能性はあったかもね。

とにかくすまなかつた。

そつちのやたら尻尾の長いオゴジヨ君も。すまなかつたね。それにしてもすごい長い尻尾だ。ぜひとも調べさせて欲しいけど・・・まあそれはいつかということで。」

「き、キティつ！？

き、聞いたつ！？

わ、私、始めて初対面で男の子としてーーー君付けされたのなんて初めてだよッ！」

「ね、姉様・・・どこで感動してるんですか・・・どいで。」

「これを感動せずに何を感動しろって言つのよつー。

あ、でも尻尾を調べるのはノーサンキューよ。少年。」

「しょ、少年・・・に見えるかい？

それにもしても・・・最近のペットは喋ることも出来るよつになつたのか・・・芸達者なオゴジヨだなあ。」

「き、キサマ……姉様をペント扱いとは……まあ今の姿では仕方ないが……うぬう。」

え？

「アザツキ」は?

ホケでんの?

ねえ、ボケてるの？

なんでオゴジョが喋ってるの？

ニヤ、ナハ露のねよ。

しきかり喋りてゐる。

「おお、アーヴィングの『

え、何？

本郷で最近のペジトは隣のよしのんのへ

いやあなんて実家のハサギの三太は喋らなかつたんだよ！

見たかつたわボケエツ！！

いや、じゃなくて、厨一病は一年前に卒業したからそんな妄想は乙

でした。でもなくてっ！！

普通は喰るわけねえが三四か月

ダメだよねつ！？

ねえ！？ねえ！？

そして万が一これでも死ぬ？

逆だわつ！！

万に9500人くらいが突発的なことに対応できずに死ぬだろうよ

内五百人がたまたま反応したとか幸い、打ち所がよかつたって感じで助かるんじゃね？つてくらいの事故でしたよねっ！？

「じゃあ、僕はこれで。本当にめんねえええ。」

と言しながら去っていく白衣姿の生徒。

茫然自失。

今私はまさにそのお言葉が似合つ格好にて突つ立てることであるべ。

「・・・姉様、このガキは・・・」

「ええ、どうやら認識阻害を兼用してゐる学園結界の影響を受けてないみたい。

・・・魔法生徒、の割には無防備すぎるし、多分体质かしらね。」

「どうしますか？」

「記憶を消しますか？」

「・・・わうむ？」

問題ないんじゃないかしら？

ちゃんとした教育を受けた魔法使いなら――魔法の秘匿は魔法使いの義務である――とか言いながら――まあ対処するんでしうけど、私たちは・・・ねえ？」

「ふふふ。ちゃんと反省してるんですね。」

「な、なんのことかしら？」

「どもりましたね。分かり易いです。

私に記憶操作で封印した時のことがあるから、昔以上に記憶操作魔法を使わなくなりましたよね。姉様つて。」

「べ、べつに関係ないもん。」

「では、そういうことにしてあげましょうか。」

「う、うるさいなあ。」

「はいはい。

とこうわけで、少女よ。

まあ忘れる。

覚えていたといひで毎ひにもならんし、わざわざ私達からほびつい
うするつもりはない。

・・・まあ深入りしそぎとよひにな。」「

な、なんだらうか？

いきなりの尊大口調で何かを言い出し始めた。流暢な日本語だなあ
とか関係ない」とも考えつつ。

とこうわけで、といわれても小声で話していたせいか、じつには
殆ど聞こえてこないし。

つーか、この説明不足な感じ・・・なんかアニメに出てくるキャラ
を思い出す。

毎度思うのだがどうしてじつはまじめいつ・・・情報を小出しにした
がるんだろうか？

しかも出すのはいつも断片的かつ、中途な部分。
尚のこと不思議かつ興味を引くだけだと呟つのに。

どうせなら何も言わないか、しつかりと理解できる最低限の情報く
らいはくれても良いと思うのだが。

私がどういうことかを詳しく聞くのをしたときにはすでに彼女は去
つていったあとで・・・

やはりあのセリフはフラグだったか。

中途半端に――もといワケの分からんことを言つておつていく幼
女。じゃなかつた。

少女。

「なんだつてんだ? 一体?」

私こと長谷川

千雨はただただ呆然とするしかなかつた。

25つ目 とある生徒の心境模様（後書き）

ちりぢら作中にも書いてるのですが、主人公は800年ほど生きてるので原作は殆ど覚えてないです。

ちうたんがオコジョについて詳しいのは一年前。彼女が小6年頃に厨二病に疾患していた頃、その当時やつっていたアニメに影響されてオコジョが欲しくなつて飼育法や捕獲法を調べる上で詳しくなったということです。

ちなみにオコジョは絶滅危惧種で飼育は研究か保護目的以外では許可されないそつな。

保護と言つても田じい食べている餌が野鳥や野鼠などの小型哺乳類らしいので寄生虫や雑菌的な意味で触るのが怖いですね。というか下手に手を出せば噛み千切られると思います。

指が。

* 千羽から千兩に修正。作者の脳内では千羽と書いてチサメと読んでました。○「」
ボケ過ぎた

26つ目 風邪後の交渉（前書き）

あれ？

書いてたら結局ありきたりな結果に・・・ちなみに思いついで展開と言うのはオコジョとして学校についてました。が、主人公の性格的にこうなるだろうなーと思つたので没にしました。とはいえオコジョネタがないかといえば、あります。

オコジョと生徒のダブル職業で行こううと思います。

「大丈夫ですか・・・姉様？」

いきなりでなんだけれど、私は風邪を引いた。

へやつ、ネギがよつてマホラに来るのだと二つのこと。

全ての始まりが今日だというに。私と来たら・・・」ことなら
ひとつと魔族化しておくんだった。

そうなるとこのまま身長が140㌢で止まつたままでいられとなりかねないし。

「大丈夫くない。なんもやる気沸かない。今日はキティと一緒にあ

風雲一月刊

すか。
」

「ちがう、キティに全身隅々まで洗つてもいいのぉー！」

「そ、それは……べ、別に良いんですけど……キャラちがわないですか？」

顔を赤らめて、答えるキティ。

結構肌を重ね合わせて いるため、私の体の知らぬところなど無いと いうのに体を洗うくらいで顔を赤くするとは——本当にえっちなものに耐性が無いキティである。

ふふふふ、まあそんな中々慣れないところもキティの魅力
という話は残念ながら置いておいて。

「キティ・・・なんかみずみずしいものが欲しい・・・」

「瑞々しいものですか？」

・・・えーーーと。リンゴは切らしてたし、ナシもみかんも無いです
すし・・・茶々丸つ！茶々丸つ！！」

ちなみに看病はキティ一人にしてもらつてる。

真祖の吸血鬼ゆえに風邪を引いたことが無い彼女にとつて看病と言うのは非常に困難な作業である。

おろおろしながら私を心配してゐる表情。

不器用ながらも私を甲斐甲斐しく世話をしてくれるので優しい。

嗚呼、もう。

風邪を引いてよかつたと思えたのは前世含めて今日が初めて。

ちよつとしたーーーごほ、ごほ・・・キティ・・・目が・・・目が霞んできたよーーーみたいな冗談でも真に受けたもんだから面白

じやなくて、可愛いキティ。趣味が悪いと怒られましたけれども。

私も不老不死なので病気にはならないと思つたんだけど、SPA君談「真祖と同じくらいの再生能力があり、不老で死がないと言つ点を除けば人間の肉体そのもの。魔族化した後ならばともかく人間のままならば普通に風邪を引く」とのこと。

とはいへ、再生能力があるので概ね寝てれば半日程度で治るとも聞いた。

ならばせっかくの看病タイム。

存分に楽しむしかあるまい。

ちなみに私のキャラが違うのは風邪を引くと無性に甘えたくなるタイプなため。

「なんでしょうか、マスター。」

「なにか瑞々しい食べ物はあつたか？」

・・・いえ。何も無いです。

何か食べたいのですか？

「姉様がな。」

「口移し希望だよ、キティ・・・ああ、キティの口移しで無いとダメだあ、私は死ぬかもしれないいい。」

「だ、大丈夫です！！すぐにリンゴを買つてきて口移しで食べさせてあげますからっ！？」

「ほ・・・本当に死んだりしないですよねっ！？」

「マスター、アリスの『冗談でしようから無視して大丈夫だと思います。』

どう考へても現状で死ぬような思い病氣ではないですし。そもそもアリスは殺そうとしてもなかなか死なないでしそう。「キブリ以上の生命力でしようから。」

「あれ？ 茶々丸って意外と私に冷たくない？」

「いえ、別に。気のせいでは？」

「なんか怒つてる？」

「いえ、別に。決して私の看病を“不器用でも愛らしいキティの看病を受けたいから茶々丸は何もしないでね”とアホな理由で断つたからとかじやないです。・・・私だつて心配したのに」

「ん？ 最後なんて？」

「・・・ぜんぜん怒つてないと言つたんです。」

「怒つてるんじゃない。」

「いえ、別に。」

「怒つてるんでしょう？」

「いえ、まったく。」

「怒つてたりする？」

「いえ、微塵も。」

「正直になつたほうが身のためよ？」

「正直に申しますと、リア充爆発しろと言いたくて溜まりません。ていうか、クマあたりに五体引き裂かれて死ねば良いのに。」

「聞きたくなかったわ・・・うん。」

「リンゴ、私が買つて来ましょつか？」

「うーん。無いならないで……」

「あ、そういうえば瑞々しいものありました。」

「何?」

個人的にはナシ希望。でも無かつたわよね?」「ところてんです。」

「は?」

「のびー」し爽やか、ところてんです。」

「いや、風邪の時にところてんは……ちよつと気分ではないわね。」

「のびー」し爽やか、ところてんです。」

「のびー」し爽やかってフレーズが好きなの?」

「・・・少し。」

ほんのりと頬を赤らめた茶々丸であった。

「姉様・・・どうです?調子は?」

「大丈夫。キティの口移しころてんのお陰で、全快よ!…」

風邪はと言つと一時間もすれば治つてしまつた。

・・・まあいいや。

ちよつと残念だつたりする。

もうちよつとキティに優しくされたかつたです。

「さて、予想以上に簡単に治つたわけだけども・・・さすがに

君の様子を見に行きましょうか?」

「あの坊やの様子・・・ですか?」

「ええ、今日来るつて言つてたでしょ？」「

「ああ・・・そういうえは。面倒を見てあげるのですか？」

「まさか。ネギも男よ。やうやく簡単に助けてあげてたらあの子のためににならないでしょ？」

むしろこいつから窮地に追い込むへらこはしてやらないとね・・・
ふふふふふふふふ。」

「また・・・悪巧みですか。」

「別にそれほど大したことじやないのよ？

クルト君からちよつと面白い話を聞いただけで。」

「面白い話？」

「まあキティがネギに会えば分かることよ。ついでにキティの入学準備も進めましょうか。」

「は？」

「ふふふ。」

とつわけで、私たちは校長室にやつてきた。

「久しぶりね。このつち。」

「ワシをそんなフレンドリーに呼ぶのはおぬしだけじや。」

ぬらりひょん。もとい学園長が渋い顔で私たちと対面する。

「守護者、管理者のおぬしが・・・あのバタフライマスクだったとはな。」

「あり？」

「知ってるの？」

「・・・嬢殿からの。」

「詠春君には種明かししてなかつたはずだけど・・・アル君から聞いたのかな。」

「そしてお主があの馬鹿の娘・・・いや、息子であることも知つて

おる。」

「・・・それはどこからかしら?」

そのことを知つてるのはフュイとんのみ。もちろんフュイとんとの
のつちが繋がつてゐるはずも無く。

クルト君はあくまでも今の私しか知らない。

私が英雄の息子であることは知つても、大戦期に活躍したとか、
マホラに住んでいたとか。そこまでは知らないはずである。
逆にアル君たちは私が大戦期に活躍したとかマホラに住んでいたとか
それは知つても、私たちがナギの子であることは知らない。と
いうかまだ生まれてなかつたはずの人間なのだからそんな発想はま
ずありえない。

別にどちらか片方を知つてゐるだけならば問題が無い。

この一つの事柄を“知りつつも”私を英雄の“息子”だと断言して
いるのが警戒を抱かせる理由だ。

私の背後で控えてる愛らしいキティも警戒の色を示して
生まれてないはずの人間が過去に飛んでいる。それを信じて
というのが問題なのである。いかに魔法世界と言えど時間移動魔法
は存在せず、スペ君ですら使用できないのである。
ま、そもそも私は魔法世界の牢獄に要るつてことなんだけども・・・
裏側も含めて知つてゐるでしょう。

「そう殺氣を向けられると老体には堪えるんじゃがのう。」

「全然そつは見えないので?」

普通に座つてゐるだけに見える。

一応、こっちの方が長生きしてゐるんだけど見た目でなんとなく貴禄
を感じないことも無くもない。

見た目つてやっぱり多少なりとも大事だなあとか再認識する次第で

ある。

とは云ふ、まあおそれらへ相手は内心一杯一杯だらうがさう。

「冗談はよしてくれ。お主……分かつてやつておるじやうひ~、「内心の恐れを出さないように精一杯みたいだから、その努力に免じて気づかないフリをしてあげたんじやないの。」

「……ぐぬ。可愛くないのう。」

「まあ見た目以上に生きてるからね。

そこまで知ってるなら、私がどれくらい生きたのかも推し量れるでしょ~う?」「

「800年ほどじやつたか?」

「……ふむ。考えられる理由としては……しばらく前からこの辺の地下に住み始めたアル君かしら?」

「……さて、どうかのう?」

「とぼけなくても良いわよ。

・・・たく、あの男女。

嘘を付いていやがつたわね。」

「姉様、どうこうことですか?つていうか、姉様も男女かと。」

「イノチノシヘンは名前と会うこと・・・が条件じやない。おそれらへ、会うこと。それだけで十分なのでしょうね。」

「ツツツツのほうはスルーですか・・・」

「私の人生は丸見え・・・ってことね。まあ別にいいわ。本題に入りましょうか。」

まあ色々思つといふはあるが瑣末なことはさておいて。

「それももうじやのう。」

今までそちらから干渉すること無かつたと言つのと、元のうつ風の吹き回しじや?」「

「最近、やたらと周りが騒がしいわよね?」

「・・・まあ隠しても無駄じゃな。

「せつじや。相手は関西呪術協会」

「別に相手がどいつとか、理由がなんだとか。

そんなことはどうでもいいの。

ただこちから提案よ?」

「提案?」

「せつ、提案。悪くない提案よ?」

「・・・聞こいつ。」

ヒゲをわすつながら聞く姿勢をとる、このつか。

「キティを学園に入れたいの。それと私もね。」

「ね、姉様ツ!?

キティがイキナリ私の言葉に驚く。

まあ今更学校とかね?

「何故じや?」

「ネギのお守り・・・かしら?あとは単純にキティとの学園生活を
楽しみたい・・・といふか」ちがメインね。」

「・・・色々とツツミミたこことはあるが、それで?」

今までこちから干渉するなど言ことつもそちらから干渉してくるの
じや。

それなりの詫び・・・と言ひては難だが対価は貰えるのじやうつな
?」

「ええ、だからその関西呪術協会とやらの嫌がらせの沈静化を手伝
つてあげるわ。」

「ふむ・・・それだけじやちと弱いの?」

既に入手は足りるし、万が一に備えると言つのもタカラチ君やワ
シもいる。必要性がそれほどあるとこつわけでもない。」

「お姫様。

近衛このか姫の護衛も兼任してあげましょ。すぐなくとも関西との仲が良くなるまではね。

これでどうかしら?」

「それものう?

すでに優秀な護衛を付けておる。」

内心喜んでいるくせに、食えない爺である。

私達クラスの護衛となればそれこそ国家予算並みの値段がかかつても良いレベルなのだ。

それをちゅぢゅっと学校の生徒名簿を弄る。それだけで世界を相手にしても守りえる鉄壁を手に入れられるといつのこと。まあこれを言つても、別に本当に全世界を相手にするわけではないから必要ないが。備えあれば憂いなしとこつ言葉もある。このつちこどはむしろ美味しい話だわ。

その部分をおぐびに出でやすより沢山の交換条件を引き出さうとしてゐる。

あわよくばマホラの土地の使用料の割引を願つていそつだ。とはいえだ。

そつそつ思に通りになつてやるつもつは無い。

「あら?

なら別に良いわ。

マホラでなければダメと言つひととも無いし。

普通の学校に通うから。」

「む・・・まあそれでも良いがのワシは。面倒がなくなるじゃねつし。

「ちなみに戸籍が無いとか、他の学校に入れないと根回しきするとか。

無駄よ？

戸籍はまあ大きな声ではいえないけれどお金を積みさえすれば買えるし、根回しもこちらが上手よ。ていうかそんなことをしてるのが分かつたら、貴方・・・潰すわよ？」

キティとの楽しい学園生活。それを潰そうとするやつは何人であるうと叩き潰すまでっ！！

「うぬう。

「最後にもう一度だけ・・・“お願い”するわ。

私たちをこの学校に入れて？」

「・・・ふう、良からう。

好きにせい。」

「あら？

良いの？」

「白々しい」とを言つ出ないわ。」

こつじてマホラ学園に入学が決まった私たちだつた。
交渉が終わり、帰ろうとした時。

「姉様、この魔力は・・・」

「ええ、ますいわね。」

ネギがこの部屋にやつてくるつぽい。
久しぶりに会うネギ。

自分で修行はちゃんとしてただろうか？

ちゃんとお風呂は毎日入つてゐるだろうか？と声をかけたくなるが、
この姿。もといアリス・スプリングフィールドとしてここにいるのは不味い。

アーティファクトを呼び出し、装着。

女体化し、離着。

黒髪に染めて、準備完了。

しばらく会つて無いし、胸が多少膨らんでる今の私なりばどじから
ドウ見ても可憐な女の子。

ネギは私が男だと言うのは知つてるので、あとは他人の空似だつ
てことで済ませることが出来るはず。

当初は私はマホラ学園に通うつもりは無く、ネギのお守りがてらキ
ティが学校に行きそれに私もオーバージョの姿で付いていくと言つ予定
だつた。

が、どうせならキティと学園的な楽しさを共有したいと思つた結果、
考えたのが今の姿である。

ちなみにこの姿の時は名前をリース・マクダウルとした。
アリスをもじつて名字はキティのを貰つただけである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8536r/>

ネギま！の世界で魂生成～キティとのラブイチャ日記～
2011年11月20日12時15分発行